赤松中学（あかまつ・ちゅうがく）

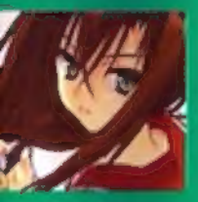
生年月日、年齢、出身地、現住所に至るまで全てが不明の覆面作家。
「アストロノト!」で第３回MF文庫Jライトノベル新人賞優秀賞を受賞。
本作・武装学園小説『緋弾のアリア』は、同作家の２シリーズ目となる。

こぶいち

ゆずソフト所属の原画担当。
代表作は『ぷらばん!』『EX5』『夏空カナタ』『矢神乱漫』。
小説では「これはゾンビですか?」（富士見書房）の［illegible］挿絵を担当。
趣味はゲーム、読書。
ゲームはもっぱら音楽ゲームばかりをプレイ中。
http://tyotsune.blog57.fc2.com/

カバーイラスト／こぶいち　　装丁／百足屋ユウコ（ムシカゴグラフィクス）

MF文庫J
あ-05-07



緋弾のアリアⅣ

赤松中学

MEDIA VI FACTORY

580

9784840128735

ISBN978-4-8401-2873-5
C0193 ¥580E

1920193005806

定価：本体580円（税別）
メディアファクトリー
MEDIA VI FACTORY

緋弾のアリアⅣ 堕ちた緋弾（スカーレット）

東京武偵高校、そこは武力を行使する探偵――通称『武偵』を育成する特殊な学校。強襲科の超エリートでSランクの最強武偵・アリアのパートナーに選ばれてしまった（普段は）ただの一般人・遠山キンジは、夏休みを利用して足りない単位を補うことに。キンジが目を付けたのは、カジノの警備というちっぽけな任務――のはずだったのだが……。「砂礫の魔女（うるる）」バトラの呪弾に倒れたアリアの死まで24時間。そしてキンジの前に立ちはだかる「不可視の銃弾（インヴィジブル）」の使い手、カナ。アリアを消そうとするカナの真の目的とは!?　大スケールアクション＆ラブコメディー第4弾!!

MF文庫J 赤松中学の本

アストロノト！［イラスト：bomi］

アストロノト！2［イラスト：bomi］

アストロノト！3［イラスト：bomi］

緋弾のアリア［イラスト：こぶいち］

緋弾のアリアⅡ 燃える銀氷（ダイヤモンドダスト）
［イラスト：こぶいち］

緋弾のアリアⅢ 蜂蜜色の罠（ハニートラップ）
［イラスト：こぶいち］

緋弾のアリアⅣ 堕ちた緋弾（スカーレット）
［イラスト：こぶいち］

緋弾のアリアV

Aria the Scarlet Ammo

堕ちた緋弾（スカーレット）

赤松中学

Kanzaki H Aria
強襲科（アサルト）
神崎（かんざき）・H・アリア
名探偵の遺伝子を受け継ぐ、
Sランクの凄腕武偵。母親を救うため、
犯罪組織「イー・ウー」と戦っている。

探偵科（インケスタ）
遠山（とおやま）キンジ
しぶしぶアリアのパートナーをつとめる
Eランク武偵。ある特殊体質のせいで、
異性が苦手。
Kinji
Tohyama

探偵科
インケスタ
峰理子
みねりこ
超能力捜査研究科
S S R
星伽白雪
ほとぎしらゆき
車輛科
ロージー
武藤剛気
むとうごうき
強襲科
アサルト
レキ

インフォルマ
情報科
ジャンヌ・ダルク
アサルト
強襲科
不知火 亮
???
カナ
アームド
装備科
平賀文

「お前たちは未熟すぎる。
パトラ如きに不覚を取るようでは、
『第二の可能性』は無い」

P11 1弾 不可視の銃弾（インヴィジビレ）

P23 2弾 緊急任務（クエスト・ブースト）

P82 3弾 夏祭り

P133 4弾 同士討ち（フォーリング・アウト）

弾 砂金の楼閣（アブシンベル）

P256 最終弾
緋弾の覚醒

P281 エピローグ
Go For The NEXT!!!

Contents

緋弾のアリアⅣ

堕ちた緋弾（スカーレッド）

赤松中学

MF文庫
J

絵・本文イラスト●こぶいち

編集●笹尾明正

1弾　不可視の銃弾（インヴィジブル）

「これから、緒に――アリアを殺しましょう」

カナは、確かに、そう言った。

アリアを、殺す？

「なにを……何を言ってるんだ、兄さん……!?」

額（ひたい）に、冷や汗が滲（にじ）む。

夕焼け空が、1秒ごとに濃紺の夜空へと変わっていく。

無人の人工浮島・『空（あ）き地島』に吹く海風の中、兄さんは、

「？」

と、風力発電機のプロペラに座ったまま小さく首を傾（かし）げた。

……そうだ。

そういえば……

絶世の美女・カナになりきった時、兄さんは『兄さん』と呼ばれてもそれが自分のこと

だと分からなくなってしまうのだ。

「カナ。待ってくれ。今そっちに行く」

と呼び方を変えながら、俺は4月に自分で不時着させたボーイング737の傾いた翼を坂道を上るようにして渡っていく。

アリアを、殺す？

なにかのマチガイだろう。冗談だろう。

そう、自分に言い聞かせつつ。

カナは――兄さんは、誰よりも正しい人だった。

力弱き人々のことを第一に考え、貧しい人からは報酬もロクに受け取らず戦っていた。

どんな強大な敵にも、自らの危険を顧みず立ち向かっていた。

その兄さんの口から――なぜ、そんな言葉が？

「半年ぶりに会えたと思ったら……アリアを、殺す……だって？　タチの悪いおふざけはやめてくれ、カナ」

俺は翼端ギリギリまでカナに歩み寄った。

ここからカナが腰掛けている風力発電機のプロペラまでは――およそ2メートル。

飛び移れない距離じゃない。

だが……高さが、かなりある。転落したら命は無いだろう。浮島とはいえ、空き地島の

表面はコンクリートで厚く塗り固められたものだからな。

「ふざけてなんかないわ。私は今夜、アリアを殺す」

カナの、宝石のように堅固な意志を秘めた美声。

「アリア。神崎・H・アリア。あの少女は――巨凶の因由。巨悪を討つのは、義に生きる遠山家の天命――」

そのセリフに……俺は、背筋が凍る思いがした。

義。

すなわち、『正義』。

その言葉を口にした時、カナが目的を成し遂げなかったことは今まで一度も無いのだ。

――マズい――

失踪から戻ってきたカナは、戻ってくるなり――どうしてなのかは全く分からないが、本気で『アリアを殺す』つもりらしいぞ。

理由は、本当に、分からない。俺の頭は混乱を通り越して真っ白だ。

だが、今すぐ止めなければ……カナは本当に、アリアを殺してしまう!!

その直感に突き動かされた俺は、15メートルはある眼下を見てから――

瞼の裏に、さっき、母親の裁判が有利になったと喜んで抱きついてきたアリアの笑顔をよぎらせながら――

「カナー」
半ば勢い任せに、バッー
翼端から、風力発電機のプロペラへと飛び移った。
だんっ、と着地したプロペラはベンチほどの幅があり、飛び移ること自体は難しくなかったが――
ぐらり。
2人分の重量に、少し揺らいだ。
「うッ……！」
ヒヤッとした俺は身をかがめ、重心を低くしてバランスを取る。
その一方で、眉一つ動かさずにいたカナは、
「出エジプト記32章27――汝ら各々、劍を帯びて門より門と営の中を彼処此処に行き巡り、その兄弟を殺し、愛しき者を殺し、隣人を殺すべし……ついて来なさい、キンジ」
聖書の一節を諳んじつつ、煌びやかな東京のイルミネーションを背に立ち上がった。
「アリアはまだ幼い。パートナーさえいなければ、きっと簡単に仕留められる相手だわ」
「だから待てよ、カナ！」
俺はつい、驚きと怒りに任せて声を荒げた。
「あんた……半年も失踪しといて――いきなり何だよそれ！　今日まで、俺がどんな思い

でいたか分かるか!?　それを急に……アリアを殺すだって!?　何なんだよそれは!」

ああ。カナに怒鳴るなんて。

絶世の美女に化けるという手法はともかく、遠山家の一族に伝わるヒステリアモードを完璧に使いこなし――その高潔さと強さに憧れていたカナに、こんな口をきくなんて。

自分が信じられない。

だが、もっと信じられないのはさっきのカナの発言の方なんだ。

「……そう。あなたも、修羅場を幾つか越えたのね」

カナの、穏やかな声。

「なんだよ……それ」

「目を見れば分かるわ。悔しい事だけれど――イ・ウーは、外でも人を育ててる」

イ・ウー。

カナの口から出たその単語に、冷や汗が滲む。

イ・ウーとは理子、ジャンヌ、ブラドといった超人たちを輩出した学校の様な秘密結社で、アリアの母親に懲役864年もの冤罪を着せた無法者の組織だ。

「カナ……カナは、イ・ウーにいたのか……？」

俺の問いかけに、カナは薔薇色の唇をつぐんだ。

沈黙の時が、夜の海風と共に流れていく。

「なんでだよ……！　なんでカナが、あんな組織に――！」

俺の言葉にカナは小さく首を横に振り、

「イ・ウーの話は――できないわ。あなたを危険に晒したくない。キンジ。今はただ何も言わず、私に力を貸してほしいの」

そう、返してきた。

俺の胸には――激怒とも絶望ともつかない真っ暗な感情が湧いてくる。

目には、なんだか分からない涙さえ滲んできた。

「おいでキンジ。キンジが私の言うことを聞かなかったことは……なかったよね？」

囁くように告げられた、優しい、懐かしい、カナの声。

ああ……

そうだよ。

そうだよカナ……兄さん。

俺は、誰よりも正しく、優しく、そして強いあんたを――信じてた。

だから、あんたに言われたことは何だって、心の底から喜んでやっていた。

「私はキンジを信じてる。きっと、力を貸してくれるって」

カナの声に俺は顔を伏せ、辛い現実から逃げるように目をきつく閉じる。

アリア。なんで俺が。なんで、お前を殺さなきゃならないんだよ……！

今まで共に戦い、共に過ごしてきたアリアの姿が、頭の中にリプレイされる。
峰・理子・リュパン4世、魔剣・ジャンヌ、ドラキュラ・竜悴公と勇敢に戦ったアリア。
俺の家に押しかけてきて、ももまん食い散らかして、テレビ見て、はしゃいでたアリア。
「おいで、キンジ。仕事は、晩で済むから」
背後でひしゃげてる飛行機の中で、アリアと、キスした――
それを思い出したとき、同時にかけられたカナの言葉に。
「――――」
バッ――――！
自分でも、なんでか分からなかった。
俺は――腰のベレッタを抜いていた、のだ。
照準は、カナ。
その正中線に向けている。
武偵高を……アリアと共に過ごした場所を背に……
まるで、守るように立ちはだかりながら。
「……」
カナは――
美術品のような目を、少し見開く。

『どういうこと？』

言葉は無かった。だが、そう心に問いかけるような視線を送ってくる。

俺にも……分からない。

なぜ俺はいま、カナに銃を向けているんだ？

誰よりも尊敬していたハズの人に。

どうして……！

「……軽々しく武器を見せるのは、よくないわ」

まるで蝶が羽ばたくように、カナは小さな溜息をもらした。

「見せてしまえば、装弾数、射程距離、その武器の長所や短所まで……全てを見抜かれてしまう。覚えておきなさい」

――パァン！

銃声――！

だが、俺の目が捉えたのはカナの手元で弾けた閃光のみ。

発砲音と同時に、ピュンッ！　という不快な音が右耳を襲った。

強襲科で何度か経験したから分かる。これは、耳のすぐそばを銃弾が飛んだ音だ。

体が本能的に右半身を守ろうとして、左に大きく傾いてしまう。
（うッ！）
俺はプロペラから足を踏み外して滑り落ち――間一髪でベルトに内蔵していたワイヤーを引っかけ、なんとかプロペラの直下3mほどの所にぶら下がった。
なんとか落とさなかった拳銃をホルスターにしまうと、俺はカナを睨み上げる。
今のは――銃撃。
だが、銃が全く見えなかった。
あれは兄さんの技の1つ、『不可視の銃弾』、だろう。たぶん。
俺も兄さんの同僚から昔聞いた事があるだけだから仕組みまでは分からないが、『不可視の銃弾』とは、その名の通り銃が見えない銃撃である。
いつ銃を抜いたのか、いつ狙われたのか、いつ撃たれたのかさえ分からない――反撃はおろか、人間には反応すら一切できない攻撃だ。
数多の凶悪な犯罪者達を倒してきたその技を、カナは弟の俺に使ったのだ。今。
カナはプロペラの縁に立つと……パァン！
と身体の脇をまた一瞬光らせて、銃弾を放った。
――やはり銃は見えない。
ピシッ、という僅かな感覚が手元に伝わってきて――俺は驚愕に目を見張る。

プッ……プッッ……と、プロペラのすぐ下の辺りで、俺がぶら下がっているワイヤーがほつれるようにちぎれ始めているのだ。

見えない2弾目は、俺のワイヤーを『掠めた』らしい。

なんという超・精密射撃だ。この携帯のストラップみたいに細いワイヤーを、拳銃弾で『切る』のではなく――敢えて、『掠める』なんて！

「……予想もしなかった。キンジが私に銃を向けるなんて。まるで、蟷螂の斧――」

プロペラの上ではカナが、何かに迷うような、物憂げな表情をしていた。

「私とキンジの戦力差は、大人と子供……ううん、それ以上ある。分かってるわよね？」

ああ。分かってるよ。そんなこと。

たとえ俺がヒステリアモードでも、あんたには勝てないだろう。

「……なのに、どうして私に立ち向かったの？」

カナは悩むように、そう尋ねてくる。

だが、ワイヤーが切れそうな俺はそんな話をしてる場合じゃない。

プロペラまで戻ろうと手を伸ばすが――普通に縄を上るようにはいかないぞ。

手に伝わるピシ、ピシ、という振動から、ワイヤーが刺激を与えられるたびに少しずつ切れていくのが分かるのだ。

ワイヤーを揺らさないよう、そっと、慎重に上らないと……！

「……キンジはアリアと、なかよしなの？」
その表情を悩ませていたカナは……
長いまつげの目を、す、と流し目するように向けてきた。
「――好きなの？」
「……何が……だよッ！」
「アリアのこと」
聞かれて、かあっ、と頭に血が上るのが分かる。
「なんで――そうくるんだよ！」
ワイヤーを半分ほど上った俺は、カナに牙をむくようにして叫んだ。
カナは少し驚いたような――そして、なにか心に迷いが生じたような眼をする。
「……昔からキンジは打たれ強い子だったけど。その状況で、まだそんな眼ができるのね。私には分からない。キンジの心のどこに、そんな力が秘められているの……？」
自問するようなカナに何も答えず、俺がワイヤーをもう一動作上ろうとした、その時。
ざあっ――！
一陣の突風が、空き地島の上を駆け抜け――
――プツンッ――

強風に流された俺(おれ)の動きに、あっけなくワイヤーは切れて。
俺は、暗闇(くらやみ)に、呑(の)まれて――いった。

2弾　緊急任務（クエスト・ブースト）

ハッ――
と、朝日の中で目が覚めた。
……
……
状況を理解するのに、数秒、かかる。
お、おい……
おいおい……
……夢……だったのか？　全部。
PCの前で、俺はイスに座ったまま眠っていたのだ。
ディスプレイでは、スクリーンセーバーがWindowsの文字をクルクル回転させている。
マウスを掴むと、理子の作ったFlashが『Replay?』という文字と共に表示された。
そう。

俺は……これを見て……カナに会えるという時間まで、仮眠でもしようと思った……？
そして兄さんに、カナに……会った……夢を見ていたのか？
だが夢でカナは、『今夜、アリアを殺す』って……！
夢の中で切られたワイヤーをベルトから引き出すと――切れてない。交換された、とも疑おうと思えば疑えるが、ワイヤーが新しいか古いかまでは分からない。
（――アリア）
俺は立ち上がると、閉ざされていた寝室の扉を急いで開く。
そこでは……
すぴー。
すぴー。
アリアが、2段ベッドの上段で寝息を立てていた。
だらーんとツインテールの片方をベッドから垂らし、こっちに寝顔を向けている。
にへらーっと寝ながら笑ったと思ったら、手を口元に持ってってガムを噛むようにエアもぐもぐを始めた。
……脱力するぐらい……幸せそうな顔をしているな。
好物のももまんを食ってる夢でも見てるんだろう。
俺は、フーッ、と安堵の息をついて……ようやく、自分が全身にびっしょりと気持ちの

悪い寝汗をかいていた事に気づくのだった。

……そうだ。あれは夢だったんだ。

シャワーで汗を流しながら、俺は自分に言い聞かせるように心に呟く。

武偵法9条。

武偵は如何なる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。

武偵のカナが、誰かを『殺す』だなんて言うワケがないんだ。

カナは……どんなに困難な事件でも、1人の死者も出さずに解決しようとする人だった。

そして、それができる人だった。

敵地に孤立してしまい、他の武偵たちが見捨てたような絶望的な人命でも助けに行った。

戦略上の捨て石になったような武偵でさえ、生還させることのできる人だった。

カナと共に戦って、死亡した武偵は――いない。

そんな兄さんが、アリアを『殺す』だなんて言うわけがないんだ。

それに……夢の中のカナは『今夜、アリアを殺す』と宣言した。

その今夜とは、昨夜。つまり、もう過ぎている。

カナは、自分が宣言した戦いのタイムリミットを超過したことは一度も無い。

そしてアリアは今、まだ生きている。

だからあれは夢だったんだ――
悪い、夢だったんだ。
――多分。

起きてきて制服――今日から、夏服だ――に着替えたアリアに、さりげなく昨日の事を聞いてみると……
「昨日の夜？　はんは、あらひが帰ってきたらパショコンのゐふで寝てたわよ？」
アリアは愛用のこどもはみがき・イチゴ味で歯を磨きつつそう答えてきた。
ぶくぶく、ぺー。
口をすすいだアリアは、次は冷蔵庫からミルクを出し、砂糖をドッサリ入れて飲む。
歯磨きと朝食（？）の順番……逆にした方がよくないか？　お前。
そんなことやってると虫歯になるぞ。
俺は中学の頃、上下2本も虫歯になった奥歯に歯医者で硬質セラミックをかぶせられたから知ってるが……虫歯の治療は、超・超・超痛いんだ。
などと思いつつ、俺はどこで何を教わったのか知らないが毎朝の習慣通り大量の牛乳を飲むアリアを見て――本物のアリアだ、生きてる、などとまだ昨夜の夢を引きずり気味の感想を胸に抱くのだった。

あ、こら。アリア。
冷蔵庫をハイキックで閉めるな。
最近だんだん信じられなくなってきたが、ここは俺の部屋なんだぞ。もともと。
「……アリア」
「なに」
「学校。一緒に行くぞ」
俺は弾倉を確認したベレッタをホルスターに収めながら、初めて――
アリアを、自分から登校に誘った。
「……なによう。いつもあたしと学校行くの、迷惑そうにしてるくせに」
皮肉を言いながらも、アリアはちょっと軽やかな手つきで自分の通学カバンを持つ。
「ちゃんと帯銃したか？」
尋ねるとアリアはキョトンとその吊り目気味のおめめを丸くして……ネコっぽい犬歯を見せて笑い、スカートから白銀のガバメントを出し、クルルっと回して見せた。
「へー。キンジにしては高い警戒心ね。武装確認は、いい習慣よ」
びぃー……と朝から鳴いているアブラゼミの音の中、俺はチャリをこいでいる。
俺の肩に手を乗せて後輪のステップに立つのは、2人乗りしているアリアだ。

バスには間に合う時間だったが、なんとなく今朝はアリアを普段と同じ経路で通学させたくなかった。心の奥底で――まだ、あの夢が引っかかっていて。

……にしても体重軽いなー、こいつ。知ってたけど。

「たまには気持ちいいわね、自転車で学校行くのも」

「お前はこいでないけどな」

「武偵高では忘れがちなことだけど、武偵は奇襲に備えて、いつも同じ道は歩かないようにするのがセオリーよ。それに、バスより健康にもいいしね」

「こいでる俺にとってはな」

「風穴」

2回ばやいたら、もう省略形で脅された。

日本に発言の自由は無いんですか。

……ちなみにこのチャリは、アリアのものだ。

アリアはこないだマウンテンバイクを買ったと自慢していた。ので、今朝はそれで学校行くかと提案したら「やっとかかったわね」って顔で同意してきたのだ。

自転車置き場でそのチャリの所まで行くと……サドルはそうとう上げなければいけない状態だったが、後輪の軸には左右に2人乗り用のステップがぴょこんと付けられていた。

最初っから俺にこがせるつもりで買ったんだろうな。これ。

「でも……なんか妙に武偵らしいわね、今日のキンジは。やっと、あたしに合わせる気になったわけ？　なんで？　何かきっかけでもあったの？」

カンのいいアリアが、後ろから尋ねてくる。

……どう答えようか。

お前が殺されそうになる夢を見たから、なんて言うのは……ちょっとな。

「それは……その。俺とお前はパートナーだろ。当たり前のことをしてるだけだ」

半分振り返って適当に答えておくと、アリアはその赤紫色の瞳をまばたかせ――

「そ、そうね……そうねっ」

初夏の日差しにも負けないくらい、まぶしい笑顔になった。

なにやらテンションが上がったらしく、アリアは無意味にぽんぽんステップの上で跳ね、サスをギッシギシ鳴らす。あーくそっ。やめろって。こぎにくいだろ。

俺がパートナーらしく振る舞うのが、よっぽど嬉しいんだな。こいつ。

アリアのチャリを一般校区の自転車置き場に停めると、教務科からの連絡掲示板の前に生徒が集まってるのが見えた。

その中に――見覚えのある後ろ姿があったので、俺は足を止める。

ジャンヌ。ジャンヌ・ダルク30世だ。

見れば、ちょっと幅広の松葉杖をついているな。
「ジャンヌ」
俺の視線を追ったらしいアリアが、その名を呼ぶ。
ジャンヌはクルッと髪をなびかせて振り返り、俺を見て『こいこい』と手まねきした。
アリアが先にジャンヌの方にずかずか歩いていってしまったため、俺もついていく。
「――あんたが武偵高の預かりになったのは知ってたけど。似合うじゃない、制服」
アリアはいきなり身長差を感じさせないでかい態度で、ジャンヌにイヤミを垂れる。
ジャンヌは「フン」と鼻を鳴らし、そっぽを向いた。
「私は遠山を呼んだのだ。神崎・H・アリア、お前に用はない」
「こっちにはあるの。――ママの裁判、あんたもちゃんと出るのよ？」
「……分かっている。それも司法取引の条件の一つだからな」
イ・ウーと呼ばれる組織によって冤罪を被せられたアリアの母親、神崎かなえさんは今――東京拘置所で、最高裁での裁判を待っている状態だ。
彼女は2審までに事実上の終身刑を言い渡されているのだが、その無実を一つ一つ証明することができれば、無罪判決を勝ち取るチャンスも増える。
母親の無実をジャンヌに証言させる約束を取れたアリアはニンマリと笑い、
「ま、ケガしてるみたいだから、イジメるのはまた今度にしといてあげる」

と、勝ち誇るように無い胸を張って見せた。
「……私は、今すぐでも一向にかまわないぞ？」
そんなアリアにイラッと来たらしいジャンヌが、ちょっとケンカ腰になる。
「『構わない』って、あんた杖ついてるじゃない」
「足一本ぐらい、ちょうどいいハンデだ。それにこの杖には聖剣デュランダルが仕込んである。星伽白雪に斬られたあと、寸を詰めて幅広の鎧貫剣に造り替えたのだ」
プライドの高い2人が……バチバチ、と視線で火花を散らし始めたので、俺は、
「こらお前ら、朝っぱらからケンカすんな。ていうかジャンヌ……足、どうしたんだよ」
話題を逸らしてやりつつ、ジャンヌに話しかけた。
ていうかデュランダル……仕込み杖にされてんのか。
聖なる武器にしちゃ、扱いがひどくないか？　まあ俺には関係のないことだが。
「……虫が、な」
「虫？」
「道を歩いていたら、コガネムシのような虫が膝に張りついたのだ」
「……はあ」
「私は驚いてな。そのせいで、道の側溝に足がはまった」
「……」

「そこをちょうど通りかかったバスにひかれたのだ」
「…おい……」
「全治2週間だ」
ジャンヌお前……ドジだなあ。見かけによらず。
まぁ、バスにひかれて全治2週間で済んでるあたりは、さすがジャンヌというかなんというかだが。
「……それはそうと、遠山。お前の名前がここにあったぞ」
とジャンヌが指した掲示板に、俺は目を向けた。
そこには『1学期・単位不足者一覧表』と書かれた張り紙が画鋲のかわりにサバイバルナイフで留めてあり（誰か直せよ）、リストには……確かに、俺の名前もあった。

『　2年A組　遠山金次　専門科目（探偵科）　1・9単位不足　』

不足単位――1・9単位！
その数字に、頬が引きつる。
武偵高も、応の、応は日本の高校なので……文科省の学習指導要領通り、単位を取った生徒でないと進級はできない。

で、2年生は1学期――俺には2学期の始業日までに2単位取らないと、留年なのだ。この単位、自分の所属する専門科が民間から受けてきた任務を完了することでもらえるのだが……俺は……思い返してみれば、探偵科の任務をほとんどやっていなかった。主に、アリアに振り回されてたせいで。

やばい。

またしても俺は、平凡な高校生の世界から一歩離れかけているぞ。

武偵高さんよ。他にハイジャックとか解決してんだから大目に見てくれよな。ほんと。

「どうやらお前は問題児のようだな、遠山。しかし安心しろ」

と、ジャンヌが隣の掲示板を示すと……そこには『夏期休業期・緊急任務』と書かれた張り紙があった。

そうだ、これがあった。

緊急任務。

武偵高では単位不足はよくある事なので、休み中に解決すべき任務を学校が割引価格でたくさん請けてきてくれるのだ。一般の高校でいう、補習授業みたいなものである。

この緊急任務、そのぶん報酬は安くなるが――単位の帳尻合わせはできる。

「キンジあんた留年するの？　バカなの？」

「うっせぇー　今そうならないためにこれを見てるんだっ！」

俺は横から顔をのぞき込んできたアリアを押しのけ、1・9単位取れる仕事を探す。
『港区　大規模砂金盗難事件の調査（探偵科、鑑識科）』……1・7単位。おしい。
『港区　工業用砂鉄盗難事件の調査（探偵科、鑑識科）』……0・9単位。だめだ。
『港区　砂礫盗難事件の調査（探偵科、鑑識科）』……0・5単位。話にならん。
ていうか何で砂系のものばっかり盗まれてるんだ港区は。
『港区　カジノ「ピラミディオン台場」私服警備（強襲科、探偵科、他学科も応相談）』
……1・9単位。
「これだ……！」
俺は掲示板に張り付き、詳細を確認する。
要・帯剣もしくは帯銃。必要生徒数4名。女子を推奨。被服の支給有り――
少し引っかかる部分はあるが、1・9単位も取れる仕事はこれしかない。
カジノとは日本でも近年合法化された公営ギャンブルの一つで、会場には用心棒として武偵が雇われることが多い。とはいえ実際のところはほとんどトラブルが起こらないので、武偵業界じゃ『腕が鈍る仕事』としてバカにされているのだ。つまり、俺にちょうどいい。
俺は大急ぎで日程を確認し、携帯から登録希望のメールを送ろうとして……
その手を、止めた。
俺の隣、斜め下からキョトンと俺を見上げているアリア――

仕事を請(う)ければ、少なくともその間はアリアを一人にすることになる。

――『アリアを、殺しましょう』――

あの夢に出てきたカナのセリフが、どこかから聞こえてきた気がして。

「アリア」

バカげてる。あんな、たかが悪夢に怯(おび)えるなんて。

だから……

だから、これっきりにしよう。

「お前もこの仕事(クエスト)、一緒にやれよ」

これっきり、もう、あの夢のせいでアリアの事を不安がるのはやめにしよう。

俺(おれ)は心の中でその最終ラインを引くように、アリアに向き直った。

「……なんで？　あたしは単位、不足してない」

ほっぺを膨(ふく)らまして言うアリアに、俺は――

「パートナーだろ」

とだけ、また返した。

言われたアリアは赤紫色(カメノア)の目を見開いて、一瞬驚いたような顔をする。

そしてもったいぶるように腕組みして横を向き、検討しているような仕草を見せた。
「ふーん。キンジがあたしを仕事に誘うなんてね。ま、いい傾向といえるわね」
だがその横顔は、にやぁー。俺に初めて仕事に誘われた嬉しさを隠しきれていない。
「最低4人必要って書いてあるし……そうね。パートナー同士、困った時はお互いさま。
――やってあげてもいいわよ？」

綴先生が二日酔いだかバソドトリップだったかで休講だった2時間目の後、3時間目は体育――プールで水泳の時間となった。
だがこの授業がまたいいかげんで、体育教師も兼任している強襲科の蘭豹が「拳銃使いながら水球やれ。2、3人死ぬまでやれ」と言い残してすぐ帰ってしまった。
というわけで生徒たちも、ほとんど全員フケてしまっている。
本当に大丈夫なのかよ、この学校。
俺は……昨夜イスで寝てしまった事もあり少し身体がダルかったので、プールサイドのデッキチェアで横になって携帯をいじっていた。
こうしていると、疲れは取れるな。ここは屋内プールだから日差しもないし。
この普通じゃない高校でも、さすがにプールの授業は男女別。だからここにはいないが、アリアは……ちゃんと泳ぎを習ってるのかな。

あいつ、泳げないんだよな。たしか。

浮き輪に加えて手首にもミニ浮き輪をつけて、それでもあっぷあっぷと溺れるアリアの姿を空想していると……

「おー、ほとんど人がいねえ！　おーい不知火、プールから上がれよ！　ジャマだ！」

という、車輌科・武藤剛気の声が聞こえてきた。

少し上体を起こして見ると、何人かの生徒が丸太を抱えるようにして何やら黒い物体をプールに運び入れている。あのメンツ……車輌科と装備科の連中だな。

みんな、競泳パンツで――う、水着姿の女子もいる。イヤだな。

「武藤君！　すぐ浮かべて！　時間無いのだ！」

……と思ったら、装備科の平賀文さんか。特徴のある喋り方で分かった。

俺は少し安心する。あの人ならヒステリア化の心配はない。男ばっかりの集団に平然と水着姿で混じれるぐらい無邪気で、女子というより『こども』って感じの人だからな。

ていうかあの人は授業サボってるのかな、無邪気に。

「すぐって、平賀、暖気運転しなくて平気なのかよッ？」

「そこは改造したよー　人間に不可能は無いのだ」

左右の耳の脇でまとめただけの短い髪をぷりぷりさせて、ちょこーん。プールサイドに崩れた正座で座った平賀さんは、でかいリモコンを持って無邪気に笑ってる。

（何やってんだ……？）

という俺の視線をよそに、男どもは1メートル半程あるマッコウクジラみたいな物体を協力して水中に入れていた。

ぷかー。

物体は上半分ほど水に浮き、ブルルと音を立てて動き始め……俺には、それが潜水艦の模型なのだとようやく分かった。

どうやら、ラジコンらしい。てことは平賀さんが持ってるのは操縦プロポか。

「さっそく発射なのだ！」

平賀さんの声と共に、潜水艦の背中でぱかぱかぱか！　と小さいハッチが沢山開いた。

そこから、ぱしゅぱしゅぱしゅ！　とロケット花火が打ち上がる。

「「「おおー！」」」

車輌科（ロジアムド）と装備科の一同が、武藤と平賀さんに拍手喝采（かっさい）した。

ていうか花火がビシバシ天井にぶつかってるんだが、いいのかあれ。

平賀さんは……平賀源内（げんない）という江戸時代の発明家の子孫で、機械工作の天才児だ。

俺のベレッタを無邪気に違法改造してくれたのも彼女なんたが……平賀さんの仕事ってムリがきくかわりに、時々いいかげんなんだよな。料金、高い割に。

ベレッタ・キンジモデルだってそうだ。連射はフルオートしか使わないから別にいいん

だが、使ってるうちにセレクターを3連射にしても弾丸が2発しか出なくなった。しかもその2発がほとんど同時に出る。

初期不良って事で、直してもらえないかな。タダで。

「おぅキンジー　見ろよこれ　超アクラ級原子力潜水艦『ボストーク』だ」

俺の姿を見つけた武藤が――満面の笑みで、プールから上がってきた。

「『ボストーク』は悲劇の原潜なんだぜ。空前絶後の巨大原潜だったんだが、1979年、進水直後に事故で行方不明になっちまったんだ。それをオレと平賀が現代に甦らせた！　どうよキンジ!?　感動するだろ？　ええ？」

「せめて屋外プールでやれ」

熱っぽく語る武藤に、休憩を邪魔された俺は冷たく返す。

これ以上、こいつの乗り物オタク話を聞かされても迷惑だしな。

武藤は「キンジは感動が足りねえ！　後で原潜で轢いてやる！」などとシュールな捨てゼリフを吐いてプールサイドにあぐらをかき、原潜ボストーク号とやらの鑑賞に戻った。

「あは。追い出されちゃったよ、プール」

代わりにやってきたのは――かつて強襲科で俺と組んでいた、不知火亮だ。

引き締まった体にアイドルみたいなイケメン顔を兼ね備えた不知火は、俺の隣に座って浮いたり沈んだりしているラジコン潜水艦に苦笑してる。

平賀

苦笑いさえもカッコいいな、お前。
マジメに泳いでたのを武藤（アホども）味のせいで中断させられたのに、怒らないし。
しばらく黙っていた人格者の不知火（しらぬい）は――
「雑談してもいいかな、遠山（とおやま）君」
白い歯をニコッと見せつつ、語りかけてきた。
「別に許可なんか取らなくていいって」
「ちょっと、良くない話なんだけど。聞く？」
「良くない話……？　何だよそれ。まぁ、話したきゃ話せよ」
「さっき、2時間目。休講だったじゃない」
「ああ」
「その時僕、ちょっと強襲科（アサルト）に顔出したんだけどさ。神崎（かんざき）さんも来てたんだよね」
「――アリアに何かあったのか」
「ははっ。そんな怖い目しなくていいよ。そういうことじゃないから」
不知火は何を誤解したのか、小さく笑う。
「……神崎さんって、彼氏いるの？」
「しらねーよ。アリアに直接聞けって」
「遠山君、ライバルいるかもしれないよ？」

「なんだそれ」
「神崎さんが武偵手帳にメモ取ってる時、偶然見えちゃったんだけど……手帳に男の人の写真が入ってたんだよね。細かくまでは見なかったけど、君じゃなかった」
「……そんなこと、俺に関係ないだろ」
「ははっ。いま一瞬、きみ、黙った」
「そんな下らないことを俺に、々報告してくる不知火に呆れて、黙ったんだ」
「気をつけた方がいいよ遠山君。神崎さんって、一部の男子にけっこう人気あるからねえ。ボヤボヤしてたら取られちゃう。ポピュラーな言い方だけど、夏は――男女の仲が大きく進展する季節なんだよ？」
「知るかよ。何度も説明したが、俺とアリアは武偵同士のパートナーに過ぎない。だから、アリアのプライベートまでは俺の知った事じゃない」
「遠山君、今すっごいムリしてる顔」
「おーまーえーなぁー」
なんでか俺が不知火に詰め寄ってしまった時――不知火は強襲科仕込みの機敏な動作で体を躱し、さっ、とデッキチェアーから俺の携帯を取り上げた。
「――おい！」
「そういえば神崎さん言ってたけどさ。君たち夏休みにカジノの警備をやるんだよね？

混雑地での警備訓練ってことで、一緒に緋川神社の夏祭りに行ってみたらどう？　うん、そうしよう！　あそこは縁結びの神社ってことでポピュラーだし。ねえ武藤君？」

不知火は、ぽーん、と、プールサイドに座っていた武藤に俺の携帯を投げてしまう。

武藤は待ってましたとばかりに携帯をキャッチし、にいッ、と笑う。

「おう！　そいつはいいアイデアだ！　お誘いメール、オレが書いてやるよ！」

こ、こいつら。

この連携っぷり。

事前に打ち合わせしてたな。

「こら武藤！　返せ！」

と本気でキレる俺を、不知火が後ろから羽交い締めにしてくる。

「いやー神崎さんに対する遠山君をハタから見てるとほんとに焦れったくてさぁ。写真の男――つまりライバルもいるみたいだし、背中を押してあげよう！　って事になったんだよね、さっき武藤君と。あ。あと僕、午後は仕事で校外に出ちゃうんだよね。クレームは武藤君までよろしくー」

「あれ、神崎……じゃなくて『アノア』でメアド登録してんのかよ。やらしーなキンジ」

最近アリアのせいで――イタズラ者の武藤と、何事にも付き合いのいい不知火を2人にしすぎたのがマズかった。

カチカチカチッ、と武藤は前もって考えていたらしい文章を素早く打ち込んでしまう。
「『親愛なるアリアへ。カジノ警備の練習がてら、一人っきりで七夕祭りに行かないか？7日7時、上野駅ジャイアントパンダ前で待ち合わせだ。かわいい浴衣着てこいよ？』っと。こんなもんでいいすかね、遠山先生」
「いいわけねえだろ！」
叫んだ俺に武藤は敬礼を返すと、ビシッ。
送信ボタンを、押しちまいやがった。
この後、キレた俺は2人をプールに叩き落とし――特に武藤は悲劇の原潜ポストーク号とやらに思いっきりぶつけて、真っ二つに折れた原潜もろとも撃沈してやったが……
それでメールが送信済ボックスから消えるわけじゃない。
どーすりゃいいんだよ、これ!?

（不幸だ……不幸すぎる……）
ズーン……と黒いオーラに包まれつつ、俺は探偵科棟の3階で授業を受けていた。
今は5時間目、専門科目の時間である。
4時間目は英語だったのだが、アリアは遅刻ギリギリで教室に来たのでメールのことを弁解する時間は無かった。

というか、キレイな発音で教科書の音読をしたアリアが着席する時……一瞬、目が合ったんだが……なんか、慌てて視線を逸らされたような気さえしたぞ。

読んだのかな。

あの、武藤が書いたバカなメール。

俺は机の下でコッソリ携帯を操作し、送信済メールを確認した。

『親愛なるアリアへ。カジノ警備の練習がてら、二人つきりで七夕祭りに行かないか？7日7時、上野駅ジャイアントパンダ前で待ち合わせだ。かわいい浴衣着てこいよ？』

ありえん……

ありえんだろこれは。どう考えても。

致命的な誤解を与えかねないフレーズが各所にちりばめられてるぞ。

武藤め。こういう時だけ文才がありやがる。逆の意味で。

ちくしょう。不知火ともども、しばらく無視してやるからな。

「……」

かち。

不安になった俺は、つい、メールのセンター問い合わせなんかを押してしまう。

アリアからの返信メールは……無い。

なにやってんだ、俺は。

「みぃ……」

急に聞こえてきた子猫みたいな声に振り向けば、俺の隣――窓ぎわの机では、峰理子が授業中にもかかわらず爆睡している。

今のは、寝言らしい。

理子の事でも考えて……アリアの事から現実逃避するか。

先月のブラド戦を経て、今の理子は――トンチキな言動は前のままだが、俺に対しては過剰にベタベタしてはこなくなった。

距離感的には、普通の女子として接してきている。

春には俺に拳銃を向けていた理子。戦う時にはケモノのような目をする理子。ときどき、色っぽく俺に迫る理子。そして――こういう、ただのおバカなクラスメートとしての理子。

一体いくつ顔を持ってるんだろうな。理子って子は。

まあ、その不安定な理子が、本当の理子なんだろうな。

そう思うことで、俺も最近はコイツに普通に話しかける事ができてるし……

話すべきことも、ある。

教室じゃまだ聞けないが、兄さんのこと。

それを、改めて聞かなきゃいけないよな。

などと思っていたら……

びびび……
夏の風物詩、カナブン……か？
いや。黒い雌のカブトムシか何かが窓から入ってきて……
おゾ……お？
ぴと。
眠る理子の、右目の瞼にとまった。
「みぎゃ！」
踏まれた猫みたいな声を上げて虫を追い払った理子は、丸めた手で、うにゅうにゅ。
顔をグルーミングし始める。
虫は……ぶぅーん……と、窓から飛び去っていった。
「……おい理子。ちょっとは授業をちゃんと聞けよ」
俺は小声で、横の席から注意する。
寝ぼけまなこの理子は、さっき買ってきたらしいヤクルトの容器をぱくっとくわえて、
「ふぁふぁーう」
「何だよ？　あ、こら。フタを歯でかじって開けるな。ちゃんとめくれ」
くいっ、と上を向いてヤクルトを一気飲みした理子は、また机にべたぁーっと伏せ、
「あつぅーい」

と、今度は机の下でスカートをつかみ、ばっさばっさやり始めた。
そっちをめくれとは言ってないだろ。
「夏は暑いんだ。そんなこと、俺に言ったってしょうがない」
「あーつーいー！」
ばっさばっさ！
勢い良くスカートを振るので、ワルサーP99が盛大にガンチラしてるぞ。
「し、静かにしろよ。授業中だろっ。ていうか暑いのはそのゴスなんとかって改造制服のせいだ、それをやめれば解決する」
「ロリータは我慢！　であります！」
びびしっ！
と両手で敬礼してきた理子は（今の、格言のつもりなのか？）、にょい、と席を立った。
「どこ行くんだ」
「……ちっち」
飲んだらすぐトイレかよ。入れたり出したり忙しいやつだ。
ていうか幼児語を使うな。イラッとくる。
でかいクマさんストラップをつけた携帯を手に、『眠れる森の美女』のテーマなんぞをハミングしながら堂々と教室を出ていった理子をジトーっと見送った俺は――

なんで武偵高の教師になれたのか分からないぐらい気の弱い高天原ゆとり探偵科教諭・22歳独身・♀が涙目でこっちを見ている事に気づき、清く正しく、教科書に視線を戻した。

先生。俺はちゃんと勉強してますよ。

だからこれ以上単位を落とさないでくださいね。

理子がスカートをばさばさやったせいでバニラみたいな甘い理子臭がして気が散るが、俺は授業に集中しようと努める。

今日の授業のテーマは、シャーロック・ホームズ卿。

アリアの曾祖父、その栄光に満ちた功績について学んでいる。

彼は19世紀末の大英帝国で活躍した人で、世界を股にかけて解決した難事件・怪事件は数知れず。文句なしで、史上最高の名探偵といえる大人物である。

さらに彼は史上最高なだけじゃなく、史上最強の名探偵としても名高い。

というのもシャーロック・ホームズ卿は格闘技・西洋剣術・拳銃の達人であり、俺たち武偵の原型となった、偉大な存在でもあるのだ。

まさに時代を１００年は先取りした、掛け値なしの天才だったわけだ。

（まあ、その子孫はあれだけどな）

などとまた結局アリアの事に考えが行ってしまい、つい携帯をチラ見してしまった俺の隣に……音もなく。

「――キンジ」

理子が、戻ってきていた。

その理子の表情が、さっきのマヌケ面ではなくなっている。

ゾクッ、と、背筋に寒いモノが走る。

この目――この、ケモノのような鋭い目つき。

ハイジャックの時に見せた、『武偵殺し』の方の理子の目だ。

先生がこっちに背を向けてホワイトボードに図を書いているのを確認した理子は、俺が眉を寄せたのとほぼ同時に、ガッ。

ネクタイを掴み、喉を指で押さえ、声を出せなくしてきた。

「――!」

そしてさらにベルトを掴み、これも全く無音の動作で――

すでに開けてあった窓から、俺を投げ捨てた！

「!」

びぃーッ、と俺のベルトのワイヤーが落下速度を和らげる。今の一瞬で、理子がこれを窓際に引っかけたらしい。

――なんだ!?　何が起きているんだ!?

とりあえず3階の教室から地上に着地した俺の隣に、すたんっ。

スカートを翻らせて、ワイヤーも使わずに飛び降りてきた理子が――
とんでもない事を、耳打ちしてきた。
「強襲科に急げキンジー　いま武偵高裏サイトに書き込みがあった　――アリアとカナが、戦ってる！」

理子はなぜか二手に分かれると言い、俺は1人で強襲科棟に駆け込んだ。
カナが。
カナが、アリアと――戦っている!?
ということは、あの悪夢は。
夢じゃなくて、現実――
現実、だったのか!?
『――アリアを、殺しましょう――』
その言葉が、脳裏をよぎる。
（アリア！）
体当たりするように扉を開け、何人かの生徒にぶつかりつつ廊下を走り、転がるように足をもつれさせながら――
俺は第1体育館に飛び込んだ。

強襲科の体育館とは、体育館とは名ばかりの……戦闘訓練場だ。
闘技場とあだ名されるスケートリンクみたいな楕円形のフィールド前に、生徒達が大勢集まっている。
防弾ガラスの向こう、闘技場の中心から……銃声が聞こえてくる。
戦っている――誰かと、誰かが！
「ど、どけ！　どいてくれ！」
俺は人だかりをかき分けるようにして、銃声の方へ走る。
「札幌武偵高にあんなすげえ女子がいたなんて　聞いたことねぇ！」「神崎の無敗伝説、こりゃ本気で終わっちまうぜ」「どうやってんのよ、全然見えないわ、あの銃撃……!?」
俺が押しのけた強襲科の生徒たちが、興奮気味の声を連ねている。
「やれやれや！　どっちか死ぬまでやれや！」
という大声に顔を上げると、防弾ガラスの衝立の上に、2メートルはある長刀を何本も背負った強襲科教師の大女――蘭豹がいた。
カットジーンズから長く伸びた脚でガンガンと衝立を蹴っている蘭豹は、19歳。
俺たちと同年代だが、香港では無敵の武偵として恐れられた女傑である。
その後、教職に就いたが……あまりの凶暴さに各地の武偵高を次々クビになり、転々としているようなヤツだ。

「――アリア！」

叫びながら防弾ガラスの衝立に飛びつくと、その向こう、砂が撒かれた闘技場には――

――カナが、いた！

カナは武偵高の女子制服を着て、既に片膝をついた状態のアリアを見下ろしている。

「おいで、神崎・H・アリア。もうちょっと――あなたを、見せてごらん」

目眩がするほど美しいその顔に、憂いの色を浮かべたカナは……パァン！

あの、不可視の銃弾を放っている。

バシイソ！　とアリアが鞭で叩かれたような音に、心臓が止まりそうになる。

当たっているのだ。カナの弾が。

「うっ！」

ずしゃっ！

アリアは短い悲鳴を上げ、見えない足払いをかけられたように前のめりに倒れた。

血しぶきは上がらなかった。防弾制服のどこかに当たったらしい。

武偵高の防弾制服に使われているＴＮＫ繊維は、銃弾を貫通させることはない。だが、その衝撃のダメージが無くなるワケではないのだ。

経験上、制服に被弾すると金属バットで殴られたような衝撃を受ける。
当たり方が悪ければ内臓破裂で死ぬことだってある。
そしてもちろん、頭部に被弾すれば――
「蘭豹、やめさせろ！　こんなのどう考えても違法だろ！　また死人が出るぞ！」
実弾・実銃を使った決闘形式の模擬戦は、強襲科のカリキュラムの一つである。
だが、その実施には体中を完全に防護するC装備の着用が義務づけられている。
制服での模擬戦は、現実には生徒同士の私闘やこの蘭豹の命令で希に行われてしまっているが――明らかな武偵法違反行為だ。
「おう死ね死ね！　教育のため、大観衆の前で華々しく死んでみせろや！」
教育者にあるまじきヤジを飛ばした蘭豹は、ぐいっ。
でかくて長いポニーテールを揺らし、手にした瓢箪から酒を飲んだ。
（あのバカ……！　酔ってやがる！）
俺は蘭豹に2人を止めさせる事を一切あきらめ、防弾ガラスの扉をICキーで開け放つ。
わあっ、と周囲の何人かが驚きの声を上げたが、振り返ってるヒマは無い。火薬の臭いが充満した闘技場に乱入した俺は、アリアとカナに向かってとにかく駆ける。
「カナ、やめろ！」
「くぉらこの遠山ァ！　授業妨害すんなやー　脳ミソぶちまけたいんか！」

ドウッ!!

落雷のような発砲音を上げて、蘭豹が俺の足元を撃った。

その銃は世界最大級の巨大拳銃。『象殺し』とあだ名されるM500だ。

地雷のような着弾の衝撃に、俺は転びかけ――それでも、カナに向かって、駆ける！

「……キンジ？」

と、カナが一瞬こっちを見たスキに――倒れていたアリアは、バッ！　バッ！

逆立ちするように跳ね起きながら、左右の脚でカナの顎めがけて蹴りかかった。

カナはそれを、ほとんど動きすらせずに躱す。

「――このぉッ！」

着地より早く二丁拳銃を抜いたアリアは、カナを至近から撃とうとするが――

とん。とん。

振り向いたカナに左右の手首を軽く押され、銃口を逸らされた。

「――！」

バスバスッ！　がきんがきん！

トリガーを引く指を止められなかったアリアの銃が、スライドをオープンさせる。

弾切れだ。2丁とも。

――だがアリアは今の交錯で、カナの背後に回り込めていた。

そして放り投げた二丁拳銃が宙を舞う中で――
流星を二筋走らせるように、カナの背中に二刀流で斬りかかった！
「――やッ！」
カナを背後から襲う、起死回生の挟撃だ。
今までやられていたアリアの逆転技に、おおっ！　と生徒たちが声を上げる。
……無駄だアリア。カナには、死角なんてないんだ……！

ギギンッッ!!
くるくるくる……
かしゃん、かしゃん。
と、アリアの小太刀は……闘技場の左右に、力無く転がっていった。
誰にも、何も、見えなかった。
カナがしたことは、ただその長い二つ編みの髪を揺らして振り返っただけ。
――サソリの尾。
そう呼ばれる、これも見えない何か。
カナの背後に回った敵には、それが襲いかかるのだ。

「はぁ……はぁっ」

荒い息をするアリアは――よろ、よろ、と何歩か後退した。

その足取りが、明らかにおかしい。

口元から、一筋の血が流れ出ている。

どうやら今のカナの動作は、同時に見えない打撃でアリアの顎を殴打していたらしい。

「はぁ……はぁ……さ……さっきの銃撃……『ピースメーカー』ね……!?」

アリアの目はそれでも、まるで小さな獅子のように闘争心を失ってはいなかった。

「――よく分かったわね。そう、わたしの銃は、コルトＳＡＡ――通称、平和の作り手。でも、あなたはそれを視ることができなかったハズだけど」

「あたし、には……分かる。銃声と、マズルフラッシュで。骨董品みたいな古銃だから、はぁ、はぁ……いまいち、思い出しにくかったけど――」

「――じゃあ、もっと見せてあげる」

パァン！

カナの右前方が光り、アリアはツインテールを跳ね上げさせて真後ろにひっくり返った。

「うぁッ！」

胸を撃たれたらしいアリアの両手が、力尽きたように地面に倒れてしまう。

やめろー　もう限界だ！

防弾制服なんか関係なく、死んじまうぞー
「逃げろアリア！」
俺はベレッタをカナに向けながら――歯を食いしばって起き上がろうとするアリアと、追撃の銃弾を放とうとしたカナの間に割って入った。
パン！　パァン！
ほぼ同時に2発放たれたカナの銃弾が、俺の脇腹を掠めてアリアの脇の地面に着弾する。
（――うッ！）
俺はバットで2発同時に殴られたような衝撃に、体を折った。
激痛に意識が遠のき、内臓全部が口から出てきそうな感覚さえする。
だが、この銃口は逸らさない　――！
カナから、逸らさない！
「ど、どきなさい……キンジ……！」
背後から聞こえてきた声に、俺は慌てて振り向く。
そこではアリアが、俺のズボンを掴んで起き上がりつつあった。
がくがくと震える膝で立ち、顔を上げることすらできないのに――
ちゃきッ。
いま俺のポケットから抜き取ったらしいバタフライナイフを、構えている。

「どきなさい、キンジ」

カナも、アリアと同じセリフで命令してくる。

「あなたのような素人は動きが不規則な分、事故が起きやすい。危ないわ」

「そんなことは分かってる、あんたに言われなくても……！」

「なら、どうして？　なんのために危険に身をさらすの？　まさか、私と戦うつもりではないでしょう？　未完成なあなたが私に勝てるハズは、万に一つも――」

「そんなことは分かってるんだよッ!!」

絶叫した、俺に

「キンジ……」

カナは、その目を少し見開いた。

それは、あの悪夢のようだった空き地島で俺に見せたのと同じ、驚きの表情だった。

「……あなた、変わったのね」

その声にどこか淋しい音と――淋しさだけではない、なにか納得するような色を込めたカナは――俺とアリアを見てから、訓練場の入口の方へと振り向いた。

俺がその視線を追うと、そこでは……

「こ、こらぁー！　何をやっているんですか！」

おそらく湾岸署から駆けつけてきたらしい小柄な婦警が、生徒たちをかき分けるように

して強襲科に入ってきていた。
さすがに――この戦いを見かねた誰かが通報したらしい。
「逮捕します！　この場の全員、緊急逮捕します！」
ぷぴー！　と婦警が鳴らしたホイッスルに、生徒たちは慌てた顔を見合わせる。
「あなたたちも解散しなさい！」
などと甲高く叫びながら、小柄な婦警は俺たちの方にぱたぱたと走ってきた。
カナはその婦警を眠たそうに見たかと思うと――
……
……
口元に手を寄せて……
「……んっ……」
ふわぁ。
と、いきなり緊張感のカケラもないアクビをした。
……闘気が、失せている……？
そ……そうか。『あの時期』が近づいてるんだな。兄さん。
一方、防弾ガラスの衝立の方では、
「けッ」

ざす、と不機嫌そうに飛び降りた蘭豹が、生徒たちの方を振り向いた。
お前ら失せろー　という強烈な殺気に、生徒たちは走って解散していく。酔った蘭豹は、何をしでかすか分からないからな。
大股でこっちへやってきた蘭豹は、ずい。
女なのに俺より高い背を曲げて、小柄な婦警にガンをたれた。
「ケッ。サムい芝居で水差しやがって。あとで教務科に来いや――峰理子」
峰？　……理子？
と俺が眉を寄せると、婦警は――
「……くふっ。くっふふふふー」
頬を引きつらせつつ、笑い出した。
理子の、声で。
この婦警……理子が化けてたのか！
目を丸くする俺の横で、カナは、ふらり。
踵を返し、去り際にもう一つアクビをし、闘技場から去っていく。
がくソ……
緊張の糸が切れ、俺はさっき被弾した脇腹を押さえて片膝を突いた。
振り返ればアリアは　立ったまま、失神している。

ムリもない。

今まで意識があったのが不思議なぐらい、痛めつけられたんだから……

そしてアリアはとうとう膝を折ったかと思うと、ずしゃ。

――顔面から、地面に倒れこんだ。

「アリア……！」

慌ててアリアを抱き起こした俺に、蘭豹は「」をへの字に曲げる。

「大げさに騒ぐなや、アホウが」

「大げさもなにも……殺されるとこだったろッ！」

「強襲科を抜けてからホンマに昼行灯になりよったなぁ、遠山。あの女、峰理子の猿芝居に気づいてシラケる前から――殺気なんぞ、無かったやろが」

何……？

カナに、殺気が無かった？

はじめっから、アリアを殺すつもりじゃ……無かったというのか？

蘭豹は……武偵や犯罪者の行動を先読みする、動物並の直感を持つことで有名な武偵だ。

俺も強襲科にいた頃、何度も驚かされた――蘭豹のカンの鋭さだけは、どんなに泥酔していても信用できる。

「あの女の技術はガキ共の教育に良さそうやったからな。ホンマの殺し合いやと思わせて

注目させただけや。本物（モノホン）の殺気があったら――とっくに、ウチが殺（や）っとるわ」

ニヤ、と……蘭豹はその名の通り、豹（ひょう）のような目で笑うのであった。

救護科（アンビュラス）におぶって運ぶ間に、回復の早いアリアはすぐ意識を取り戻していた。

だが、俺とは一言も言葉を交わしていない。

無人の小救護室へ着くまでに何人かの強襲科（アサルト）生徒とすれ違ったが……アリアは強襲科（アサルト）に親しい友人がいないらしく、誰（だれ）も肩を貸してはくれなかった。まあアリアは皆の日の前でズタズタにやられたわけだから、声をかけづらいのかもしれないけどな。

救護科（アンビュラス）と衛生科（メディカ）の面々は武偵病院で実習をしていて不在。理子は婦警の姿のまま消えた。

だから俺は一人で応急手当をしようと、まずはアリアをちょこんとベッドに座らせて……とりあえず、コールドスプレーを薬品棚から出した。

「……どうして止めたのよ」

震える声に振り向くと、ぼろぼろのアリアはベッドの上で体育座りして顔を伏せていた。

「止めるもなにも、もう勝負はついてただろ」

「ちがう！」

アリアはヒステリックなアニメ声で叫んだ。

だが、その顔を上げはしない。

事実を否定するかのように、ぎゅう、と小さな膝に額を押しつけたままだ。
「あんたがジャマしなければ、いくらでも勝つ手はあったんだもん！」
「自分をごまかすな。兄さ……カナとお前の力量差は、誰の目にも明らかだった」
「――力量差があっても！　勝たなきゃいけなかったのよ！」
負けず嫌いのアリアは、ツインテールをぶるぶる震わせながら自分の膝に叫ぶ。
「あれはカナ！　理子がこのあいだ紅鳴館に行く時に化けた、あんたの……昔の知り合いで……あの時あんたが一目見ただけで動揺した女！　そいつがいきなり強襲科に現れて、あたしに決闘を挑んできた。逃げるワケにも、負けるワケにもいかなかったの！　それを、あんたが――」
「アリア、知っておけ。世の中には、お前より強い武偵なんかゴマンといるんだ」
「だめよ！　だめなの！　あたしは、あたしは強くなきゃいけないの！　いくら差戻審になったって……ママはまだ拘留されてる！　1審の終身刑だって消えてない！　あたしが、あたしが強くなきゃ……ママを……助け……られ……ない……！」
う、う……
と、アリアはついに泣き始めてしまう。
「ああ、お前は強い。強いよ。俺はそれをよく分かってる」
俺は……アリアの肩にポンと手を置いてやった。

「だから――負けを受け入れる強さも持て。あいつを相手にしたら、次は殺されるぞ」
「……」
「カナとはもう戦うな」
「……」
「分かったか」
「……」
俺に諭されたアリアは……
黙った。
黙りこくった。
こいつ。
自分に都合が悪くなると、黙るクセがあるんだよな。
「そんなに頬を膨らますな。フグみたいだぞ」
と言うと、痛めつけられたせいで力はこもっていなかったが、アリアは――ぽかー
顔を伏せたまま、俺の胸を殴ってきた。
「おいっ……！」
ぽかぽか！　ぽかぽかぽかぽか！
アリアは座ったまま、ぐるぐると両腕を振り回して俺の体に所構わずパンチしてくる。

「こら、なんで俺に八つ当たりすんだよっ」
「うるさいうるさいうるさい！　もうあんたなんか、どっか行けー」
短い腕のリーチから退いた俺に、だだっ子と化したアリアは――
ぶんっ　がいんっ！
コールドスプレーの缶を投げて、頭に命中させてくるのだった。

アリアに追い払われてしまった俺は、仕方なく自室へ帰ることにした。
今日はもう授業も無い。カナの追撃が無いか心配だったが、俺自身被弾したこともあり戦える状態ではなさそうだったし……カナは、『あの時期』が近づいてるみたいだった。すぐ追い打ちをかけてくることはないだろう。
そう踏んだ俺は、自宅のドアをくぐり――
「――!!」
リビングで、ひっくり返った。
そのまま、ガツンと後頭部を壁にぶつけてしまう、
腰が抜けた、というのはこういうことを言うんだろうな。
緋色に燃える夕空を背景に、ソファーで……
カナが、昼寝していたのだ！

（……カ……カナ……！）

幻覚かと思ってまばたきするが、本物のカナだ。壁際の棚に置いた鏡にも映っている。

カナは、一度眠りにつくと――信じられないぐらい長時間、眠り続ける習性がある。

長い時なんか、2週間起きてこなかった事もある。

これは神経系、特に脳髄（のうずい）に過大な負担をかけるヒステリアモードのせいだ。

モードが数十分しか続かない俺でも、終わった後は何だか眠くなることが多い。それを兄さんはカナになりきっている間じゅう続けているわけで……その神経にかかる疲労は、超長時間睡眠で後からまとめて回復する仕組みになっているらしい。

カナはこれから、初め数十分ずつ寝たり起きたりするあいまいな状態になり――半日のうちに、10日前後の『睡眠期』に入るのだろう。

さっきカナの大アクビに俺が警戒感が解いたのも、それを知っていたからだ。

しかし、どこかで寝るとは思っていたが……まさか俺の部屋とはな。

「ん……キンジ？」

俺が壁にぶつかった音で起きたらしいカナが、目を閉じたまま言った。

「救護科（アンビュラス）に行ってきたのね。でも、あなた自身の治療はしてないみたい。おいで」

「……よく分かるんだな。見てもいないのに」

「残り香程度の、消毒液のニオイ。腹部を痛めて弱った人間特有の、バランスの悪い足音。

人は、ただ歩いただけでも多様な情報を発しているものよ。覚えておきなさい」
目を開いたカナは、ぽん、とテーブルの救急箱に手を置いた。
俺の手当をするために……ここに来たのか。
「おいで。手当してあげるから」
「いいよ別に」
聞いているだけで心を掴まれてしまいそうなカナの声に、俺はそっぽを向いた。
「こんなのカスリ傷だ」
俺が言ったセリフに、カナが鏡のように同じセリフをかぶせてくる。
心を読まれたかのようなその一瞬に、カナはさらに最適なタイミングで、
くい、くい
と、微笑みながら手招きしてきた。
俺は……カナから目を逸らしつつも歩み寄って……
ぽすっ。
逆らいがたいその不思議なムードに、仕方なくカナの隣に座るのだった。
一度、ちゃんと話さなければいけないとも思っていたしな。
カナはソファについた俺の脇腹を、制服を持ち上げて露出させる。
そして薬だけではなく小さな鍼を併用して、文字通り手をあてて手当てしてくれた。

その治療は、衛生科の教師より巧みで……痛みが、ウソのように消えていく。

（兄さん……）

間近に見える、夕日に彩られたその顔は――こっちの方が、本当の兄さんという感じの優しい表情をしていた。

そう。

カナは、本当は……人を傷つけるより、治す方が得意な人なのだ。

自分でも海外の医師免許を持ってるし、富豪の依頼で仕事をした時なんか、その莫大な報酬で恵まれない土地に病院を建てたこともあった。

カナは、兄さんは――

ケガ人や病人、悲しんでいる人や苦しんでいる人を放っておけない人なのだ。本当は。

そもそも兄さんがこの奇妙な――美女に化けるという方法でヒステリアモードになれる事に気づいたのも……子供のころ、母さんが亡くなって泣き続けていた俺をあやすために母さんのフリをしてくれた事からだった。

――その、兄さんが。

誰よりも優しかったハズの兄さんが。

なぜだ。

――なぜ、あんな事を。

話したい。話さなければいけない。アリアのことを。
だが……怖い。
その会話が、俺の中のカナを、兄さんを――壊してしまいそうで――
「……キンジ。単位、ちゃんと取れてる？」
唐突に世間話を振ってきたカナに、俺は顔を上げた。
「……不足してる。でもカジノ警備の仕事を取った。カナは心配しなくていい」
昔と同じカナの雰囲気に、俺はつい、普通の受け答えをしてしまっていた。
アリアのことを、話さなきゃいけないのに……
「カジノ警備。カジノ警備ねぇ……うーん。分かりやすい子。今後が心配かも」
「？」
「ＨＳＳ――ヒステリアモードは、ちゃんと使えてる？　キンジは女性に免疫がないからそこも心配」
兄さんほど免疫がついて、抗体になっちまうのもどうかと思うけどな。
「……キンジは、やればできる子。ヒステリアモードに関しては、きっと私より――初代遠山金四郎より、大きな潜在能力を秘めた子。でも昔から、ちょっと女の子に対して奥手なのよねぇ。うーん。『やる気の無い実力者』、っていうのかな」
俺の処置を終えながら、カナが言う。

「ほっといてくれよ……その辺のことは」

「ヒステリアモードじゃないときは、ちょっと不安になっちゃうぐらい普通の男の子だし。空き地島で風力発電機から落ちかけたのを私のワイヤーで釣り上げたら、気絶してたから笑っちゃった。切っちゃったあなたのワイヤーを交換して、ここまで運んで……ほんと、昔っから手間がかかる子」

やっぱり……カナが助けてくれてたのか、あの時は。

まあ、落としたのもカナなんだけどな。

と、俺が何も言えずにそっぽを向くと――

棚の鏡に映ったカナが、俺の頭をよしよしと撫でた。

……カナの中では、俺はいつまでたっても子供なんだな。

と、俺が口をへの字に曲げた時。

ぴりっ……

と、空気が張り詰めたような感覚が――

「気をつけなさい、キンジ。あなたたちには、敵が……迫っている」

敵？

唐突に呟いたカナに俺が振り返ると、がちゃ。

誰かが、玄関の扉を開ける音がした。

「……ただいま」
ちょっと拗ねたようなあの声は――
アリア！
俺はソファから立ち上がり、ドアに駆ける。
「キンジ、いる？　あのさ、さっき……ごめん。あたし、ちょっと気が立ってて……」
ダメだ！　ダメだ！　来るな！
ここにはカナがいる！
お前を半殺しの目に遭わせた――カナが！
「来るなアリア！」
俺は開きかけた扉をふさぐように、立ちはだかった。
「な、なによなに」
「いいから帰れ！」
今まで見せたこともないような剣幕で怒鳴った俺に、アリアは目をぱちくりさせる。
「とにかく、晩、どこかに行ってろ！　武偵高からも出るんだ！」
明日になれば、カナはもうどこかで寝ているハズだ。
それまで、アリアをカナに近づけないようにしないと――
「……!?」

一瞬室内を見たアリアが、眉を寄せた。
俺はアリアとカナを直線で結ばないよう、体を盾にしながらアリアを通路へ押し出す。
射撃線を作ってはダメだ。カナの『不可視の銃弾』は、いつ放たれるか分からないんだ。
そして、がちゃん……と、俺の背後で防弾扉が閉まった。
「カナが、いたわ」
ビニール袋に入れたももまんと――俺にくれるつもりだったのか、ウナギまんを持っていたアリアは、その手を小刻みに震わせ始めた。
「……ようやく読めたわ、そう。そういうことだったのね、キンジ」
キッ、とそのツンツンまつ毛の目でこっちを睨み上げたアリアは
「カナは――あんたがけしかけたのねー　あたしとパートナーをやめて、あっちと組むためにー」
「な、何だって？」
「そうよ、そうだったんだわー　最近、ちょっとパートナーらしくしてたのは……これで最後だと思ったから、気が楽だったんでしょ！　あ、あたしをぬか喜びさせて、どうせ、どうせ心の中で笑ってたんだわ」
「お……おいアリア！」
犬歯をむいて掴みかかってきたアリアと、俺は取っ組み合う形になる。

瞬間湯沸かし器みたいに怒ったアリアは、どうやら強襲科での大敗北で精神的にかなり参っているようだった。

普段から無い推理力が、いつも以上にめちゃくちゃになっている。

「どうしたんだよお前！　いっぺん負けたぐらいで、急に世界中が敵になったような顔をするな！」

「あたしと……パートナー、やめたいから！　昔の恋人……パートナーを、けしかけて！　最低だわ！　あ、あたしが最近の武偵らしいあんたを見て――どんなに嬉しかったか！　それを、それなのに！　この！　バカキンジ！」

「違う！　か、カナが恋人なわけないだろ！」

「じゃあ何なのよ！」

と金切り声を上げたアリアに犬歯をむかれて、俺は　でも。

兄さんだ！　とは、とても言えない。

正直に言ったところで、バカ言うなバカキンジ！　と余計怒らせるのがオチだ。

「……！」

俺が答えないのを見て、アリアは　ぐううう！　と、瞬その愛らしい顔をゆがめ……その大きな目から、ぽろぽろと涙を流し始めた。

「ほらあ！　どうして答えられないのよ！　カナは何なの！　なんで2人っきりで部屋に

いて！　なんであたしに『出ていけ』なのよ！　ひぐっ、どうせ――うまくいった、って、ひっく、2人で笑ってたんでしょー　あんな、あんな、悪魔みたいなやつと――！」

「――違うッ！」

カナは、兄さんは悪魔なんかじゃない！

それは俺がいま一番、一番……思いたくない事なんだ！

今は、今はたまたま何かがどこか、おかしくて――こんなことになっただけで、本当は、本当のカナは――俺にとっちゃ、神様みたいな人なんだ！

「カナ！　この悪魔！　出てきなさい！　銃弾は込めてあるわ！　キンジは、キンジは、キンジはあたしのものだあ！」

どん！

気がつくと俺は、アリアをカナから遠ざけるように突き飛ばし――

――バスンッ!!

「！」

足元に、抜き放ったベレッタで威嚇射撃をしてしまっていた。

「……！」

ビニール袋を足元に落としたアリアは――赤紫色の目を驚愕に見開いて、俺を見た。

俺も、自分のしたことに目を丸くしてしまう。

習慣も、あった。興奮状態の犯罪者と揉み合った場合は、離れぎわに威嚇射撃を行って出足を止める。この連続動作は強襲科で何百回も訓練し、体に染みついた流れだった。

だが、それをアリアにやるなんて。

アリアは俺によく銃を突きつけていたが、俺からアリアに発砲した事は一度もない。

……普段のアリアの行動から考えて、ここはガバメントが出てくるかと思ったが……違った。

俺に足元を撃たれたことが、本当に、心の底からショックだったらしく――

「……もう……おしまいだわ……」

アリアは両手で、その顔を覆い。

その手の下に、小さな川のように涙を流しながら――

「……もうみんな、何もかも……ほんとに、なくしちゃったよ……」

そう独り言したかと思うと、くる、とこっちに背を向け、走る元気すらないらしい……フラフラと歩いて、マンションの通路を去っていった。

その小さな背中を……追うべき、だったのか。

きちんと説明してやるべき、だったのか。

だが――俺は、そのどっちもできず……

力無く、すっかり冷めてしまった饅頭の袋を拾い上げることしか、できずにいる。

部屋に戻ると――
カナが、くすくす。
「ごめんね。ぜんぶ聞こえちゃった」
――笑っていた。
「……何がおかしいんだ。これは……あんたのせいだぞ」
「ずいぶん好かれてるのね。『キンジは、あたしのものだあ』だって」
がつん！
俺は握ったままの拳銃の握把で、壁を殴った。
アリアじゃないが、誰彼構わず八つ当たりしたい気分になってきたよ。
「眠いのをガマンして来た甲斐があったわ」
カナはまだおかしいのか、にこっ、と笑った。
いまの俺たちのケンカを見て……急に、上機嫌になったような感じだな。
「あの晩、空き地島であなたに銃を向けられてピンと来たんだけど――わたしの読みは、間違ってなかったみたい。そういうことだったのね。それは、たしかに、ある。ただ本人たちには――見えていないだけ」
意味不明なことを楽しげに言うカナに、俺は眉を寄せた。

「寝ぼけてるのか、カナ。何の話だ。何なんだ、それは」
「……『絆』の一種かしら。いまは、まだ」
きずな？
「ホームズ家の人間は変わり者が多いから、今朝はまだ疑ってたの。キンジがそんな家の子を――私に銃を向けてまで守ろうとするなんて、信じられなかったから。だからまず、どんな子なのか見てみたかった。神崎・H・アリアを。それで強襲科にお邪魔したの」
銃を収めないままの俺など何処吹く風で、カナはソファを立った。
「――さっき、理子ちゃんには言っておいたんだけど。私、これから『寝る』わ。台場にホテルを取ってあるの」
「起きたら殺すのか、アリアを」
玄関に向かうカナに聞くと――
「殺さないわ」
「……信じていいのか」
「こんな大事な事で嘘はつかないわ。『第二の可能性』がある限り、殺さない」
……『第二の可能性』？
俺の目をまっすぐ見たカナは、妙な言葉を言った。
「ある限り……ってことは、それが無くなったらまた襲うのか。何なんだ、その『第二の

「可能性』って」

「……ごめんね、教えてあげられないわ。ヘンに意識させたくないもの」

流れるような動作で靴を履いたカナは、背を伸ばして音もなく振り返る。

「創世記2章18――人、独りなるは善からず。我、彼に適う助者を彼のために造る――」

また聖書を引用したカナは、室内に漏れ入ってくる夕陽を見つめていた。

「覚えておきなさい、キンジ。アリアは、危険な子。誰かが導いてあげないといけない子。その『誰か』があなたであれば……わたしは、誇らしいのだけれど」

――濃い、緋色の、夕日を。

3弾　夏祭り

結局その後、アリアは部屋に戻ってこなくなった。
2日。3日。1週間近く経っても、帰ってこない。
今までで最長クラスの家出だな。
このまま、もう二度と戻ってこないのかも――という感じさえしてしまう。
アリアは一般教科には出てきていたが、俺には物凄い勢いで『話しかけるな』オーラを発していた。何度かそれを敢えてスルーして、カジノ警備の話題などを振ってみようとも試みたが……ことごとく、逃げられてしまっている。
そうこうしている内に学校ではあちこちの教室で一般科目の期末試験をする時期になり、俺はアリアと口もきけないまま……
夏休みに、なってしまった。
緊急依頼との絡みもあり、武偵高の夏休みは普通より早い7月7日から始まる。
その、7日。
覚えやすい日時だから朝起きた時に思い出したのだが、このあいだ武藤が俺の携帯から勝手にアリアへ送ってしまったメールには、こんな事が書いてあった。

『親愛なるアリアへ。カジノ警備の練習がてら、二人っきりで七夕祭りに行かないか？
7日7時、上野駅ジャイアントパンダ前で待ち合わせだ。かわいい浴衣着てこいよ？』
読み直しただけで衝動的に拳銃自殺したくなるようなメールだが……
アリアは、これを見たんだろうか。
アリアからの返信は結局無かったし、カナの事で大ゲンカする前にもアリアはこの件について何も言ってこなかった。
だからまあ、見てないのかもな。
あいつは通話派で、ほとんどメールを使わないし。
「って……」
じゃあなんで俺はいま、上野駅にいるんだ？
ざわざわと足早に行き交う浴衣姿の雑踏を前に、ふと我に返った俺は今見ていた携帯をポケットへ押し込んだ。
今はその7月7日、7時――の、5分前。
ていうか俺は30分前にはここに来て、駅構内の本屋で立ち読みとかをしていた。
べっ……別に、アリアのことを考えてたわけじゃ……ない、
ただ、今夜は上野の緋川神社で七夕祭りが行われる。
こういうイベント時には犯罪事件も起きやすいので、武偵は自発的に出向いて警備をし、

トラブルの抑止に努めるべきで……って、あ、バカ。俺。

じゃあ何でジャイアントパンダの方に行くんだよ。

あ、いや……これは、一応、だ。

一応、行ってみるだけだ。

別にアリアがどうとかじゃない。あそこだって人が集まる場所だから、一応、チェックしておく必要がある。そういうことなんだよ。

時計をチラ見しながら7時に改札を出た俺は、高さが3mもあるジャイアントパンダの巨大なぬいぐるみの前に……立つ。

アリアは……

（……）

……いない。

周囲を見回すが……いない、な。やっぱり。

まあ、そりゃそうだろうな。

そもそもメールを見たかどうかも分からないし、カナの事であれだけ怒ってたんだ。

どうせ、いないと思ってたよ。

だから想定通りといえば想定通り。そういうことだ。

「……」

少し力が抜けてしまった俺は、フーッ、と溜息し、巨大パンダの入ったガラスケースに背中をつける。

周囲は……ここを待ち合わせ場所にしてたらしい浴衣姿のカップルやグループだらけだ。

あー……なんか、居づらいな。1人っきりで、防弾制服で、こんなとこ……

でもまあ、もう少し警備してみるか。

遅刻してくるかもしれないし。

……じゃない。

あ……えっと、あれだ、警備だ。トラブルが起きるかもしれないし。

ペットボトルの水でも買おうと思って、自販機の方を振り向くと――

「？」

さっ。

何かピンク色のひもみたいなものが、慌てたカンジに巨大パンダの向こう側に隠れた。

「……」

見覚えがあるぞ。

というか……見えてるぞ。

あれ、アリアのツインテールの片っぽじゃねーか。

アリアらしき人影というかアリアは、パンダのおしりの方に屈んで身を隠している。

しかし、頭隠してツインテ隠さず。

……アリア。

そんな色したテールをぶら下げてるのは、上野中探してもお前しかいないだろ。

「……アーア」

呼ぶと、びくう！　とテールが動いた。

見つかった！　なんで!?

という動きである。

いやだから見えてるんだって。

「アリア」

「……にゃー、にゃー」

猫の鳴き真似かよ。

『物音がしたかもしれないけど、それは猫だよ』って事らしい。

な……なんてベタなごまかし方だ。しかも下手だぞ。鳴き真似。

「声に特徴ありすぎなんだよ、お前は。むしろアリアですって言ってるようなもんだぞ」

パンダを回り込んで言うと、浴衣を着ていたアリアは……

かしゅ！　と下駄を鳴らして振り返りざまに立ち上がった。

「――遅い！」

いきなり、ぎぎん！　とその形のいい眉をつり上げて犬歯をむいてくるアリア。
時間通りに来てたろ、俺は。
と、わざとらしく腕時計を見てみせると……
「あ……ええっと、あたしを呼び出すなら、30分前には来ること！　あたしを待たせたら風穴！　つぎ30分も待たせたら風穴ー　風穴活火山ー」
お……お前も30分前から来てたのか？
ていうかじゃあ、待ってたんなら、なんで俺が来たの見て隠れたんだよ。
と言ってやろうかとも思ったが、俺の口からは言葉が出てこない。
アリアの浴衣姿が、あまりに、その……
ああ、チクショウ。
かわいくて。
なんなんだよ、この感じは。
ヒステリアモード性の感覚とは違うが、どこかそれを掠めていて、ヒヤッとしちまう。
ピンクと赤を基調にしたアリアの浴衣は金魚柄で、そのちびっこい体にこれでもかってほど似合っている。
よくそんなに似合うの見つけてきたな、って思うと、何だか分からない笑いがこみ上げてきそうなくらいだ。

「な、なによ。なに見てんの。やらしいわね」
俺の表情の微妙な変化をどう誤解したのか分からないが、アリアはちょっと赤くなって浴衣の帯と胸元をアセアセと正した。なんか、久々に俺と喋るので落ち着かないらしい。
「……見たのか、あのバカなメール」
「え」
俺が後ろ頭を掻きながら聞くと、アリアは少し口ごもってから、
「そ、そうよ、これはカジノ警備の練習って書いてあったから来たのっ。いっぺんぐらいお祭りってものに行ってみたかったとか、そういうのは一切無いわ。本当にないわ」
じゃあ言う必要ないだろ。
アリアは――ぐぐいと腕組みし、鼻をツンと上に向けた。
「あたしは一度受けた依頼は絶対に完遂する。あんたの単位不足っていう下らない理由が発端でも、そのポリシーに変化はないわ。これは１００％、純粋に警備のために来たの」
その割にはしっかり浴衣着てきてるけどな、お前。
ていうか……メールの件、なんか一層、弁解しづらくなっちまったな。
アリアは『警備のために来た』と主張している。それ自体は武偵として良いことなので、あのメールについて俺が『あれは武藤が書いたイタズラだ』などといまさら否定的な事を言える空気じゃなくなってしまったのだ。会話の流れ的に。

まあ、もうそういうカンジに流しちまってもいいか……あの件は。
1週間も前のメール1通にこれ以上悩むのも、バカバカしくなってきたし。
「……じゃあ、行くか。警備に」
「……そうね。行きましょ、警備に。あくまで、警備に。警備に」
警備と3回言ったアリアは――早くお祭りを見に行きたい、と背中に書いてあるような足取りで下駄をからころ鳴らし、人の流れに向かう。
あ……背中。帯の結び目に、拳銃挿してんのか。アリアらしいなあ。

JR上野駅から国道沿いに少し歩いて折れ曲がると、屋台が連なる通りに出る。
カナの一件では大ゲンカをしてしまったが、俺とアリアはそれ以前に何度も死線を共にくぐった戦友同士でもある。その経験のお陰で、まだぎこちなくではあるが……俺たちは『先日の事はひとまず置いといて』という雰囲気で一緒に歩けていた。
「……わぁ……」
どうやら日本のお祭りを見たことが無いらしいアリアは、色とりどりに飾られた街路と賑わう人々の喧噪に目をまんまるにしてる。
2人して雑踏の中を縫うように歩いていくと……
ぴた、と、アリアが1つの屋台の前で立ち止まった。

わたあめの屋台である。

アリアの視線の先では綿飴屋のおじさんが、くるくる、くるるっ、と本当に綿のような飴を割り箸に絡ませている。

大きなふたえの目をくりっくりさせてそれを見ていたアリアは、

「キンジ。なにあれ」

「なに……って、わたあめだ。書いてあるだろ」

「あめ……ってことは、食べられるの？」

アリアは斜め下から、本当にふしぎそうな顔をしてこっちを見上げてきた。

「あれはガキの食べもんだぞ？」

と小声で教えてやると、アリアは、かあ、と赤くなり――

「た、た、食べたいなんて一言も言ってないでしょ！」

ちょっとヨダレらしきものを口の端にのぞかせながら犬歯をむいた。

体液の分泌早すぎだろ。

しかし、俺もアリアとの付き合いが長くなってきたから分かるのだが……こいつがこういう態度の時は、『ものすごく食べたい時』だ。

食わせてやらないと、後で機嫌が悪くなってガバメントの出現率が高くなる。

「しょうがねぇなあ……すいません。わたあめ、1つください」
と、俺は仕方なしに屋台のビニールののれんをくぐった。
ざっ！　とアリアも超高速で入ってくる。
屋台の台はちょっと高く、ちびのアリアは頭だけやっと上に出せてる状態だが。
「おじさん！　味は選べるの？」
アリアに聞かれたおじさんは、
「えらべるよぉー」
へー選べるのか。
「ももまん味！　ある？」
あるわけねーだろ。
「あるよぉー」
あんのかよ！
と愕然とする俺の横で、アリアは目をキラキラさせながらわたあめ誕生シーンを見守る。
くる、くる、くるる……
「ほいっ。お兄さんのカノジョ、かわいいからおまけだ」
オジサンはちょっと大きめに作ってくれたももまん味（!?）のわたあめを俺に渡す。
「……か、カノジョじゃないですよ。こんなの」

代金を払いつつ、俺はそう返した。
アリアは俺の手からわたあめをもぎ取りつつ、
「キンジ！　これ、どこから食べるの!?」
などと目の中に星を輝かせ、小さくジャンプしながら俺の服をぐいぐい引っ張ってくる。
ったく、ガキだなー。ほんと。

その後もアリアは、タコ焼き、りんご飴、チョコバナナ……と、目に映る全てのモノを食べまくった。さすがに武偵として心配になってきた俺が、お前、体重のコントロールはちゃんとできてるのかと聞いたら、
「あたしはこないだの体重測定で、背がほとんど一緒の理子より軽かったから大丈夫」
と半ギレで返された。
胸の重さの差だろう、それは。
ともあれ腹が満たされたことで、アリア様は随分ゴキゲンのご様子と相成られた。金魚すくいでは金魚がアリアの凶暴性を察知して逃げ回り一匹も取れなかったので、かわりにヨーヨーを俺が釣ってやったらさらに姫のテンションは一段と上がりまくった。射的は、さすがに俺たちがやってしまうとチートなので……パスしておこう。
「どこの国でも――お祭りになるとみんな、はしゃぎすぎね。こういう時こそ犯罪は起き

やすい。警戒が必要だわ」

というような事をときどき思い出したようにキリノと言うアリアに、一番はしゃいでるのはお前だろと俺は心の中で思ったが言わないでおいた。

そして……七夕の笹を見たアリアがこれは何としつこく聞くので、これは願い事を書いて吊すものだと軽く説明してやると……

アリアはまた目を輝かせて短冊を買い、サラサラと英語で何かを書いた。織姫と彦星は英語が分かるんだろうか？　などと思いながら、そのやたら真剣な横顔を見ていると……

――わあー！

周囲で、人々の楽しげな歓声がした。

「……？」

見れば、アリアの向こうから大きな御輿がやってきている。

それと一緒に、押し流されるように群衆もこっちへやってきていたのだ。

うーんと背伸びして短冊を吊すのに必死だったアリアは、やってきた人波に押され――

「え、あ、あれ？」

と、声だけ上げつつ、そのちっこい身体を隠されてしまった。

いかん。

あの人波に流されていったら、はぐれてしまう。

「アリア、こっちだッ」
むきゅう！　というアニメ声の方に手を伸ばすと、ぎゅ。
ちっこい手が、人と人の間から手を握り返してきた。
そのまま人混みに流されつつ、うまく広場みたいな所に移動できた俺は——
すぽん！
アリアを群衆の中から、思いっきり引っこ抜く。
ぷは、と出てきたアリアは御輿を見送りつつ、反対の手で額の冷や汗を拭っていた。
「よ、よかったあ、出られて……なによ、今のあれ」
「あれは御輿っていうんだ。よかったな、はぐれなくて。危うく迷子のお呼び出し放送をする事になるところだったぞ」
と、俺もアリアに返しつつ、豪華な大御輿を見送る。
そして、そのまま1分ほど路地を歩いた俺たちの視線の矢印は……
↓
と、自分らの手と、手に、下りた。
――――！
俺の手が、アリアの手を。
アリアの手が、俺の手を。

しっかり、握って、しまって、いるじゃねえか！

「……!!」

「……!!」

4月にアリアと出会って以来、最大の緊迫感が俺たちの間を流れる。

俺の方を見たアリアは、握った手と手を見て、俺の方を見て、ぶわあああああ。

季節外れのコタツみたいに、顔面を赤熱化させた。

俺とアリアは手を離そうと――思ったのだが、アリアの脳細胞が何かエラーを起こしたらしく……逆に、ぎり。ぎりぎり。と、力を込めてくる。

ぎりぎりぎり。

ぎりぎりぎりぃーー

手、手！　折れるって！　なんだお前そのリミッター外れたみたいな握力は！

ーんばっ!!

ようやく、そして思いっきり手を離したアリアは……

体の正面で自分の腕を上に向け、まるで腕に棲む魔物に『鎮まれ……ー』と念じるようなすんごい表情をした。その指は、爪を立てるような形で硬直している。

「こ、こ……この……エロキンジ!!」

何がどうしてその呼び方なのか分からない俺の前で、その手が――ぎゅっ！

グーになった。
南無(なむ)……。

ちょっと人に酔ったアリアと左目の周りに青タンが出来た俺は、カップルだらけの拝殿(はいでん)を避けて人けのない神社の本殿の裏に回り……縁側みたいになってる板に並んで座った。
どん。どどん。
もう真っ暗な夜空には――色とりどりの花火が上がっている。
日本の花火を見るのも初めてらしいアリアは、それをずっと見上げていた。
アリアは……夏が似合う女の子だな。泳げないけどな。なんとなく……な。
――花火が終わると、夜空にはかわりに満天の星がきらめき始めた。
本殿の裏には木立(こだち)が繁(しげ)っており、そこからいろんな虫の音が聞こえてくる。
夏だな。
……
……
「あのさ」「えっとな」
お互い何かを言おうとしてハモってしまった俺たちは、顔を向き合わせる。
「あ、何？　あんたが先でいいわよ」

「いや、お前が先に言えよ」
そんなやりとりをして……りーりー、という虫の声が少し流れてから……
「カナのこと……なんか、ごめんね」
もじもじしながらのアリアが、謝ってきた。
「あたしはカナに負けた。ちょっと時間が必要だったけど、それを自分で認められたの。あんたが言ったとおりだった。あたしより強い武偵はいるし、今は――その1人と戦えていい勉強になったって思ってる。それと、本当は、何となく分かってたんだけど……」
アリアは……気恥ずかしいのか、少しうつむいた。
「――あれは、あなたの昔の恋人とかじゃないわね」
と言う横顔は、それを持ち前の鋭い直感で確信しているようだった。
俺が沈黙していると、アリアは少しだけ探るように……横目を向けてくる。
「でも、他人じゃない。もっと別の、強い、絆みたいなものがある存在だわ」
さすがに『兄』だとまでは分かっていないようだが……
アリアはやっぱり、史上最高の名探偵シャーロック・ホームズ卿の曾孫だな。
俺と兄さんの関係を、その鋭い洞察力でほぼ言い当ててきた。
「あのさ、あたし、回りくどいのとか苦手だからストレートに聞くけど……あんた、これから……カナと組むの？」

こわごわ聞いてきたアリアの目は、まるで捨てられそうな仔犬みたいに不安げで……
なんだよ……そんな目で見るなよ。
いつも俺のこと、犬みたいに扱ってるくせに。
「……それはない。俺とカナはそういう関係じゃないんだ――格も、違いすぎるしな」
ここはキッパリ否定しておくと、アリアは、
ホッ……
という心の声が聞こえそうなくらいに安堵の表情を見せた。
どうやらカナの一件では、そこがアリアにとって一番の心配事だったらしい。
「だが、カナは――お前にとって、まだ危険な存在だと思う。理由はよく分からないが、お前はあいつのターゲットになっているらしいんだ。だから気をつけろ」
「う、うん」
「それと……俺もこの際だから改めて言っておくけどな。お前、この間俺にパートナーをやめるつもりかって言ったが……俺はそもそも武偵自体、いずれは辞めるつもりなんだ」
今にして思えば、俺が武偵高に入ったのは――
元々、100%自分の意志というワケじゃなかったのかもしれない。
ヒステリアモードという特異体質に宿命付けられて、代々『正義の味方』をやってきた遠山家の末裔として……自分もそういう存在になる。それが当たり前のような気がして、

流されていただけなのかもしれない。

だが……兄さんが失踪した去年、俺は、武偵を辞めようと心に決めた。

そして今月、俺はカナ――兄さんに再会して、武偵を辞めたい気持ちが逆に強くなった。

虫けらさえ殺す事をためらうほどに優しかった兄さんが……人を、しかも、同じ武偵のアリアを『殺そう』と言い出すなんて……

あの人は、変わってしまった。

どうして兄さんがあんな事を言い出したのかは分からない。だが、その原因の根本にはやはり武偵という仕事の闇の部分が関わっている。それだけは――間違いないだろう。

だから俺は武偵高からも、来年の4月に転校する。お前に何と言われようとな」

でも、少なくとも俺は――兄さんのようにならないためにも、武偵を辞めるべきなのだ。

そして、普通の人間になって、平凡な人生を歩む。

それが正しい道なんだ。きっと。

ただ……

「それは……分かってるつもりよ。だけど……分かってるけど……」

と理解してるようなことを言いながらも明らかにしょんぼりムードになったアニメ声に、俺は少しだけ優しい顔を向けてやった。

ただ……な。

アリア。

俺はもう一つ、心に決めてる事があるんだよ。

――もう少し、もう少しだけの間……お前の力には、なってやろう――って。

お前は、戦ってる。その辛い運命に、そんなちっぽけな身体で、真っ正面から戦ってる。

俺のように……逃げようとは、せず。

だから

「ただ……武偵憲章8条は、守らないといけないよな」

まあ、こんなカンジに言っておくか。今のところは。

「8条――」

「『任務は、その裏の裏まで完遂すべし』。俺も、来年の3月末までは武偵……それまで、武偵憲章は破らない。人として、決まりは守るって話だ。だからイ・ウーとやらの一件が片付くまでは、付き合ってやるよ。お前に」

「キンジ……！」

だからあからさまに嬉しそうな声になるなよ。

「それにもう、成り行きとはいえ……理子・ジャンヌ・プラドと、イ・ウーのメンバーを3人もやっちまったんだ。お前だけじゃなくて、俺もイ・ウーのターゲットになってると考えるのが自然だろ。やったらやり返されるのが武偵の宿命だ。どっちかが全滅するまで

な。あーあ。俺も面倒な事に首を突っ込んじまったもんだぜ。やれやれだ」
と、我ながら少々わざとらしかったが……念押し気味に理屈を並べると。
アリアは……顔を伏せた。
そして、くるっ。
俺に背中を向け……
すんっ。
ぐすんっ。
なんか、鼻を鳴らし始めた。
急にカゼでもひいたのかと思ってのぞき込むと、ついっと顔をそむける。
……何だかよく分からないので縁側から降りて回り込むが、くるりっ。ツインテールをなびかせて、さらに背を向けてきた。
……なんか、腹が立ってきたな。
俺は縁側に這い上って、アリアの顔に迫る。さっ。
ささっ。アリアはコマみたいに回って、俺に後頭部しか見せてくれない。
すすっ、と追うと、くるるっ。これでアリアは1周した。
「何なんだよ。そのリアクションは」
と、手首を掴んでくるるとこっちを向かせると……

「あ……」

と、つい俺の顔を見上げてしまったアリアは……

……泣いて、いた。

うれし泣きしていた。

きら、きら、と、天の川を写し取ったかのように潤んだ目が小さく光ってる。

俺が『パートナーをやめない』って言ったことが……泣くほど嬉しかったのかよ。

「あ、その……」

ごめんな、と言おうとして、いや、ごめんというのもヘンだな……と俺が黙った時。

「ぅ？」

アリアが、コンニャクで撫でられたような珍奇な音を喉から出した。

……今度は何だ？

「うぃええ」

うぃえ？

と、口をへの字にしたアリアをのぞき込んだら……

「みぎゃあああああああー」

何だッ!?

アリアは急に、縁側の上で飛び上がった。

な、なんだそれ。
とうとうおかしくなっちまったのか。感情のケーブルをあちこちに接続しすぎて。
と思うと、アリアは浴衣の裾を踏み、すてーん！
お笑い芸人顔負けの足つきで、その場にひっくり返った。
そして金魚すくいの金魚みたいな動きで、びちびちびちっ！
「あ、あはは っ！　ちょ、ちょっと！　だめ、だめだめっ！　み、み、みうきゃぱあ！」
全身をびちびちさせつつ、浴衣を首の所から自分でひんむき始めた！
「ま、待て！　少しは説明してくれ！　マジでついていけないぞっ！」
「キ、キキキキンジなんとかして！　ふ、服の中！　な、なんかいるっ！」
「おい、大丈夫か！」
俺は、とにかく浴衣が苦しそうだったので、ぐいっ！　帯を背中の方から引っ張って、服を弛めてやった。
すると　ー
ブーン……
浴衣の中から、コガネムシみたいな虫が出てきて……ぴと。
近くの木に、とまった。
あー。

虫が服に入り込んで、くすぐったかったのか。
損したぜ、心配して。主に頭をな。
「……はひぃ……」
アリアは、ぐってりー。
すっかり着崩れてしまった浴衣ともども、縁側にノビてしまった。
俺は頬を引きつらせながら、カナに続いてアリアを倒した2人目の強者・コガネムシを見る……が……？　なんか、コガネムシとは微妙に違う。見慣れない虫だな。
どっかで、見たような……？
という俺の視線から逃げるように、びびび。その変な虫は雑木林の方へと飛んでいった。
「……な、なんなのよ、やらしい虫……ヘンな所をこちょこちょと……！」
いつの間にか素早く浴衣を直したアリアが、拳銃を手に立ち上がっている。
お前……その大口径拳銃で、虫を、どうしようと？
と引きつつ、俺はアリアが浴衣の中からまき散らしたあれやこれやを拾い上げてやる。
海外ブランドの特注品と思われる超小型のコンパクトやリップ、これは……ファンデか？　マスカラもある。お前、なんでこんなに気合い入れてあれこれ持ってんだよ。
などと思いつつ小物を拾い上げる俺の手が……つ、と止まった。
――武偵手帳。

アリアのそれが中途半端な開き方で落ちていて、そこに……若い男の写真らしきものが少しだけ見えていたのだ。

若い男――俺ではない、誰かの写真。

『遠山君、ライバルいるかもしれないよ？』

俺の頭の中で、なぜか……本当になぜか、先日の不知火のセリフが再生された。

いや……だから何だってんだ。そんなこと、俺に関係ない。

拳銃をブラ下げてはいるが、アリアだって一応の一応、分類学上はギリギリ女子高生の隅っこに位置する生命体のはしくれだ。いくら色恋沙汰が大のニガテとはいえ……好きな男の一人や二人ぐらいいても何の不思議もない。むしろ、その方が自然だろ。

「あっ」

アリアは小さく声を上げると、屈みながら、さっ。

武偵手帳を拾い上げ、自分の平たい胸の前に持っていった。

なんか、ちょっと慌てた仕草だな。

「……たぶんこれで全部だろ。無くなってる物がないか確認しろ」

と、俺は落ちていた化粧品をアリアの巾着袋にしまって、渡してやる。

アリアはそれを受け取ると、ちら。俺の顔を見た。

そして、ちら。その赤紫色の目で武偵手帳を見る。

なんだよ。別に俺は何も言ってないだろ。写真のことは。
「……なんで急に不機嫌になるのよ」
「なってねえよ」
「見たんでしょ、写真」
……鋭いな、アリアは。
あまりに図星だったので、俺はとっさにうまい言い訳が思いつかなかった。
「いいって別に。気にしてない」
「気に……って何よ。そんな顔されると、何か変な誤解を受けてるみたいでイヤだわ」
アリアは、するりっ。
子供が滑り台を滑るように縁側に座り、ばんばん！　と自分の横を手で叩いて示した。
おすわり、ってことだろう。
……しょうがねえな。
俺は……よいしょ、と、アリアの隣に座ってやる。
「普通は、親とか兄弟姉妹の写真を入れるものなんだけどね」
と、アリアが見せてくれた手帳の写真は――やっぱり、若い男の写真だった。
歳は、二十代の前半といったところか。
「この人は、世界一優秀な頭脳と肉体を兼ね備えた完璧な人。そして――」

占めかしいスーツを着た、そのカッコイイ男は……
全然違うのに、どこか、なんというか……雰囲気が、アリアに似ていた。
「――もう、この世にはいない人」
というアリアの言葉にもうなずけるほど、それは古い写真だった。
第一、モノクロ写真だ。それがセピア色にくすんでいる。
この人を……俺は、知っている。
探偵科の教科書に載っていた写真よりずっと若いが、この人は世界最高の名探偵――
「シャーロック・ホームズ1世。あたしの、曾おじいさまよ」
「……尊敬してるんだな」
「心から。それにこの写真はお父様からもらったものなの。いつも肌身離さず持ってるし、あたしの大切な心の支えだから……こうやって、誰かに見せたりもしない」
「見せてくれてるじゃんか」
軽くツッコむと――アリアはそっと、本当に大事そうに、誇らしげに手帳を閉じた。
そして縁側を降り……少し頬を赤らめて、振り返る。
「――キンジにじゃなきゃ、見せないよ」
帰宅した俺は、当たり前のようについてきたアリアを流れで部屋に上げてやった。

自室に久しぶりにアリアが戻ってきて……割と自然にしているが……間が空いたぶん、なんか妙な気まずさがあるな。今は白雪もいないから、2人っきりだし。

その空気をごまかすように、俺は不在中に届いていた段ボール箱を開梱する作業に取りかかった。

「……なんだ？　これ」

ナイフでガムテープを切り開けた箱には……服や小物があれこれ入っている。

送り主はＴＣＡ。台場にあるカジノの運営会社だ。

添付の手紙を見ると、先日、俺が単位不足をなんとかするために受けた任務――カジノ警備に使うものらしい。

「なにそれ」

アリアもやってきたので、手紙を読み上げてやる。

「カジノ警備の小道具だ。『来場客の気分を害さないために、客・店員に変装の上で警備していただきますようお願いします』だとよ」

「なるほどね。分からないでもないわ。歓楽施設の警備ではよくあることよ」

「ああ、せっかく遊びに来てるのに、武偵がうろついてたんじゃ楽しめないだろうしな」

サイズが合わなくて動きが鈍っても困るので、警備用の被服をもらった時は事前に試着しておくのが武偵の鉄則だ。

というわけで、特にこれから夜はすることも無かった俺とアリアはそれぞれ自分の服を着てみることにした。

説明の紙を見ると、俺の役どころは……『青年IT社長』、だ？　なんだよそれ。

自分で言うのもなんだが、こんなやる気の無さそうな社長はありえんだろ。

とはいえ、依頼元の指示なら仕方ないか。

というワケで着てみると……いかにも成金のギャンブラーっぽいフォーマル・スーツにサングラス、男性用香水までついてるぞ。趣味に合わないなあ……こういうの。

ただまあ、この服は防弾繊維で作られている。その辺は分かってるな。向こうも。

「な……なによ……これ……」

というアリアの深刻そうな呻き声が寝室の方から聞こえてきて、俺は振り向く。

「どうした、アリア。何か問題でもあったか」

そして……がちゃ。

と、寝室のドアを開けた。不用意に。

アリアは全身鏡の背後に映った俺に気づくと――ビノクリして、びょこんー

耳を立てた。

ウサギの、耳を。

「バ、バカキンジぃ！」

ばっ！

と振り返って両手を挙げ、人を威嚇するヒグマみたいな構えを見せたアリアは――

自分の黒い水着みたいな服をあわわわと見直して、やっぱり俺に襲いかかるのをやめ、

「ノ、ノノノックも無しに開けるなって前言ったでしょッ！　見るなぁ！」

こっちに背を向け、両腕を縮ませながらしゃがみこんだ。

ぷるぷるるー！

恥ずかしさに震えている毛玉みたいなシッポでも分かるが……アリアは……

バニーガール、の服を着ていたのである。

そういえば……カジノには、いるな。バニーガール。

ていうかさっき耳がぴょんってなってたが、どういう構造なんだ？

「出てきなさい！　ヘンタイ！　エロキンジ！　チキンカンジ！」

チキンカンジ……？　ああ。『チカンキンジ』を噛んだのか。

アリアめ。言いにくい新単語を作るからそういうことになるんだ。

しかし、アリアのバニーガール姿か……

かわいいには、かわいいな。

シチュエーション次第ではヒステリア化の危険も無くはないが、バニーガールは通常、

スタイルの良い大人の女性が着るものだ。

幼児体型のコイツが着るのは、不適格。不適合。不釣り合い。その不釣り合いな感じのおかげで、俺的には安全だろう。仮装みたいなもんだと思えばいい。

「あっ、背中っ、せ、背中はダメっ！　見たら風穴！　風穴あけるわよ！」

言われて見てみれば、アリアのバニーガール服――その背中は大胆にV字に開いていて、白い素肌がほとんど丸出しになっている。

わたっ、わたたっ、とアリアが手で隠そうとしているその背、左側には……

占い、弾痕があるな。

いや……

お前は貴族でしかも女だから、男よりずっと恥ずかしいのかもしれないけどさ。

斬られたり撃たれたりした痕のない武偵なんて、いないんだ。

そのぐらい恥ずかしがるな。勲章みたいなもんだと思え。

「おい。別にお前の背中なんてどうでもいいんだがな」

この間のメイド衣装の時も思ったが、アリアは変装を恥ずかしがりすぎだ。

これは一応、武偵として注意しておかなければいけないだろう。

「服装ぐらいガマンしろ。まあ、手伝ってもらう俺が言えた立場じゃないが、武偵は潜入捜査とかGメンやる時はいろんな衣装を着なきゃいけないんだ。ほら。本番でトチらないためにも少しそのカッコで生活して、慣れとけって」

「うぅぅぅぅぅぅ」
と呻ったアリアは、俺に武偵を語られたことが悔しかったらしく涙目で背を伸ばした。
そして、ぐる。ツインテールとウサギの耳を振ってこっちを向く。
……ん？
なんだ。何か……違和感があるな。今のアリアには。
俺は顎に手を当てて、探偵科で鍛えた観察力を発揮しにかかる。
……
……
あ。分かったぞ。
胸が、いつもより大きいのか。
服の中に何か入れているんだな。
というのもバニーガールの衣装は元々、胸がある女性用に作られたもの。
胸が残念なアリアが素で着ると、胸と服の間にスキマができて大変気の毒な事になってしまうからな。
「ア」
ずむっ！
――リア、お前とうとう本格的な偽装に手を出したな。東京地検に告発してやる。

と言おうとしたセリフを最初の1文字だけで先読みしたらしいアリアの前蹴りが、俺の体を『く』の字――どころか、『つ』の字に曲げてダウンさせた。

「パットは、ファッション！　パットは、おしゃれ！　パッー！　トー　は！　無罪！」

と「　」1回につき1発の割合でアリアが地団駄を踏むように俺の頭を踏みつけ、俺が弁解の言葉も言えないままとにかく身をよじって逃げようと仰向けになると――だん！

（う……っ!?）

俺を踏み損ねたアリアのハイヒールが頭の脇に踏み落とされ、アリアが俺の頭をまたぐような姿勢になった。

う……うっ？

……えっ……？

身体の、芯が――じわっ、と熱くなってるぞ。俺。

ヒステリアモードに、なる……？　いや、もう甘くだが、なりかけてる気がするぞ！

ど、どういうことだよキンジ!?

さっきは大丈夫そうだと思ったのに。

ハイヒールのアリアに蹴られてまたがられて、挙げ句ヒスるなんて。おかしいだろ！

ていうか、マズい。

ここは寝室だ。

もしここで、あの女たらしのヒステリアモードになってみろ。先月白雪に閉じ込められた、あの救護科の応急室と同じで――取り返しのつかない、大悪事を働いてしまいかねないぞ！」

「――キンちゃん！　どうしたの!?」

そう、この白雪の時と同じ……って……

……はい？

しら……ゆき……さん？

ばばん！　と寝室のドアを両手で開け放ってきたのは――いつもの巫女装束で、旅帰りらしく風呂敷包みを背負った……

姓は星伽。名は白雪。

星伽白雪。

その人であった。

俺の身に何かあったんじゃないかと心配そうに見開かれた、その円らな黒い眼が俺の額をヒールで踏んで腕組みしたバニーガール姿のアリアを見て――ぎ、ぎぎ、ぎぎぎんっ！　と吊り上がった。

「神崎・H・アリア……！　う、うふふ、ふふふふ……」

いつも穏やかな垂れ気味の目が、ビームでも出しそうな鋭い眼光を放ち始めている。

そして白雪は『御免なさいませ』という感じに顔をちょっと伏せ、ぱっつん前髪が作る影で目を隠した。

さぁ――――っ、と。

星伽の武装巫女が流す、言いようのない殺気が室内に張り詰めていく。

心臓の弱い人だったらこの時点でもう危ないだろう。

「――キンちゃん、ただいま」

お、おかえり。

「ごめんなさい」

謝罪癖のある白雪が、前払い方式で謝ってきた。

なんだ。何のごめんなさいだ、それ。

「……星伽でキンちゃんを占ったら『ウサギ難』の相が出たから、私、お仕事のあとすぐ帰ってきたの。それで、こんな事もあろうかと……『あれ』、持ってきちゃったんです」

ピタッ……と。

アリアのせいで鍛えられたハズの俺の心臓が、一瞬止まる。

「あ、あ、あれはやめろ白雪！　昔、使うなって言ったろ！」

と、慌てて起き上がった俺が叫ぶより一瞬早く――――がしゃん！

白雪の緋袴の内側で、重たぁーい金属物が床に落ちる音がした。

「だからごめんなさいなんです！」

叫びつつ白雪が持ち上げたそれが、ぶっといバネ仕掛けで、がしゃがしゃ！

電光石火の素早さで組み上がる。

白雪はそれを――じゃきっ！

抱えるように構えた。

「「！」」

俺とアリアが揃って絶句した、それは――

M60マシンガン。

米軍が開発した、重さ10キロにもなる戦争用の機関銃だ！

もちろん、日本での所持は違法。警視庁だって大目に見ちゃくれないシロモノである。

白雪はそれを右腕一本で腰だめに構えると、白小袖からぞろおおと銃弾ベルトを出し左手に乗せて給弾の構えを取った。お前はランボーか！

「この――泥棒ネコー　そんなあられもない服で、キンちゃん様と、お、オトナの遊びに興じるなんて――万死に値します!!　万死！　万死！　すなわち1万回死ぬべし！」

「な、ななな何なのよこの女は！　毎回毎回おかしいわよ！」

さすがにこれは火力負けすると見たらしいアリアが、拳銃を出しすらせず壁際まで退く。

じゃきん！

白雪は　問答無用！　とばかりに瞳孔がヤバいことになった眼でこっちに照準を合わせる。

ていうか白雪、俺！　俺俺！　俺も照準入ってるって！

「くたばれ神崎アリア　これは天誅！　天誅なのですっ！　あはっ、あはははは！」

――ばりばりばり

ヒステリアモードには、『メザ・ヒステリア』というものがある。
ある、といっても、俺が勝手に名付けているだけだが。
性的興奮とは電気のスイッチみたいにオン・オフがカチッと切り替わるものではなく、じわじわと心身に変化を与えてくるものである。
その変化の途中でさっきみたいに横槍が入ってきたりすると、俺はヒステリアモードが甘くかかった『甘ヒス』モードで寸止め状態となり――短時間、能力がやや向上する。
そのおかげであのM60の弾幕をかいくぐって逃げられた俺は、海に飛び込む際、一つの異変に気づいていた。
ちょっと調べておかなければいけなさそうな、異変に。
というのも窓際に出た時、第2女子寮の暗い窓からキラッと反射光が見えたのだ。
経験上……あれは、望遠スコープがこっちを見ていた時の光だ。
被害妄想かもしれないが、誰かに一部始終を見られていたら厄介なことになる。先生にM60機関銃の事をチクられて、不純違法行為で俺まで処分されても困るからな。
というわけで俺は落下防止用の金網を歩いて渡り、男子寮の表まで戻り……
第2女子寮へと向かった。
できればこんな所、しかも夜にお邪魔したくないんだけどな。
マズい情報は、早めに口止めしておくのが武偵の基本だ。

あのスコープが光った部屋は――女子寮の、最上階の――たぶん、この部屋……
と、俺は通路で立ち止まり、問題の部屋の前で眉を寄せた。
……表札が無い。
誰の部屋か分からん。
チャイムを押しても、誰も出ない。
空き家なのか？　どうも、1人用の部屋っぽいが。
弱ったなー……どうしたらいいか、甘ヒスも解けてしまった俺には分からないな。
と、後ろ頭をがりがり掻いていると――いきなり。
はぐっ！　はぐはぐっ！
何の足音も無かった背後から、何かが俺の腰の辺りにへばりついて来た！
「う、うおっ!?」
振り返ると、白くて大きい犬――
いや、オオカミが、俺のポケットから出たレオポンのストラップに食らいついていた。
こ、この銀狼。
見覚えがあるぞ。
たしか先月、武偵高に侵入してきていたのを追い回して捕まえたやつだぞ。
俺と――狙撃科の麒麟児、レキが！

「ハイマキ、やめなさい。それはキンジさんのものです」
そのレキの声が突然聞こえてきたので、俺は顔を上げる。
そこでは、武偵高の夏用制服を着たレキがいつもの無表情顔で狼に話しかけていた。
狙撃銃を肩にかけたレキも、足音どころか気配すら無く――いつの間にか、俺の背後に現れていたのだ。
抑揚のないレキ喋りでたしなめられた銀狼は
「……」
ぱ
とレオポンから口を離し、おすわりした。
そしてレキの方をいい子ちゃん顔で見てから、俺には……なんか、ガンをたれてきたな。なんだよその態度の違いは。
「……」
一方レキは日頃からつけたままのヘッドホンを外しすらせず、そのCGみたいに整った顔でボーッとしていた。
手には、買い物に行ってきたのかコンビニ袋を提げたままだ。
「……」
だから何か喋れよお前。人形みたいだぞ。
「――えっとだな。ちょっと、話したいことがあって来たんだが」

沈黙に耐えかねた俺がそう切り出すと、レキは……すっ、とカードキーでドアを開けた。
そして、やはりここが自室なのだろう――狼を連れて、無言で中に入る。
「あ、いや。立ち話でいいんだが……」
女子の部屋になんか入りたくない俺はそう言うが、レキは薄暗い奥へと行ってしまう。
本当に……何を考えてるか読めないヤツだ。相変わらず。
ドアを閉ざされたら、話すことすらできなくなるかもしれない。
そう思った俺は仕方なしに、本当に仕方なしに、レキの部屋に入っていくのだった。

天井からブラ下がった裸電球に照らし出された室内は――
ビックリするほど、何もない空間だった。
ベッドも、箪笥も、テレビもパソコンもない。カーペットや畳すらないから、床も壁もコンクリートがむき出しだ。狼に餌を食べさせるトレーが、部屋の隅にあるだけ……
（なんだよ……この部屋……）
夏なのに、ちょっと寒気を覚えるな。これは。
レキは冷蔵庫も戸棚もないキッチンで、コンビニ袋からカロリーメイトを出していた。
壁際には、同じカロリーメイトの空き箱が幾つか並べてある。
レキはあれしか食わないのか。よく生きてるな。

「……？」

呆気にとられながらも、俺は横にもう一部屋あることに気づく。

ちょっと電気をつけてみると中には机があり、黒い金床みたいな工具が設置されていた。

これは……銃をメンテナンスする道具だな。

それも、本格的な物が一式揃ってる。

多かれ少なかれ、武偵は自分の銃を自らメンテするものだが――大体は、簡易な整備にとどめる。完全分解整備や改造といった作業には、プロの手を借りるのが普通だ。武偵高では装備科がこれを請け負って、単位か金をもらっている。

だがこの工房を見るに、レキはどうやら自分の狙撃銃は何から何まで自分で手入れするらしい。火薬を量る天秤まであるところを見るに、銃弾まで自分の手で部品から造ってるみたいだぞ。

さすがロボット・レキ。やることが徹底してるな。

あまりのプロフェッショナルぶりに、なんだかこの部屋はレキの世界――という感じがして、自分が場違いな存在という気さえしてくる。

……とっとと用件を済ませてしまおう。

「おい、レキ」

「はい」

「お前、さっき俺の部屋を見てただろ。ドラグノフのスコープか何かで」
「はい」
……あっさり認めやがった。
「ノゾキっていうんだぞ、そういうの。何を見たのか知らないが、全部忘れろ。いいな」
「はい」
ごめんなさいの一言も無くそう応えたレキは、壁に背を向けて、すとん。
ドラグノフ狙撃銃を杖のように抱いて……体育座りした。
「――話は、それだけですか」
短いスカートをはいてるのにおかまいなしで膝を立てるので、俺は目を逸らす。
と、用心深いんだか無防備なんだか分からないな。レキって子は。
「あ……ああ。もう帰る」
「ではそちらの部屋の電気は、キンジさんが消していってください。ハイマキ、おいで」
ぱちん。レキは座ったまま狙撃銃の先端でスイッチを押し、リビングの電気を消す。
その傍らにやってきた銀狼は……ハイマキって名前らしい……伏せて、目を閉じた。
「……なんで電気を消すんだよ」
「寝るからです」
「寝るって、その姿勢でか？」

と驚いて聞くと、こくり。

レキは機械仕掛けのように目を閉じつつ、ヘッドホンを外してうなずいた。

「もしかして……いつも座って寝てるのか？　お前」

こくり。

……すげえな。

狙撃手（スナイパ）はストイックだ。どんな悪環境にも耐えて、ターゲットが射程圏内に入ってくるのを待つ――って話は聞いたことがあるが、こいつはストイックってレベルじゃねーぞ。

まるで行住坐臥（ぎょうじゅうざが）、敵に備（そな）えてるサムライみたいだ。

「キンジさん。私も一つ、いいですか。カジノ警備の仕事をされるそうですが」

「……何だよ」

「私も、やります」

何？

なんでだ。

「お前も単位不足なのか？」

ふるふる。

レキはショートカットの髪を少しだけ揺らしながら、首を横に振った。

「じゃあ何でだよ」

と、尋ねると――

「――風を感じるのです。熱く、乾いた、喩えようもなく……邪悪な風を……」

物のない部屋に少しだけ響いた、レキならではの透明感のある声に――

俺は不吉な予言を聞いたような気分になり、何も、言葉を返せずにいる。

レキの部屋から男子寮に戻り、そーっ……とドアを開いた俺の部屋は……あれ？

片付いてるぞ。

現実逃避したい心が見せた幻覚かとも思うが、幻ではなさそうだ。なぜならベランダで斉射を終えた白雪のM60がプスプス煙を上げている。誰かに見られないようにするためか、機関部にはオートバイ用のシートを被せてあるな。

「……」

壁や天井もこの小一時間で見事に直され、二段ベッドまでどこからか持って来ており、さっきの乱射事件の痕跡は……ほぼ完全に、証拠隠滅されている。

この辺、手慣れすぎててコワイものがあるな。あの武装巫女。

アリアは今の白雪を相当な危険人物と判断したらしく（実際そうだが）、姿を消したままだった。晩ぐらい帰ってこないかもな　あんなカッコだけど。

「――大丈夫。東京はお姉ちゃんに任せなさい」

洗面所の方から、白雪の声がする。
……星伽の妹あたりと、電話で会議しているっぽいな。凛とした喋り方で分かる。
白雪はあんなに頼りなく見えても、実・義理を合わせて7人姉妹の長女なのだ。
「――敵は異国の蟲術を使います。霧雪、粉雪、気をつけて、持ち場を離れないように。しっかり星伽を守るんですよ。それじゃあ……うん。おやすみなさい」
洗面所にいた白雪の電話が終わったようなので――
俺はその背に、声をかける。
「……妹たちは、みんな元気か？」
「ひゃあ！」
いきなり声をかけられてビックリしたらしく、白雪はイスに腰掛けたまま30センチほど飛び上がった。
だからいつもどうやってるんだよ、その白雪ジャンプ。
俺は心の中でツノコみつつ、今のので白雪が落っことした携帯を拾ってやる。
白い携帯の待ち受け画面はどこで撮られたのか俺のアップ写真だったような気がしたが……見なかった事にしておこう。忘れよう。
「キンちゃん、あの、その、お部屋……ごめんなさい……ごめんなさいっ、私、私、私」
携帯を胸元にしまうとペコペコ上下座を始めた白雪に、俺は溜息をつく。

「もういい。もう直したみたいだし」
色々あきらめてるし。
「で、敵ってなんだ。星伽神社、宗教戦争でもしてるのか？」
「あ……あの……恥ずかしい話なんだけど……その、さっき、イロカネアヤメが何者かに盗まれちゃったみたいなの」
「菖蒲……？　ああ。あの、いつも持ってた刀か。星伽に置いてきたのか？」
そういえばさっきも、いつもみたいに日本刀を振り回さなかったよな。
「取り上げられちゃったの。私、いろいろ星伽の制約を破っちゃったから……」
誰のためなのか夜なのにきちんと薄化粧した顔で、白雪は少し考えるような表情をする。
そして、ごそごそ。
取り出した絣布の巾着袋から、中身をあれこれ取り除けて洗面台の棚に置き始めた。
漆塗りのコンパクトを出した白雪は、カツンッ。エアホソケーでもするような手つきでアリアの洋物コンパクトを床に落とす。ひでえ。
「キンちゃん、あのね」
そうして、巾着袋の底から和紙と筆ペンを出し……何か、絵を描き始めたな。
「星伽で、よくない虫が見つかったの。忍び込んでたの。こんな感じなの」
よくない……虫？

と、俺は白雪の絵をのぞきこむ。
白雪が描いていたのは、なにやら甲虫みたいな……
って。おい。白雪。
お前……う……うめぇな。絵。
筆ペン・本なのにちゃんと陰影がついてて、白黒写真みたいだぞ。
あのかわいそうな画力のジャンヌ画伯に、おえかき教室でもやってやれよ。
「この虫、どうやら――使い魔らしいの」
「ツカイ……何だって？　S研用語を当たり前のように話されても困るんだが」
「あ、えっと。日本で言う、式神のようなものです」
「……余計分からん。というか、コガネムシに見えるぞ」
「うん。これはスカラベ。タマオシコガネだよ」
じゃあコガネムシなんだろ。
「キンちゃん、この虫……最近、身の回りで見かけませんでしたか？」
書き上がった絵で自分の顔を下半分隠すようにして、両手で俺に見せてくる白雪。
俺は……それで、いろいろ思い出す。
「……見た。こないだアリアと2人で七夕祭りに行った夜」
和紙の上に見えている白雪の目がいきなり刃物のようになったので　―俺はセキをして

ごまかしつつ……

「あ、あいつの浴衣に入ったから、取ってやったな」

いけね。

焦って、余計マズいことを言ってしまったような気が……と思って白雪を見るとその長いまつ毛の目は、怒るというより何やら真剣な色を浮かべていた。

「キンちゃんは……夏休みに、カジノ警備のお仕事するんだよね？　アリアと」

「あ、ああ」

……ほんと、俺のことは何でもよく知ってるよな。コイツは。

まあ、武偵高の校内ネットに載ってるから生徒なら誰でも見れるんだがな。

「――私も、やります」

白雪は何やら強い意志のこもった声で言うと、虫の絵を折りたたんだ。

やってもいい？　じゃなくて、やります、と来たか。

白雪にしては珍しい言い切りっぷりだな。

「……なんでだよ。お前は別に、単位足りてないわけじゃないだろ」

「あ……うん。でも、えっと、あれは4人いないと取り下げになっちゃうし……まだ人数足りてないみたいだったから。た、単位のためだよキンちゃん。えい・えい・おー！」

どこか……何かをごまかすようなテンションで、白雪は小さく握りこぶしを振り上げた。

ほんと、単位とか成績のことになるとやる気を出すなぁ。この優等生さんは。

とはいえ、人手が足りないのは確かだ。武藤や不知火のことはまだシカト中だし、この仕事、緊急任務の掲示板に『女子を推奨』とも書いてあった。

「じゃあ……白雪、お前はバックヤードで連絡係でもやってくれ。警備とは言うが、あの仕事は要するに賭場の用心棒だ。お前はあまり前衛、向いてないだろうからな」

なし崩し的にではあるが――これで、4人揃ったわけだ。必要条件を満たせたな。

しかし、口より先に手というか銃が出るアリア。なにを考えてるのか微塵も分からないロボット・レキ。武装巫女の白雪。あと、Eランク武偵の俺。という4人か。

……先行き不安だな。今回も。

4弾　同士討ち（フォーリング・アウト）

7月24日、昼。俺は台場にやってきた。

ここにある公営カジノを警備する仕事で、進級に必要な単位を補填するためである。

世間は楽しい夏休みシーズン。なのにジャンヌいわく問題児の俺は補習任務。拳銃ぶら下げてカジノのGメンだよ。俺は一体どこで人生のボタンを掛けまちがえたのか。それはハッキリ分かってる。アリアの辺りでだ。

と、ボヤいても始まらない。

青年IT社長とやらに化けた俺は、成金風のネクタイを整えつつ……アクアシティ台場から動く歩道を渡り、都営カジノ・『ピラミディオン台場』へ入っていく。

日本でカジノが合法化されてから2年。法整備直後に公営カジノ第1号として造られたのがこの『ピラミディオン台場』だ。名前の通り巨大なピラミッド型をしたこのカジノは全面ガラス張りで、真夏の日差しの下だと少し眩しい。

資料で読んだところによると……これは数年前ちょっとニュースになった、『どこかの国から日本に漂着した、巨大なピラミッド型の投棄物』に都知事がインスピレーションを受けてデザインさせたものだとか。

――自動ドアを抜けてクーラーの効いた建物に入ると、レーザー光線で彩られた噴水のあるエントランス・ホールに出た。そこを抜けた向こうが……カジノ・ホールだ。

「両替を頼みたい。今日は青いカナリヤが窓から入ってきたんだ。きっと、ツイてる」

チェンジカウンターで合言葉を言い、作り物の札束1千万円分を色とりどりのチップに換えてもらった俺は……演技とはいえ、少し大きな気持ちになってカジノに入る。

カジノ・ホールの入り口付近は、安価に楽しめるスロットマシンのゾーンになっていた。観光客や若者が、街角のパチスロ感覚でチェリーやベル、数字の7といった絵を揃えようと躍起になっているな。

この1階は海辺のカジノという事で特色を出そうとしたらしく、ホールをぐるりと囲むように――海に繋がるプールがある。

水路みたいなプールは水泳用ではなくて、バニーガールの姿をしたウェイトレスさんが電動式の水上バイクで素早く行き来するためのものだ。

「ドリンクいかがですかー」「カクテル、ウィスキー、コーヒー、全て無料でお配りしてまーす」「ご注文の方はお近くのウェイトレスをお呼び付けくださーい」

こうやって遠目に見てる分には……アメンボみたいで面白いな。あの仕事風景も、と、往来する彼女たちを見ていると――

ぐい！

いきなり、斜め下から耳を引っ張られた。
「なにヨダレ垂らしてんのよこのスケベ!!」
耳の間近から大音量のアニメ声が響き、先月戦ったブラドの『ワラキアの魔笛』に匹敵するダメージが俺の鼓膜を襲う。
耳を押さえて悶絶しつつ、見下ろすと……
ピンクのツインテールがウサギ耳をぷりぷりと立て、両拳を腰にあてていた。
「――こらアリアっ。俺は客ってことになってんだ。それっぽく振る舞えよ」
なんでかやたらご機嫌ナナメのアリアに、俺は小声で囁く。
言われたアリアは、ぷいーん。
そっぽを向いた。
何だよ。俺、何かしたか？
「お前……ちゃんとウェイトレスやれてんのか？　不安になってきたぞ」
「あたしはちゃんとやってる。でもなんでか、みんなあたしには注文してこない」
と口をへの字にするアリアは、ホールの男たちを恨みがましい目で見回す。
なるほど。それで不機嫌だったのか。
ふむ……そりゃそうだろうな。
俺はちょこーんと立つちびっこバニーガールのアリアを見て、心の中でうなずく。

先日試着してた時にも思ったが、そもそもバニーガールというものは大人の女性がするカッコだ。高校生が、というか身長だけ見れば小学生じみたアリアがそんな服を着たって、人気は出ないだろう。いくら胸をパットでごまかしたところで、な。

が、そう言ったら銃殺刑だ。口を滑らさないために、話題を変えておくか。

「……ていうか、なんでお前はあれに乗らないんだよ」

と、水上バイクを顎で示すと、ぎろー　と俺に向き直ったアリアが――

「うるさい！」

ぴょん！

びしっ！

ジャンプしてきて、左右のウサギ耳の先端で俺の両目を突いてきた。耳、意外と堅えー！

「うぐおッ！」

「あたしが泳げないの知ってるくせに！　あとで風穴ルーレットだわ！　あんた！」

な、なんて凶暴なんだ。うさぎって、もっとおとなしい生き物じゃなかったか!?

凶暴ウサギに耳と目を破壊された俺は、逃げるようにカジノの奥へと警備位置を移す。

奥にはトランプやマネー・ホイールといった高額チップを賭けるゾーンがあり、客層も本物のギャンブラーっぽい人々に変わっていく。

きちんとスーツを着込んだ男。ドレス姿の美女。モバイルPCを持って眼鏡を光らせるガリ勉タイプ。一見シロウトっぽいジーンズ姿の奴もいるが、目つきが明らかにカタギのものじゃあないな。

――この辺は、一層の警戒が必要そうだ。

そう思った俺は、なにか問題が起きていないかと……飾り物の高級スポーツカーの脇、シャンデリアの下、歌手つきのジャズバンドの前なんかを鵜の目鷹の目で歩き回る。

すると……

ざわ……ざわ……

なんか……すでに起きてるっぽいぞ。問題。

ホールの一角に、やたら人が集まってる。

（何だ……？）

一応まだ客のフリをしながら、俺は人だかりに近づいていった。

「な、なんて恥ずかしがり屋さんなんだ……すっげえ可愛い……」「来た甲斐があったな、見とれて大枚スッちゃったけど」「あ、胸元を隠さないでー！　こっち向いてー！」

などと、男たちが何やら盛り上がってる。

ケータイで写真を撮ってるのもいるな。

アイドルでも来てんのか？

「カ、カクテルウェイトレスの撮影はご遠慮下さい！」「入口にご注意事項として書いておりますー！」

というバニーガールのお姉さん達に救い出されるようにしつつ、1人のバニーガールがぐいーっと下に引っ張ったウサギ耳で顔を隠しながらよろけ出てきた。

ていうか……

白雪、じゃねえか。あれ。

なんであんな事になってんだ。

半べその白雪は頬を引きつらせる俺に気づかず、こぞって目をハートマークにする男達から逃げるようにスタッフルームへと引っ込んでしまうのであった。

他の客に怪しまれないよう、俺はしばらく時間をおいてからスタッフルームに入る。

中には、パイプ椅子の上で溜息をついている白雪だけがいた。

ハイレグの黒水着に網タイツのバニー服を着て、ウサギ耳は……外しているな。

「白雪。お前、仕事やるんならバックヤードにしろって言ったろ」

俺の声に、はわっ！　と顔を上げた白雪は

「キっ、キンちゃん……！　ごめんなさいー　ごめんなさいごめんなさい！」

といきなり謝りながら、あせあせ、とウサギ耳を頭にセットし、ぐいーっ。

また前に引っ張って、顔を隠した。

いや、顔を隠したいだけなら……耳を頭につけ直す必要、無かったんじゃないか？

「だ、だって……キンちゃん、このお洋服、アリアに着せて楽しそうにしてたから、これ、す、好きなのかな、って、思って……」

耳と耳の間から、潤んだ黒い瞳でビクビクこっちを見てくる白雪。

「あ……あれは仕事の練習で着てただけだ。困ってたんだ。俺は、あの時」

ていうか、ハイヒールで踏まれてた俺がどうして『楽しそう』に見えたんだ。

おかしいぞ。白雪フィルター。

「ていうかな。警備の仕事はGメンだってバレたら失格なんだぞ。知ってるだろ。わざとバラして犯罪を予防する手法もあるが、今回は客の気分を害さないために隠密行動しろってのが依頼側の希望だ。それをなんで、あんなに人を集めちまったんだよ」

「……そ、それは……私にも分かりません……」

ようやくウサギ耳から手を離した白雪は、ぱっつん前髪の下から俺を見てきた。

そして顔の前で両手の人差し指をつんつんさせ……

「私、この服が恥ずかしくて……隠れるようにお仕事をしてたら、いつのまにか……男の人ばっかり、まわりに、いっぱい……」

ああ……なるほど。

今の白雪を見てたら、理由が分からないでもない気がするよ。
ハイレグカットの太ももを隠すようにモジモジと膝を寄せる白雪は、女嫌いの俺にすら分かるぐらい男ウケしそうな姿をしている。
元々が、グラビアアイドルみたいな体形をした白雪だ。それがその雪肌を丸出しにして、めったやたらに大きな胸を下半分しか隠さない過激な衣装を着ているのだ。
さらに白雪は俺以外の人間、特に男には極端に人見知りなところがある。そのオドオドした態度も、一部の男には妙にウケがいいらしいのだ。俺はイライラするだけだがな。
その辺が、いろいろ複合作用して……
あのホールを、オオカミの檻にウサギを投げ込んだような事態にしたのだろう。
「……その服が悪いんだ。色々と。お前はアリアや理子より大人っぽいんだから、あまり男を刺激するようなカッコをするな」
と、俺が父親みたいな小言で結論付けると。
「お、男のひとを……し、刺激……？　わ……私が……」
神社と学校からほとんど出たことがない箱入り巫女さんは、かあ、と頬を赤く染めた。
そして、しゅん……「生まれてきてスミマセン」って感じに肩をすぼめた。
しかし数秒後、「！」と何かに気づいたような顔をする。
なんだ、この一連の動作。イヤな予感がするぞ。

「男の人……キ……キ、キンちゃんも……男の人。だよね……っ？」

勇気を振り絞るように、白雪は、カツソ。

黒いハイヒールを鳴らし、片手でヘソ下を隠すようにしつつ立ち上がった。

そして、こそこそ。恥ずかしそうに反対の手で網タイツのずれをちょっと直す。

「……じゃあ、こ、この衣装……キンちゃんは、ど、どうかな……」

ど……『どうかな』って。

白雪は、きゅうっ、と内股になりつつも懸命に俺の表情を窺ってくる。

「も、もしキンちゃんがこれ、お好みなら……こ、この衣装の、ままでも……お仕事の、あ、あと、あとに、でも……このあいだ、お約束してくれた……」

白雪は何やら妙な事を脳内でシミュレーションし始めたらしく、両手を赤い頬にあてて目をぎゅーっと閉じた。

「こないだの、救護科の、つ、つ、つづ……」

バニー耳の間からは言葉に合わせて、しゅっ、しゅっ、しゅしゅっ、と湯気が出てる。

な、なんか暑くなってきたぞ。スタッフルームが。

「どうしたんだ。落ち着け白雪。おまえ下手したら炎とか出すんだから」

「つづ、つつ……つづ……き……ぃ！　どうぞっ……うさぎおいし、かのやまぁ……！」

なんとか『続き』という単語らしいもの言い切った白雪を正気に戻すため――

「こら白雪。なに1人で頭ショートさせてんだよっ」
揺すろうと、両肩を掴むと。
「い、いまですか！　今すぐはだめ、じゃああありません！　でも、でも、か、かぎっ！」
目を渦巻きみたいにさせた白雪は、また例の自動オーバーヒートを起こしている。
いったい何が引き金だったんだ。誰か教えてくれ。
「そ、そそこの鍵をしないと！」
「おい、ほらっ、正気を取り戻せっ」
がく、がく、と揺すると……
「あ、あっ、あひくぅ　ッ」
なぜか白雪は天高く飛んでいってしまいそうな、ありえない声を上げ――ぷつん。
がくっ。
長い黒髪をなびかせて、いきなり糸が切れるように卒倒してしまった。
これは……新しいパターンだな。自己完結しやがった。相変わらず意味は分からんが。
「だ……大丈夫……か……？」
大丈夫そう……だな。
なんでか、天国にでもいるような恍惚とした表情で気を失ってるし。
一体白雪が脳内でどんなに幸せな事を考えていたのかは知らないし知りたくもないが、

どうやらそれは白雪自身にとって過負荷な内容だったらしい。

人間、ムリは禁物だよ。

アリアも白雪も、いまいち私服警衛は向いてないようだ。

だが、それで解雇されてしまってはたまらない。進級のかかっている俺は自分だけでも仕事を全うしようと、カジノの2階――特等ルーレット・フロアに向かった。

この特等フロアの賭け金は最低額がなんと100万円。

会員パスを持つ金持ちだけが賭けに参加でき、見物にすら別途入場料がかかる。

なので、客はあまりいないハズ……と思ったが、一角に大勢の見物客たちがいるな。

誰かが、大きな勝負をしてるらしい。

俺はこの『青年IT社長』風衣装と一緒に貸与されたパスを使ってフロアに入り、その動物の剥製なんかが飾られている豪華な雰囲気の一角を窺う。

そこで大きなルーレット台につく、金ボタンのチョッキを着た小柄なディーラーは――

「……」

レキだ。

レキはカラーンと賭け開始を告げる鐘を鳴らし、いつも通りの無表情で台に向き直る。

アリアも白雪もハイレグのバニーガール姿で四苦八苦してたのに、こいつだけズボン。

レキ……お前、ひょっとして、要領いい奴？

「では、プレイヤーは次の賭け金をどうぞ」

平坦な発音で言ったレキに、周囲の観衆が盛り上がる。

カジノによってルールは少しずつ異なるが、ここのルーレットはまずプレイヤーが金を賭け、次にディーラーがルーレットに玉を放り込む順序で行われる。

玉が放り込まれてからの賭け金の追加・変更は一切きかないルールだ。

「は、はは……こんなに強くて……可憐なディーラーは初めてだよ。この僕が1時間も経たない内に3500万も負けるなんてね――」

と言いつつルーレット台についているプレイヤーは、1人で賭けに興じているようだ。

――キミは本当に、運を司る女神かもしれないな」

女神って。

コイツはただの殺し屋もどきですよ。

と心の中でツッコみながら……俺は、この男に見覚えがある事に気づいた。

テレビで見たことがあるぞ。たしか、日本のビル・ゲイツとか呼ばれている本物の青年IT社長だ。いろんな美少女タレントとスキャンダルになりまくりの、な。

この有名人目当てに、みんな集まってたのか。

「……残りの手持ちは負け分と同じ、3500万ある。これを全額、黒に賭けよう」

熱の籠もった声と手つきで、じゃらっ！　と、積み上げたチップをテーブルの『黒』のマス目に置いた若社長は――負け続けて興奮状態になっているのが一日で分かった。

1枚につき100万円を意味するチップが35枚も動いたのでギャラリーは拍手喝采しているが、これは……ちょっと、トラブルの予感がするな。

「『黒』ですね。では、この手球が黒に落ちれば配当は2倍です。よろしいですか」

白いピンポン球みたいな手球を取ったレキは、相変わらず口調にも表情にも動きがない。

「ああ。だが、配当金は要らない。勝ったらキミをもらう」

と言った若社長に、周囲がどよめく。

「僕は強運な女性をものにすることで、強運を得てきたんでね」

なに言ってやがんだ。

このロリコンめ。

ていうか……レキをどうもらう気か知らないが、3500万円もの価値はないと思うぞ。

「……」

対するレキは、黙ってる。

いつも通りのレキだ。

だが、それが逆によくない。愛想笑い一つしないので、周囲にまるで今の発言に怒っているような印象を与えてしまっている。まるで一対一のケンカが始まる前みたいな空気だ。

これじゃあ若社長が勝っても、レキが勝っても、問題になるぞ。
アリア。白雪。レキ。どいつもこいつも、ちゃんと仕事をしてくれよ。
……仕方ない。俺が動くか。これも単位のためだ。
ちょっと失礼。この勝負、俺も参加させてもらいます」
軽く手を挙げつつ、俺も――テーブルにつく。
ルール上、ディーラーが締め切りを宣言するまでは誰が賭けてもいいことになっている。
若社長は、ジェルで固めた前髪の間からこっちを睨んできた。
「誰だ。お前もディーラー目当てか」
「俺はあなたと商売ガタキの会社役員ですよ。といっても……この程度しか手持ちの無い、しがない下請けですけどね。ああ、目当ては配当だけです」
俺は肩をすくめて100万円のチップを1枚見せ、いかにも小規模なベンチャー企業の若社長といった雰囲気を演出した。
場には『さえない奴が出しゃばってきた』というムードが流れ……やや、盛り下がる。
だが、これでいい。
この若社長は相当アツくなってる。もし負けたら、ひどい恥をかかされた気分になって暴れ出したりするかもしれない。
だから、その場合に備えてわざと一緒に負けてやるのだ。

そうすれば少しは恥ずかしさも減り、トラブルを未然に防ぐことができるだろう。
でも、もし社長が勝った場合は……知らん。レキ、自分でなんとかしろ。
「とっとと賭けろ、ガキ。彼女は渡さない」
渡さなくていいって。
俺が賭ける場所は……そうだな。同じ黒に賭けて負けても、あからさますぎるな。色は『赤』で――数字は、まぁ何でもいいか。と俺は出席番号の23番にチップを置いた。
これなら当たる可能性は36分の1。体よくハズレてくれるだろう。
「……それでは時間です」
レキはテーブルを撫でるような仕草を見せて、参加締め切りを示す。
そしてルーレットを回転させ、純白の球を……
スッ。
一瞬のためらいもなく、機械のような動作でルーレット内部に転がした。
球はクルクルとルーレットの縁を滑ってから――
カツンッ、カツンッ、カツカツンッ。
数字を示す区域の仕切り板の上を跳ね始める。
ごくり。3500万もの大金を賭けた岩社長が、生唾を飲んで身を乗り出す。
俺も、少し緊張しているフリだ。ここは。

カツンッ、カツンッ……カラカラ。
ころん。
「――赤（ルージュ）23。2人目のプレイヤーの勝ちです」
しれっ、と言ったレキに――
うおおおっ！　と周囲の客たちが余計盛り上がり、若社長は……がくんっ。テーブルに突っ伏した。
「っ……！」
頬（ほお）を思いっきりひきつらせる俺に、レキは社長と俺が賭けた合計3600万円分のチップをT字の棒でちゃりちゃりと寄越（よこ）してきた。
「はいどうぞ。配当は36倍です」
って……空気読めよレキ……
お前、今の、絶対意図的（いとてき）に入れただろ！
ルーレットの特定のマスへ自由自在に球を入れられる人間は、いない。というのがこのゲームの大前提になっているわけだが……レキなら、やりかねん。
場を盛り下げるために賭けたのに、逆に大盛り上がりじゃねえか。
「ははは……7千万の負けか。さすがに痛いよ。でも、こんなに金を落としてやったんだ。可憐（かれん）なディーラーさん。せめてキミのケータイ番号だけでも……教えてくれないか？」

と顔を上げた社長さんは、どうやら転んでもタダでは起きない性格らしい。
だから社長になれたんだな
ていうか、そんなにレキが気に入ったのか。変わった人だ。
「お引き取り下さい。今日はもう、帰った方がいいですよ」
「いや、そこをなんとか……じゃあメアドだけでも」
「お集まりの皆さんも、お帰り下さい」
往生際の悪い若社長をスルーして、レキは見物客たちに語りかけ――
「良くない風が吹き込んでいます」
と俺に視線を寄越しつつ、言った。
良くない、風……？
「せめて、キミの名前だけでもっ！」
なおも社長が食い下がった時、ばんっ！
レキの背後、並べられた動物の剥製の間から――
疾風のように、銀狼が飛び出した。
「――!?」
レキが飼ってる、ハイマキだ。あんな所に潜ませてたのか。
銀狼はルーレットのテーブルを踏み台にして、大騒ぎするギャラリーを飛び越えた。

１００万円のチップ・コインが、尻餅をついた社長の頭上をばらばらと舞う。
俺が振り返ると同時に、ハイマキは――どおんっ！
フロアの片隅からこっちに走ってきていた、人間――？　に体当たりした。
「！」
なんだ……あれは……？
それは　異様、としか言いようのない男だった。
全身に黒いペンキでも塗ったかのようなそいつは上半身ハダカで、腰に茶色の短い布を巻き付けているだけの姿だ。
だがそれよりもっと異様なのは、頭部。
頭が、人間のそれではないのだ。
あれは……アリアと見た動物番組に出てきてた、ジャッカルというイヌ科動物の頭。
頭がジャッカルで、体が人間――という肉体を持っているのだ。そいつは。
直感的に分かる。パーティー用のマスクなどといった児戯じみたものではない。キバを剥いた口の動きが、自然すぎる。
そしてヒヤッとすることに――手には、半月型の斧を持っているぞ！
金が目当ての強盗……には見えない。ここの誰かを狙ってきたのか？
銀狼ハイマキの体当たりをモロに喰らったそのジャッカル人間は、がっしゃあああん！

ハイマキごとぶち当たった壁際のスロットマシンを、ほぼ真っ二つに割ってしまった。
その周囲にはコインが飛び散り、漏電の光がほとばしる。
「な……何のイベントだよ！」
叫ぶ若社長は……
「イベントであって欲しいところだけどな」
ネクタイを外した俺が出した拳銃を見て、声にならない声を上げて逃げていった。
それに続いて我先にと逃げ出す客たちの脇で、むくり。
その首にハイマキを噛みつかせたまま、ジャソカル男が起き上がる。
し……信じられねえ。
一度取っ組み合ったから分かるが、ハイマキはバイクぐらいの体重があるんだぞ。
さらに信じられないことに、そいつは頭をぶんっー　と振り回し、ハイマキを床にぶちつけて振りほどいた。
そして——起き上がろうとするハイマキが朦朧としている中——
こっちを向き、その赤い眼と斧をギラつかせてきた。
狙いは……俺たち、ってことなのか？
「気をつけてくださいキンジさん。あれは人間ではありません」
レキの言葉に「見りゃ分かる」と苦笑いした辺りで——

客たちが逃げていった階段から、逆に、1人のバニーガールが駆け上がってきた。

「……蟲人形……！」

目を丸くして、俺と対峙するジャッカル男をそう呼んだのは――白雪である。

「キンちゃん、逃げて！　この敵の中身に触れると呪われちゃう！」

何やらS研的な事を叫んだ白雪は背中に手を回し、刀を抜くような手つきをしたが……その背に、いつもの銘刀イロカネアヤメはない。

あの刀は白雪の実家が取り上げて、その後何者かに盗まれたのだ。

一瞬眉を寄せた白雪は、すぐさまバニーガール衣装のシッポに手を突っ込み、そこから何枚かの紙切れ、いや、御札を出した。

「伍法緋焔札――」

何事か呟いた白雪が御札を撒くと――

ひら、ひらら、と札は白雪の前方で横一列に滞空し、バッ！　と一斉に燃え上がった。

「キンちゃん伏せて！」

ぱちん！　叫んだ白雪が両手の甲を合わせて鳴らす。

それに呼応して、火球と化した5枚の札が照明弾みたいにジャッカル男に迫った。

そして敵が振り向くと――その視線を避けるように5方向に分かれ、逃げられないよう各々カーブを描きながら……バシバシバシュウウウッ！

火炎放射器のように、炎を浴びせかける！

「うッ……！」

一気にオレンジ色の光に包まれた室内に、俺は身をかがめたが……

「――ダメです。あれはおそらく火に強い」

熱風にショートカットの髪を揺らすレキが、テーブル裏に隠していたらしいドラグノフ狙撃銃を取り出した。

そのレキが言う通り……

白煙からのしのしと白雪の方に出て行ったジャッカル男は、ほとんどダメージを受けた様子がない。

S研系の話は専門外だが、超能力には非常に複雑な『属性』があるとアリアから聞いた事がある。ゲームでは4～5種類ぐらいに簡略化されているが、あれと似たシステムで、超能力者たちが使う術には70から80種にも及ぶ複雑な属性と相性があるらしいのだ。

一つの学問として研究されてもいるその『属性』とは、思いっきり簡単に言えば複雑なジャンケンみたいなものだ。ある属性はある属性に弱い。しかし、ある属性はある属性を受け付けなかったりもする。今のが、まさにそんなカンジの無効っぷりだった。

そういう事が……分からない白雪じゃないハズなのに。

「来なさい傀儡！　キンちゃんには指一本触れさせませんソ！」

眉をつり上げ、カツンー　とハイヒールを鳴らして開手で構えた白雪は……どうやら、それを分かった上で、たった1人、敵に挑もうとしてるらしい。

「……」

レキはドラグノフを構えたが――すぐには撃たない。

俺も拳銃を抜くが、ここからは援護射撃がし辛い事にすぐ気づく。

白雪は俺たちとジャッカル男を挟むように立っているので、貫通したり外れた弾が白雪に当たる可能性があるのだ。そういうことすら、今の白雪は判断できていないらしい。

白雪――お前、なんで俺の事になるとそうやって冷静さを失うんだよ！

「――はっ！」

飛びかかるジャッカル男の斧を躱した白雪は、相手の眼めがけて一本貫手を放つが――

ガスッ！

ボクサー並の素早さでそれを避けられ、カウンターの掌底で顎を殴られた。

「――――！」

白雪は膝を閉じたまま、元々X脚気味のふくらはぎを左右に開き……壁を背に倒れる。

かくんっ。ウサギ耳をこっちに向けるようにして、首も前に倒してしまう。

あれは、脳震盪を起こした倒れ方だ。すぐには立てないぞ。

「白雪ッ！」

白雪にトドメを刺そうとするジャッカル男に、俺は近接拳銃戦を仕掛けようと踏み出す。
が、その袖をレキに掴まれた。
ひょい、とテーブルに飛び上がって片膝立ちしたレキは――
「キンジさん、肩を借ります」
バスンッッー
俺の肩を台座代わりにして、ドラグノフを発砲した。
ビシッ！　ジャッカル男の肩――鎖骨の辺りを弾が貫通し、ホールの壁に穴をあける。
いま、白雪の頭が下がったことで、安全な射撃線が作れたのだ。
がぶうっ！
衝撃で身をねじり倒れたジャッカル男に、ようやく朦朧状態から回復したらしい銀狼が鋭いキバで噛みついた。
さらにがぶがぶと、頭や首に何カ所も噛みつかれたジャッカル男は――どたっ。
手足を脱力させ……ざあっ。
溶けるように、黒い砂――どうやら、砂鉄らしい――に、なった。
砂の上でキョトンとするハイマキ同様、これにはさすがに俺も我が目を疑ってしまう。
（ど……どういう事だよッ……！）
さっきの発砲音にキィーン……と鳴る耳には、びびび、という虫の羽音が聞こえてくる。

「……？」

砂の中から――今度は、黒いコガネムシが出てきたのだ。

な、何もかも分からない。状況が全く把握できないぞ。

だが、考えるのは後だ。今はまず白雪を応急処置してやらねば！

「キンジさん、前に出てはいけません。あの虫は危険です」

危険？　虫が何だってんだ、それより白雪を……！」

と言うが、レキはその小さな手で俺の袖をしつこく掴んでくる。

放せ！　放せって！

何なんだよ……！

黒いコガネムシは、レキの視線から逃げるように……扉から逃げていってしまった。

「キンジさん」

抑揚のない――しかし、緊張感を秘めたレキの声に俺は振り向く。

見ればレキは、ちゃきソ。

狙撃銃の先端、バレルの銃口下に……刃渡り20cm程の刃物を取り付けていた。

コンバットナイフのような形の、銃剣である。

ドラグノフ狙撃銃は元々、ロシアの突撃銃をベースにした銃だ。イザという時は先端に銃剣を取り付けて、槍のように扱うことができる。

だが……どうして今、着剣する必要があるんだ。
「まずは白兵戦で敵を減らしつつ、場所を変えましょう。ここは狙撃に向きません」
「敵を……減らす？」
今、倒したじゃないか。お前と銀狼が。
「私の残弾はあと4発しかありません。弾数より、敵の方が多いのです」
と、斜め上を向いたレキの視線を追うと――
「……!!」
背筋が凍る、という言葉の意味が分かった。
そのグロテスクな光景に、俺は凍り付いたように身動きが取れなくなってしまう。
絢爛なシャンデリアの向こう、ホールの天井に、今のジャッカル人間がウジャウジャと何人も張り付いていたのだ。
ザッと見ただけでも、10体はいるぞ。
俺は……銃剣を携えた、ディーラー姿のレキに振り返った。
強襲科にいた頃、俺はレキと一緒に事件現場に行ったことが何度かある。
だが、彼女が近接戦に巻き込まれたのを見たことはない。
そもそも狙撃手は、近接戦に向かない。狙撃手とは俺たち強襲型の武偵とは全く異なる技術と知識を備えた、遠隔攻撃専門のスペシャリストなのだ。

レキの細腕で、このバケモノたちとの肉弾戦に対応できるとは――到底、思えないぞ。

（白雪……）

まだ気を失ってる白雪を、すぐに助けに行かなければならない。

だが――あいつらのドをどうくぐり抜ければいい？

ヤツらはその赤く光る眼を連ねて、こっちを狙っている。

白雪を放っているのを見るに……俺やレキが白雪を助けに行った所を、一斉に襲う作戦だったらしいな。脳みそまでジャッカル並ってワケじゃ、なさそうだ。

どうすればいい……どうすればいいんだ。

分からない……分からない、今の、俺には……！

――バスバスバスバスッ！

2丁のコルト・ガバメントが連射される、発砲音！

明滅する発砲閃光に薙ぎ払われるようにして――どちゃ、どちゃー

黒いジャッカル男が2、3人、天井から落っこちた。

「はぁー。また、こういうタイプね？」

と、呆れるようなアニメ声で言ったのは……ちびバニーガールの……

アリアだ！
ホールに入ってきたアリアは更にバスバスと足元の敵に.45ＡＣＰ弾をぶち込み、ピンクのツインテールを反動で躍らせた。
その手つきは、まるでホウキがけでもしてるかのような平然さである。
ば……場慣れしてるなー……化け物との戦いに。
「ほらバカキンジ、何ボーっとしてんの！」
がう！　とジャッカル男顔負けの犬歯をむいたウサギのアリアは、バンザイするような姿勢でばかすか天井の敵を撃ちつつホールの中央までずかずか歩いてくる。
ジャッカル男たちはガサガサと、ゴキブリみたいに天井の四方八方へ這って逃げていく。
……ウサギとジャッカルの関係、完全に逆転してるぞ。
「こういうときは敵が降りてくるのを待つんじゃなくて、自分から上がるの！」
スツールとテーブルを、ぽん、ぽんっ！　と踏み台にしてジャンプしたアリアは、天井からブラドがる巨大なシャンデリアにしがみついた。
そして、んしょ、んしょ、と拳銃を持ったままシャンデリアによじ登る。
「レキー」
ダンッ！　キインッー
アリアに呼ばれたレキの銃弾が、シャンデリアの金具を掠める。

その衝撃で、シャンデリアはアリアを乗せたまま――ぐる、ぐるん。メリーゴーランドみたいに回り始めた。

バッ！　ババババッ！

回転砲塔と化したアリアが、天井のジャッカル男たちを撃って、撃って、撃ちまくる。

ばらららっ。ばらばらっ。どちゃっ。

俺の周囲には――空薬莢やら流れ弾やら壁の破片やら、くたばったジャッカル男まで、どんどん降ってきやがる！

「お、おいアリアっ！――

な、なんて分かり易いというか、遠慮が無いんだ。アリアってヤツは。

俺たちが悩んでた属性とか、射撃線がどうのとか、全くもってお構いなしじゃねえか！

パァン！

銃声にカジノ・ホールを見渡せば、いつの間にか白雪のそばまで駆け寄っていたレキが銃剣付きのドラグノフを発砲していた。

アリアに落とされたジャッカル男のうち、立ち上がろうとしたヤツを撃っている。

近くに落ちてきたジャッカル男が一匹起き上がろうとしたので、俺も――

ガウンッ！

仕方ない。身動きを取れなくするために、ベレッタでそいつの膝を撃っておく。

どちゃ、と倒れたジャッカル男は、アリアに撃たれて転落したほとんどの奴と同様……

ざあ、と砂鉄に戻り……砂の小山からコガネムシを一匹飛び立たせる。

ホールの中央の方へ歩み寄って周囲を見回せば、ジャッカル男は残り2体になっていた。

どちらも、床に落ちてきている。

タンッ！

レキがシャンデリアを吊り下げる鎖を撃ち……がっしゃん！

アリアごと落ちてきたシャンデリアに1体潰されて、これで、残り1体。

俺たち3人に囲まれた最後の1体は

「オオォ――ン！」

ホルンのような遠吠えと共に、窓を体当たりでぶち破って屋外へ逃げていった。

デコレーションケーキみたいなシャンデリアに座っていたアリアが、にょい、と立ち上がり――

「んもう。せっかく客を外に逃がしたのに、ゴレムも逃げたんじゃ――マズいわね」

じゃきじゃき。

どこかから取り出した弾倉を、漆黒と白銀のガバメントに再装填してる。

「ゴレム……？　この砂人間どもがそれか？　白雪はムシヒトガタとか呼んでたが――」

「あんた分かんないで戦ってたの？　このドベー　小学校からやり直してきなさいっ！」

小学校に戻ったってこんなバケモノの話は教わらんだろ。

「日本ではヒトガタ、シキガミ、ドグウ、ハニワ。欧米ではゴレム、ブードゥー。つまり藁とか紙切れとか砂とか石で出来た、超能力で動く操り人形よっ」

びびび、という電波を表すような手つきで、アリアは頭上に指をひらつかせる。

人外どもの不気味さも薄れちまうな。そこまで分かりやすく説明されちまうと。

「要するに、リモコン操作のモンスターってことか」

「そうよ。あら、落ち着いてるじゃないキンジ」

「……慣れちまっただけだよ。悲しい事にな」

「そんじゃ――」

と、余裕ありげに笑ったアリアに、

「――やりますか」

俺は仕方無しのセリフを続けてやり、じゃきん。

ベレッタのスライドをコッキングし、追撃戦の準備だ。

白雪のことはレキに任せ、窓から敵の様子を覗うと　ピラミッドの斜面を滑り降りたジャッカル男は……なんと、水面を走って逃げ始めていた。

そんなのアリかよ！　とは思ったが、超能力者の下僕に常識を求めても始まらない。

追跡するにはどうすれば……と、瞬考えたが、答えはすぐ下の1階にあった。
今はもう避難してしまったバニーガールたちが乗っていた、水上バイクだ。
事前に渡されたカジノの見取図で把握していたが、1階を囲むように造られたプールは海につながっている。これを使って、海上を追うことにしよう。
跨乗戦は先月レキと銀狼を追った時にもやったが、2人乗りで戦う時は操縦手が前で、銃撃手が後ろにつく。順当に考えて――俺が操縦手・アリアが銃撃手だろう。
そう思った俺は、プールの縁に浮いていた水上バイクに乗り、
「追うぞ。アリア、乗れッ」
と、ついてきたアリアに叫ぶが――
「ラ……ライフジャケットは無いの？　せめて浮き輪と、あと手首に巻く浮き輪を……」
アリアは、水上バイクに乗るのを渋っている。
眉を寄せた俺は――硬い表情で水面を見つめるアリアを見て思い出す。
そうだ。コイツ、泳げないんだった。
だがこの水上バイクの操縦には、両手が必要になる。どうしても銃撃手が必要だ。
レキと交替させるか。いや――ダメだ。アイツは手持ちの銃弾が足りないと言っていた。
「じゃあお前が前に乗れっ、俺が後ろでいくぞ！」
焦り気味の俺は、後部座席に移りつつアリアを引っ張った。

「うきゃぁ！」

子供みたいなアニメ声を上げたアリアは――

水を軽くまたげば水上バイクのステップに足を乗っけられるのに、それにしくじった。

違うパーツに足を引っかけやがったので、ぐらり。水上バイクが大きく傾く。

「な、何やってんだよ！」

俺はとっさにアリアの細い腰を抱き支えて、ぐいっと引っ張った。

ぽふんー　と操縦席のシートに反対向きでまたがったアリアは

「うあああ！」

俺に抱きついてきやがった。むきだしの両腕で。

そんなに……怖いのかよ！

ていうか前後が逆だって。ハンドルに背を向けて座ってたら、誰が操縦すんだよ。

「き、キンジぃー！」

アリアは全力で俺の体を抱きしめ、シートにまたがる脚まで俺にしがみつかせてくる。

ぎゅうううう。まるでコアラの木登り状態だ。

「こ、こらー」

俺はアリアを引き離そうとするが、アリアは逆に頭までこっちの顔に押しつけてきた。

ううっ。あ、相変わらず　甘酸っぱい、いいニオイがしやがる。このピンク髪。

髪を避けるようにしてアリアの顔を覗き込むと――
アリアは、本物の小ウサギのようにぷるぷる震えていた。瞼まで震わせてる。
「きっ、キンジっ、だめ、だめ、あ、あたしッ……」
興奮状態の涙目で俺を見上げてきた、そのお人形さんみたいに愛らしい顔に――俺は、心の中で舌打ちする。
アリア、お前……！
双剣双銃の2つ名が泣くぞッ。そんな、そんな……かわいい声上げて――
か、かわいい表情しやがって!!
（うッ……）
水着姿みたいなアリアに抱きつかれ、さっきの勇ましいアリアと今の小ウサギアリアのギャップを意識してしまったが最後――俺は。
なっちまったよ。また。
――ヒステリアモード、に。
今回も早かったな。なぜかは知らないが、アリアが相手だと……血流がすぐ体の真芯に集まっちまう。ヒステリアモードを避けるための対応を、取りきれない。
どうなってんだよ、これ？
「アリア」

ちょうど口のそばにあったアリアの耳に低く、優しい声で――囁いてるぞ。俺が。

うう。俺、きめえ。

「1つ、賭けようか」

耳打ちしながら俺は、水上バイクのスピードメーターと時計を確認している。

速度は――かなり出る。あのジャッカル男の走るスピードから射程圏内に入れるまでの時間を計算すると……さっきは気ばかり焦っていたが、実はかなり余裕があるな。

「か、賭け……？」

まだ小刻みに震える手で俺にしがみついているアリアが、聞いてくる。

そうだよアリア。

別のことを考えて、まずは恐怖を紛らわすんだ。

「今は5時57分。3分以内――6時までにジャッカル狩りができたら、俺をあげよう」

「な、なな、何よそれっ!?」

「そのかわり……それ以上かかったら、俺が、アリアをもらう」

少し明瞭に、強めにそう言ってやると――

アリアは赤紫色の大きなお目々をまんまるに見開いた。

「ま、ま、またなに急にヘンなこと言い出してんのよっー　って……あ、あれ？　えっ、それ、それじゃあどっちみち、あんたが得するじゃない！」

何をどう解釈したのかは知らないが、アリアは色白な頬をどんどんピンクに染めていく。
そしてピンクから、みるみるうちに赤へ。
俺が『得』って？　何が？　どう？　言ってごらん？」
一言ごとにアリアに顔を近づけながら、もう一押ししてやる。
アリアは近づく俺の顔に、う、うう、うきゅうううと焦り度を上げていく。
何かを言おうとはしているが、喉の詰まったような音しか出せないみたいだ。
「フッ……冗談だよ。アリアは相変わらず、からかいがいがあるね」
苦笑してみせた俺にアリアは、わぐ、わぐ、と口をやって……
ぎぎん！　眉をつり上げたかと思うと、ぶんっ！
俺のこめかみめがけて、鋭いショートフックを放ってきた。
ぱし。
ゼロ距離なので体重の乗らないパンチを、俺はヒステリアモードの反射神経で止める。
「いい打撃技じゃないか。ほら……もう、きみは冷静だ」
反対の手で、俺の背にしがみつくアリアの網タイツあんよを取り――くるりっ。
ダンスみたいにその身体を半回転させ、前を向かせてやった。
ついでに後ろから回した両手でそのお手々を動かし、左右の操縦桿を優しく握らせる。
「怖くない。怖くない。俺が、ついてる。だから――怖くない。だろ？」

リアシートから、お人形さんアリアを動かす黒子みたいになった俺は――暗示にかけるように、そのツインテールの頭に言葉を埋め込むように、言葉を繰り返す。

すでに耳まで真っ赤のアリアは……

前髪で目元を隠すようにうつむきつつ――こく。

こくこく。

手短に答えます、ってカンジに無言でうなずいた。

「アリア。戦いとはギャンブルのようなものだ。ジャッカル達は自分自身を賭け金にして、俺たちに勝負を挑み、負けた。そして代償を支払わず逃げようとしている」

俺はアリアの手を上から握ったまま、水上バイクのイグニッション・スイッチを押す。

ドルルル……ビッグ・スクーターみたいな音を上げて、エンジンが動き始める。

「代償は、取り立てる。俺は敗者に情けをかけない性格でね。もちろん、『6時まで』の賭けも……もしアリアが負けたら、情けをかけない」

え、え、えッ、あ、あんたあれは冗談って、などと言うアリアを俺は無慈悲に無視する。

「走れアリア。もうルーレットは回っている。白球は投げ入れられた」

「……ど……どっちも、ねッ」

ようやく顔を上げ、海を睨んだアリアがキレ気味に言う。

「どっちも？」

「いつものキンジも！　今のキンジも！　どっちもバカキンジ！　だわ！」
そしてアリアは、ぐいっー　アクセルを引いた。
いきなりフル・スロットルで。

ピラミッドから短い水路を抜け、水上バイクは海に出る。
斧を投げ捨て、四つん這いで本物のケモノみたいに走るジャッカル男は……足で走るよりは速くなっていたが、海を渡る前に充分追いつける距離にいた。
アリアの操縦は――まさに、ヤケクソの全速力。全速力にもほどがある。バイクで言うならウィリーしてるような姿勢で、波をブチ壊しつつまっすぐ敵に迫っていく。
何にせよ、気持ちいいほどに一直線な子だよ。アリアって子は。
少し濡れた前髪をかきあげた俺は……
相手が射程圏内に入ったことを目測で確認しつつ、
「――その先は通行止めだ」
ガウンッー
呟いて放った9ミリパラベラム弾を、ジャッカルの踵に命中させた。
走っていた勢いで敵は水面を滑るように倒れ、白い飛沫を上げながら……
沈んでいった。

そして、水没の一瞬前に逃げ出したらしいコガネムシがどこかへ飛んでいく。
かなり速度を出していたアリアは、通常のブレーキでは対岸のクルーズボート波止場に衝突しそうだったので――ざざあああああっ――……！
バイクをターンさせ、噴水みたいに水を巻き上げながら停止した。
ざざん……ざざ……
アリアが今作った波が、収まっていき……
ちゃぷん、ちゃぷん。
気づけば水上バイクは、無茶な停め方をしたせいかエンジンを停止させてしまっていた。
ツイてないな。こんな所でエンストとは。
俺は夕陽にきらめく東京湾を横目に、ベレッタをホルスターにしまった。
なぜあのゴレム達がカジノを、そして俺たちを襲ったのかは分からないが……
だがひとまず、これにて一件落着だな。
「アリア、ピラミディオンに戻ろう。操り人形をけしかけるような超能力者が自ら打って出てくるとは考えにくいが……白雪の事も心配だからね」
アリアにそう話しかけるが……アリアは、話を聞いていない様子だ。
何やらうつむいて、ハンドルについたデジタル時計を見ながらぶるぶる震えてる。
「……また、怖くなってきたのかい？」

優しく、白い肩に手を乗せてやると――

「みきゃあ！」

と、アリアはバイクのシートからウサギ跳びみたいに飛び上がった。

どうしたんだい。

「さ、3分たっちゃったけど！　6時過ぎちゃったけど！」

フットに立ち上がったアリアが、ハイヒールで水上バイクの先端まで逃げていく。

「……？」

「い、い、いまはだめ！」

と、なぜか俺を怯えきった目で見ているアリアに――苦笑が漏れる。

どうやら、俺がさっき言った『賭け』がどうのって話を引きずってるみたいだな。

「アリア。水」

と……ハイヒールの足元を指してやると。

アリアはちゃぷんちゃぷんと海水を跳ねさせている足元を見て、あわわ。口を震わせた。

そして……

カサカサカサーっ　カニみたいな横歩きで、リアシートの後端まで移動してくる。

さらに、がしっ。

俺の両肩を掴み、ヘソのあたりをぽんぽん突きだして、俺を前に押し出した。

あんたが操縦しなさい、ってことか。ついでに俺の顔を見ないですむ位置に陣取って。

「ところで……アリア」

俺は水上バイクのエンジンを再びかけつつ、このあいだ自転車を2人乗りした時と同じ姿勢になったアリアに話しかける。

「『いまはだめ』って言ったね」

「え、え、あ、うん。だめ、だめよっ」

「じゃあ、『あとで』なら？」

「えっ!?」

びく、とアリアが背筋を伸ばすのが、肩に乗せられた手から伝わってくる。

「『あとで』なら、いいんだね？」

余裕綽々（しゃくしゃく）の笑みで、振り返ってやると――

「あああああたしは負けてない！　あんたの負け！　あんたの負けだもん！」

「でも、確かに6時を回っただろう」

「だだだれも東京の6時なんて言ってないでしょ！　ロンドンはまだ6時じゃない！」

いっぱいいっぱいになったアリアは、ムチャクチャな理屈で支払いを拒否する。

「――じゃあ、俺の負けだ。約束通り、『俺をあげる』よ」

うきゅう！　とアリアがベロを喉（のど）に詰まらせたような音を上げている。

ははっ。これ以上困らせちゃかわいそうだな。

ここはポリシーを曲げて敗者に追い打ちをかけるようなマネはしないであげよう。

「それにしても……いったい誰だったんだろうな、ジャッカル男達をけしかけてきたのは。俺には心あたりがまるで無いんだが」

俺は話題を変えてあげつつ、水上バイクを一直線に走らせる。

アリアは賭けの話をうやむやにするチャンスとばかりに俺の話題に食いついてきて、

「お……大方エジプトの国粋主義者が超能力者でも雇ったんでしょっ。エジプトは昔から王様のミイラや柩は博物館に持ってかれるわ、神殿のオベリスクはパリやローマに持ってかれるわで、愛国者が怒ってるのよ。そ、そのくらいあんたも勉強しときなさいっ」

と、お得意の国際犯罪について講釈を垂れ始める。

「ここだって、ピラミッドをカジノにするなんて……彼らからみれば、冒涜もいいとこだからね。怒る気持ちも分からないでもないけど、ボーリョクは、よくないわ。うん」

君が言えるのかな。それ。

と、苦笑しつつの俺の頭の中で……

『夏は　男女の仲が大きく進展する季節なんだよ？』

このあいだ不知火が言ってたセリフが、なぜかリプレイされた時――

――タァァ……ン――

遠い、遠雷のような音。

銃声……

みたいだったが……？

波の音と混ざって、よく分からなかったな。

「キンジ――第2射に、気をつけるのよ……」

背後から――

何やらシリアスな、アリアの声がした。

「第2射？」

「う……」

「どうした？」

水上バイクを操縦しながら振り向くと、

「――撃たれた……らしい……わ」

俺の肩を掴んでいたアリアの手から、力が抜け――

ぐらりっ。

俺が振り返ったのとほぼ同時に、アリアはピンクのツインテールを夕陽に煌めかせて、

その身を大きくよじった。

大胆にV字カットされた、バニーガール衣装の――背。

その背中の、ちょうど弾痕があった部位に……

今、撃たれたらしい銃創が――赤い花のような、鮮血を　散らしている

「アリア!?」

全身から力を失ったアリアは、まるでスローモーションのように、リアシートから海へ

……ざしゃあっ！

「アリア！」

海へ、墜ちた！

アリアは

何者かに、狙撃されたのだ！

ここは遮蔽物のない海。見晴らしもいい。

狙撃手なら、どこからでも俺たちを狙える空間だった。

俺たちは面白いようにやられてくれるジャソカル男たちによって、ここにおびき寄せられたのだ。

迂闊だった。迂闊すぎた。俺たちは油断していた！

俺も――俺だ。

せっかくヒステリアモードだったのに　女性の事ばかり考えて注意力が落ちる、その欠点を突かれた形になってしまった。

だが後悔や反省は後だ。今はとにかく――

――アリア！

浮かんでくる気配すら見せないアリアを、助けないと！

俺は歯ぎしりしながら水上バイクをUターンさせ――

「！」

自分の背後にあった光景に、目を見開いた。

さっきの波止場に、いつの間にか……異様な船が浮かんでいたのだ。

――明らかに、現代の船ではない。

金銀で飾られた船体は細長く、L字に湾曲した船首と船尾は柱のように天を指している。

5mはあろうかという長い櫂をそれぞれ整然と構えるのは、6人のジャッカル男たち。

甲板には立方体の船室があって、飾りの宝石がギラギラと夕陽に輝いている。

その船室の屋上に――

ハダカと見まごうほどに過激な衣装を着た、おかっぱ頭の美人が立っていた。

ツンと高い鼻。恐ろしくプライドの高そうな切れ長の目。金のイヤリングは大きな輪の形をしていて、額にはコブラを象った黄金の冠をつけている。

胸当ては冗談のように細く、その上から黄金の飾りがじゃらじゃらと胸を覆っていた。
腰回りには、細い金の鎖で留めた帯のような絹布を一本垂らしている。
高いヒールのサンダルで踏み出した、その女は――
深紅のマニキュアを塗った長い爪の指で、砂漠迷彩のWA2000狙撃銃を構え、俺の頭部に狙いをつけていた。
――やられた。
拳銃と狙撃銃の戦いは、剣と槍の戦い。
零距離なら小回りのきく拳銃の方が有利だが、距離が離れてしまえば、狙撃銃には手も足も出ない。拳銃弾を飛ばすだけならできても、命中させられないのだ。たとえ、ヒステリアモードの俺にも。拳銃とは、そういう武器なのだ。
――打つ手、無しだ。
水に飛び込んで逃げる時間すら、ないだろう。
ああ。
こんな所で。
こんな形で。
俺は――おしまいなのか。
誰だかも分からない犯罪者にハメられ、パートナーを狙撃され、何もできないまま――

――ビシッ！

突然、超音速の銃弾が女の額に命中した。

一瞬遅れて、遙か後方から――タァン……！　という銃声が耳に届く。

振り返れば、ピラミディオンの開け放ったガラス扉から――安定性を高めるために両脚を広げて伏せたレキが、ドラグノフ狙撃銃の先端を突きだしていた。

レキ。

あの狙撃科の天才児は、狙撃銃の銃声に気づき、即座に窓際に移り、数百m離れた敵を見つけ、伏臥姿勢になって、風を読み、スコープを調整し、狙い――反撃した。

その間、わずか7秒。

全てのステップを、1秒以内にやってのけたことになる。

その即応技術にも驚嘆という他に言葉がないが――

今の射撃は、明らかな武偵法違反だ。

敵を、射殺した。

――武偵法9条。

武偵はたとえ仲間が殺されようと、自分が死のうと、人を殺してはいけないのだ。銃を

持つ者の責務として。

アイツは残弾数が4発と言っていた。ヒステリアモードの頭で記憶の中の銃声を数えてみるが……今のが、最後の銃弾だった事になる。

だから確実に仕留めねばならなかった、というのは分かるが――

と、冷や汗をかきつつ撃たれた女の方を振り向くと……ざ、ざざあ……

女は自分の狙撃銃を埋めるように、その身体を砂に還していくところだった。

あれも、砂人形だったのか！

崩れ去る女が身にまとっていた金・銀・宝石の装飾品が、ばらばらと甲板に落ちていく。

その悪夢のような光景に……頭がどうにかなってしまいそうになる。

だが――

悪夢は、それで終わりじゃなかった。

俺にとってもっと、いや、最も見たくない悪夢が　その船の、船室から出てきたのだ。

夕陽にきらめく宝石の滝をくぐって来たのは……

……兄……

さん……!?

「――――！」

あまりの驚きに、俺は彼の名を呼ぶことすらできずにいる。

俺の、兄さん……！　遠山金一武偵が、異形の船の甲板に立っている！

休眠から覚めたらしい兄さんはまだカナの姿ではなく、男の姿で立っていた。

あれも砂人形、では、ないだろう。

俺には分かる。兄弟だからなんとなく、というだけではない。

あの、殺気。

ひと睨みでどんな犯罪者をも萎縮させる絶大な殺気は……間違いなく、兄さんだ。

兄さんは、休眠直後は自律神経が狂ってしまうため体温の調節ができない。だから真夏なのに漆黒のコートを羽織り、上から下まで薄皮の手袋さえも、全て黒ずくめの服を着ている。異なる色は――首回りをたてがみのように覆う白い毛皮と、少しはだけさせた胸元、あとは顔ぐらいだ。

その死に神のような姿に加えて……その、顔。

絶世の美女に化ける兄さんは、男の姿でも俳優やタレントが裸足で逃げ出すほどの美形なのだ。

その一分の隙もない端正な顔立ちが、逆にえも言われぬ恐怖感を誘う。

「夢を――見た」

兄さんは……低い声、男喋りで、俺に言う。

「長い眠りの中で、『第二の可能性』が実現される夢を……な。だが……」

俺を見下すようなムードでこっちに正対した兄さんは――

「キンジ――残念だ。パトラごときに不覚を取るようでは、『第一の可能性』は無い。夢は、ただの夏の夜の夢でしかなかった」

海風に長髪を揺らし、俺を見据えてきた。

「……兄さんソ！　分からねえよ！　『第一の可能性』って何だ！　パトラって誰だ！　何で、そんな……アリアを撃った奴の船に、乗ってるんだよッ！」

俺が叫ぶと――

「これは『太陽の船』。Eのミイラを、当時海辺にあったピラミッドまで運ぶのに用いた船を模したものだ。それでアリアを迎える……そういう計らいだろう？　――パトラ」

と、兄さんは――海に、語りかけた。

その海から……

ゴボソ……

ゴボボッ……

と、また、我が目を疑うようなものが浮かび上がってきた。

それは……死者をおさめる、柩。

それも、黄金でできた柩だった。

四角形ではなく、人型をしている。歴史の教科書に載っていた。これは古代エジプトで

用いられていた、王族や貴族を収める聖柩だ。
傾いた柩から海水が抜けていくと、そこには――
アリア……！
ぐったりと動かないアリアが、収まっていた。
海面にはもう一つ、その柩にかぶせる黄金の蓋が現れる。
さらに、柩と蓋をそれぞれ片手で持った……さっきアリアを撃った女も、浮上してくる。
一切の浮きを使わず、まるでエレベーターか何かで上がってくるかのように。
「――気安く妾の名を呼ぶでない、トオヤマキンイチ」
さっきの砂人形と同じ金銀財宝でその身を飾った、半裸の女は――
ばん！　と、その頭上でアリアを収めた黄金柩と蓋を合わせてしまう。
そして1トンはありそうなそれを、指一本で軽々と船に投げた。
ずうんッ……！
ジャッカル男たちが全員で柩をキャッチするが、何体かは下敷きになってしまう。
女はそれに目もくれず、妖艶な笑みを浮かべながらこっちに振り返った。
「1・9タンイだったか？　欲しかったものの代償、高くついたのう。小僧」
――コイツだ。
コイツがジャッカル男たちを操っていた、親玉に違いない。

「妾に下賤の事はよう分からんが、下僕どもに任せてみれば　簡単なことぢゃったのう。大方、金か地位に関わるものぢゃろ。タンイとは。それを餌にしてみれば、ほれ。簡単にここまで来よった。妾の力が無限大になるこのピラミッドのそばに、アリアという最高の手土産を持ってな。アリアも不幸よのー。こんな所でその小舟が故障とは。おかげで妾はきっちり、心臓を狙えたわ。ほほっ。しっかり呪っておいた甲斐があったのう」

当たり前のように水面に立つ女は、手の甲を口元にあてて実に可笑しそうに嗤っている。

ほほ。ほほほ。

「――妾が呪った相手は、必ず滅ぶ。イ・ウーの玉座を狙っておった目障りなブラドも、妾が呪っておいたゆえ……このような小娘にあっさりやられたわけぢゃ。くくくっ」

女は思い出し笑いをしながら、兄さんが『太陽の船』と呼んだ細長い船に上がっていく。ハシゴも使わず、見えない階段を上るかのように。

（イ・ウー……！　コイツも、イ・ウーの、味か！）

ヒステリアモードの俺の頭が――今までの事象を一気に繋げていく。

俺の単位がいくら不足していたかは、武偵高の掲示板で公開されていた。その不足分とピッタリ同じ単位を稼げる仕事を、コイツが用意した。

そして俺は何も気づかず――まんまと、おびき出された。

ご丁寧に、イ・ウーから見れば仇敵のアリアを連れて。

この女は砂使いだ。単位不足を知ったあの日、教務科の掲示板には砂が大量に盗まれたという事件が何件も書かれていた。あれも――コイツの仕業だったのだ。

どこかで、気づくべきだった。

何かが、おかしいと……！

「ほ」

甲板に上がった女は、何か気づいたようにキョトンとしてから

「そういえば、1人も殺しておらぬ」

呟いて、くるり。

こっちに片足だけ踏み出した。

「祝いの贄がないのはちと淋しい。お前。ついでぢゃ――死ね」

スッ、と両手を俺に向けてまっすぐ差し出してきた女は……

「妾が直々にミイラにして、柩送りにしてくれよう。ほほほ。名誉ぢゃの。光栄ぢゃの。うれしいのう――」

ニヤニヤ笑いながら、見えないピアノでも弾くかのように指を動かし始めた。

何だ……？

俺の身体が、汗ばんできた。水蒸気のようなものが、手から……顔から、ノド元からも上がっている。これは何だ。

「――パトラ。それはルール違反だ」

兄さんの――声。

と同時に、俺の体から上がる湯気が止まる。

「なんぢゃ……妾を『退学』にしておいて、いまさらるーるなぞを持ち出すか？」

「イ・ウーに戻りたいのなら、守れ」

「……気にいらんのう」

甲板を歩いて真横まで近づいた兄さんに、女は細めた目で向き直る。

それを合図に、ジャソカル男たちが一斉に船をこぐ櫂を兄さんに向けた。

櫂の先端は、長槍のように鋭い。

だが兄さんは、ズラリと向けられた切っ先に動じるそぶりも見せない。

「『アリアに仕掛けても良いが、無用の殺しはするな』――俺が伝えた『教授』の言葉、忘れてはいないだろう」

「……」

言われた女――パトラは、口をへの字に曲げて黙った。

「パトラ。お前がイ・ウーの頂点に立ちたいことは知っている。だが、今はまだ『教授』こそが頂点だ。リーダーの座を継承したいのなら、今はイ・ウーに従う必要がある」

「――いやぢゃ！　妾は殺したいときに殺す！　贅がのうては面白うない！」

パトラはだだっ子のように握った両手を振り、しゃんしゃん！　と金の腕輪を鳴らす。
「それだから『退学』になったのだ。パトラ。まだ学ばないのか」
「わ、妾を侮辱するか！　今のおまえなぞ――ひとひねりに出来るのぢゃぞ！」
パトラはわがままそうな口をつり上げ、台場のカジノ・ピラミディオンを手で示した。
「……そうだな。ピラミソドのそばでお前と戦うのは、賢明とは言えない」
「そうぢゃ！　あの神殿型の建造物がそばにあるかぎり、妾の力は無限大ぢゃ！　だから殺させろ！　そうでないと、お、お前を柩送りにするぞ！　それでもいいと云うか!?」
激高しながらもなぜか仕掛けないパトラに……
兄さんは、すっ――と、詰め寄った。
うまい。流水のように自然な動きで、誰も、何の対応もできない歩き方だ。
そして兄さんは、パトラの顎を右手の人差し指で上げさせると――
「――！」
いきなり、キスした。
パトラは初め抵抗するような手つきで、兄さんの胸を押し返そうとしたが……やめた。
そして、ゆっくりと目を閉じ……全身から力を抜いてしまう。
脱力したパトラの腰を、いつの間にか兄さんは左腕で抱いて支えてあげていた。
「――これで赦せ。あれは、俺の弟だ」

少し絡んで乱れたパトラの前髪を指で直しつつ、兄さんが言う。
その兄さんからは、さっきとはまた異なる――さらに一層手強いムードが漂い出す。
あれは……ＨＳＳ……！　兄さんがそう呼んでいたヒステリアモードだ。俺には分かる。
兄さんは今の動作でパトラを制止すると同時に、ヒステリアモードになったのだ。
初めて見たぞ。兄さんが、異性との接触でなるところを。女性を傷つけるような形でＨＳＳにはならない――というのが、兄さんの不文律だったハズなのに。
一方、パトラは……
遠目にも分かるぐらい真っ赤になって、一歩、兄さんから後ずさった。
「ト、トオヤマ、キンイチ――妾を、使ったな？　好いてもおらぬクセに……！」
――哀しいことを言うな。打算でこんな事ができるほど、俺は器用じゃない」
パトラをまっすぐ見つめた兄さんに――パトラは、きゅっ！　大きな胸を自分で抑えるような仕草をした。
そして落ち着くためか、すー、はー、すー、と大きく深呼吸してから――
「な……なんにせよ、妾はそのお前とは戦いとうない。勝てるは勝てるが、妾も無傷では済まないぢゃろうからな。今は『教授』になる大事な時ぢゃ。手傷は負いとうない」
と言い、ぽい。兄さんに何かを投げ渡しつつ――ざぶん。
逃げるように、海へと飛び込んでしまった。

後部デッキからは、ジャッカル男たちがアリアを収めた黄金柩を担いでパトラを追う。
「！」
水面下に沈む柩を追おうとした俺を――
「――止まれ！」
兄さんが一喝した。
……！
本能とは恐ろしい。こんなに、アリアを助けたいのに……
俺の身体は、兄さんの一声で金縛りのように制止させられてしまった。
――分かる。
あの一喝に逆らえば、脳天に鉛玉をぶちこまれる。
今の兄さんなら、やりかねない。それが本能的に分かる。そういう声だった。
そして――ざざん……ざざん……
洋上には、太陽の船と兄さん、そして……俺だけが、残された。
「――『緋弾のアリア』――か。はかない、夢だったな」
兄さんの、声。

「緋弾の……アリア？」

何だ。

何だ、それは。

分からない……だが。

アリア。

その名をあんたが呼ぶな。

あんな目に遭わせておいて――呼ぶな！

「兄さん……俺を騙したなー　あんた、アリアを殺すのはやめたって言ってただろう！」

叫んだ俺に、兄さんはまたあの見下すような視線を返した。

「俺は――殺していない。ただ看過しただけだ」

「詭弁だろそんなの！　あんたが助けてくれれば……アリアは……！」

「まだだ」

言って、兄さんはさっきパトラから投げ渡されたガラス細工を出した。

それは球状のガラスの中に収められ、止まらないように作られた――小さな、砂時計だ。

「まだ、死んでいない。あれはパトラによる呪弾。今から24時間は、生きている」

「……！」

「パトラはその間に、イ・ウーのリーダーと交渉をするつもりだ。それまではアリアを生

かしておくだろう。だが、それまでだ。パトラの交渉がどう転ぼうと、『第一の可能性』は無い。無いなら――アリアは、死ぬべきだ」

「兄さんは……アリアを見捨てるのか……！　イ・ウーで……無法者の超人どもに、何をされたんだ　あんたは！」

叫んだ俺に、兄さんは静かに――

「無法者、か」

目を、閉じた。

「そう……イ・ウーは真に無法。世界のいかなる法も無意味とし、内部にも一切の法規が無い。つまりメンバーである限り、どこまでも自由なのだ。イ・ウーのメンバーは好きなだけ強くなり、自らの目的を好きな形で実現して構わない。そして――他者がその障壁や材料となるのなら、その者を殺しても、また構わないのだ」

そんな……！

イ・ウーが――誰を殺してもいい、バラバラの目的を持った強者たちの集団、だなんてそんな組織……すぐ内部抗争で潰し合いになるに決まってる。存続できるわけがない。

その思いに答えるように――兄さんは言葉を続けた。

「イ・ウーのリーダー・『教授』が、その無法者たちを束ね続けてきた。彼という絶対的存在がいたからこそ、イ・ウーは存続できた。だが、その時間が――間もなく終わろうと

している」

「終わる……？」

「リーダーが、死ぬのだ。病でも傷でもなく、寿命によってな」

言った兄さんは、再び殺気の籠もった目で俺を見据えた。

ここから先は、覚悟して聞け――

とでも、言うように。

「キンジ。イ・ウーは、ただの超人育成機関ではない。彼らはいかなる軍事国家も手出しできない、超能力を備え、核武装した戦闘集団なのだ。その中には、主戦派――世界への侵略行為を本気で目論む者たちもいる。今のリーダーが死に、主戦派がイ・ウーの主権を握れば……彼らはイ・ウーの力を思うままに操り、世界各地を欲しいままに襲撃し、争乱と殺戮を繰り広げることだろう」

世界への……侵略行為？

バカな……！

そんな事を本気で……企んでるのか。イ・ウーは。

「だが、イ・ウーにはその未来を良しとしない者もいる。『教授』の気質を継ぎ、純粋に己の力を高める事のみを求める者たち――研鑽派と呼ばれる一派だ。彼らは教授の死期を知ってから、イ・ウー存続を目指して次期リーダーを探し始めた。教授と同じ絶対無敵の

存在になり、無法者共を束ねられる者をな。武力、超能力、不死……それらの試行錯誤の果てに白羽の矢が立ったのが――アリア」

……アリア……？

「アリアはイ・ウーの次期リーダー、『教授』に選ばれたのだ」

アリアが……

自分が追ってきた、イ・ウーの……リーダーに、選ばれた……？

な、何を……言ってるんだ。兄さんは。

どういうことなんだ。

なぜなんだ。

「アリアを、イ・ウーへ導く。そのかわり素質がなければ――すなわち弱ければ、殺して別の次期リーダーを捜す。それが研鑽派の合言葉になった」

「そ、そんな方法で攫ったって……アリアが、あんたらの言いなりになるわけない！」

「言いなりになる。『教授』の前ではな。アリアは必ず、『教授』に従う。必ずだ」

深い確信の色を込めて言い切った兄さんに、俺は――何も、言葉を返せない。

再びこっちに向けられた兄さんの目には……深い、悲しみの色があった。

「キンジ――すまなかった。何も教えてやれなくて。俺はイ・ウーを殲滅するために表の世界から消え、ヤツらの眷属となったのだ」

……！

「そこで俺は、奴らを斃す道を模索した。そして、見出した道が――『同士討ち（フォーリング・アウト）』――同士討ち（フォーリング・アウ）。

その武偵用語に、俺は生唾を呑む。

それは……武偵が強大な犯罪組織と戦う時に、その組織を内部分裂させ、敵同士を互いに戦わせて弱体化させる手法である。

しかし、それは最も危険な戦術の一つだ。しくじれば、確実に自分が殺される。

「イ・ウーを内部分裂させる――それには先ず、奴らを束ねるリーダーがいてはならない。故に俺はリーダー不在の状況を造り出せる可能性を探した。そして導き出された可能性は――二つ。『第一の可能性』は、教授の死と同時期にアリアを抹殺し、イ・ウーが新たなリーダーを見つけるまでの空白期間を作ることだ。そして『第二の可能性』とは、今代のリーダー――教授の、暗殺――」

兄さんが、カナが口にしていた『第二の可能性』とは……

イ・ウーを崩壊させる可能性のこと、だったのか。

奴らのリーダーを殺すという、やり方の……

「すなわち『第二の可能性』の向こう側では、イ・ウーの『教授』との戦いが待っている。俺は長い夢の中で、お前達なら、もしやと思い……『第二の可能性』に、もう一度賭けた

つもりだったのだ。だが、どうやら俺はその賭けに負けたようだ」

「……」

「お前達は、未熟すぎた。パトラ如きに不覚を取るようでは、『第二の可能性』は無い。『第二の可能性』が無いのなら、俺は『第一の可能性』の道に戻るまでだ」

『第一の可能性』。

それは――アリアの、抹殺。

リーダーの死と同時に後継者に据えられる予定のアリアを殺して、イ・ウーにリーダー不在の空白期間を作り……その間に、奴らを仲間割れさせる作戦だ。

「兄さん……あんた、武偵のくせに……人を殺して、事を収めるつもりなのかよ……！」

「キンジ。俺は武偵である以前に、遠山家の男だ。遠山一族は、義の一族。悪――それも巨悪を討つ為なら、人の死を看過する事を厭ってはならない。覚えておけ」

話は終わりだ――と言うように、兄さんは俺に背を向けた。

パトラの力が遠ざかっているのか、『太陽の船』が……船首と船尾の辺りから、微細な砂の粒に戻っていく。

海風が、その砂をまるで霧のように流す。

兄さんの姿が、砂のヴェールに隠されて少しずつ見えなくなっていく。

――兄さん！

どこへ行くんだ。
イ・ウーへ行くのか。
そこでアリアを殺すのか。
アリアを……！
「帰れ、キンジ」
こっちに背を向けて言った兄さんに――俺は、歯ぎしりした。
「イ・ウーはお前の手に負える組織ではない」
……そうだろう。そんなことは分かってる。
でも。
そんなことは今、関係ない。
イ・ウーが――どうとか、もう関係ない。
いま俺が考えなきゃいけないのはそこじゃない。
兄さんが、巨悪を討とうとしている。
そのために、アリアが殺されようとしている。
なら、俺は決断しなければいけないんだ。
――2つの道の、どちらかを。
1つは、兄さんに従う道。

イ・ウーという巨悪に挑む『正義の味方』、俺が誰より尊敬する兄さんの戦いを見守り、手出し、しない。たとえアリアが死のうと、遠山家の男として義を守る――正義の道。

もう1つは――アリアを、守る道。

アリアを救うことで悪の組織イ・ウーが存続しようと、救ったアリアがそのリーダーになってしまうことを兄さんが確信していようと、問答無用でパートナーを助ける道。

どうする。

どうするキンジ。

ここが運命の分かれ道。

誰も俺に正しい道を教えてなんかくれない。

それを象徴するかのように、俺の眼前には道が無い。

運命に翻弄される俺を嘲笑うかのように、揺れる海原だけが広がっている。

まだ立ち去らない俺に、砂塵の向こうの兄さんが――背を向けたまま、もう一度、言う。

「帰れキンジ。お前まで死ぬことはない。犠牲は、アリア1人で十分だ」

――アリアー

その言葉に、俺は――弾かれるように、水上バイクのアクセルを引いた。

砂塵となって崩れつつある太陽の船に、フル・スロットルで駆ける。

波飛沫と砂が、顔に、体に、飛び散ってくる。

「――待て！　兄さん！」

ほとんど前後が見えない状態の中――

俺は兄さんからもらったバタフライ・ナイフを片手で開き、大きく振りかぶる。

――がすん！

砂塵で前が見えなかった俺の水上バイクは、『太陽の船』の船体に衝突した。

俺はバイクから投げ出されつつ――ナイフを――

「ふざけんじゃ――ねえ！」

ざくッ！

船体に、力一杯、突き刺した。

投げ出された勢いで水上バイクから離れ、突き立てたナイフを手掛かりに……

溶ける角砂糖のように崩れ、沈み始めた『太陽の船』の甲板まで、よじ登る。

砂煙の中で、数メートル離れた所に立つ兄さんが振り向いた。

その眼光が――

怒っている。

その眼はまるで、鬼か、龍の眼。もう人間のレベルを超越した殺気を放っている。

兄さんは本気で、本当に、怒っているのだ。俺に対して。

今までで兄さんが俺に怒ったのは、俺が自分の身を危険に曝しかけた時だけだった。

――今の、ように。

だが、だが。

負けるものか。

もう俺は渡ってしまった。越えてしまった。

この道無き海の道を。一寸先すら見えない、砂塵の壁を。

「兄さん――あんた、分かってるんだろ！」

俺はナイフを収めつつ、負けじと兄さんを睨み付ける。

「何だかんだ言ったって、自分が間違ってる事――分かってるんだろ！　兄さんは自分をごまかしてる！　弱い自分を、ごまかしてるんだ！　『義』が本当にあるんなら、正義を謳うなら、誰も殺すな！　誰も死なせず、誰もを助けるべきだろ！　それが武偵だ！」

「――キンジ。それは俺も百万回考え、百万回悩んだ事なのだ。義という物が本当にそうであれば、どれだけいいか。だが――義の本質とは、悪の殲滅。力無き民、無辜の世界を護るためには犠牲が伴われる事もある。いや、伴われる事の方が多いのだ。お前も、もうそれを理解すべき時期だ」

「そんな方法で世界が守られてて……いいわけないだろ！」

俺が、やっていることは。

兄さんに逆らうのは、それは――アリアを助けるため、なのだろう。

自分でも、どうしてなのかは分からない。
だが、それでも俺はこの道を選んだ。それだけは事実だ。
攫われたアリアを救うためには、この兄さんを、あのパトラを、倒さなければならない。
そして、その向こうでは……イ・ウーの全員を相手にしなければならないかもしれない。
そいつら全員が畏怖するイ・ウーの『教授』をも、倒さなければならないかもしれない。
それは月眩がするほど遠く、険しい道だ。
だが……
それがなんだ。
アリアは昔からずっと、それをやってきたんだ。
たった1人で、独唱曲と呼ばれながら、ひとりぼっちでイ・ウーと戦ってきたんだ！
「キンジ。お前は――たった1人の兄に、逆らうつもりか」
「もう、あんたなんか兄さんじゃない……！」
「……」
「昔の俺が憧れていた――どこまでも正しい人間だった俺の兄さんは、あの冬、この海に沈没したアンベリール号で死んだんだ。今のあんたは、優しかった俺の兄さんじゃない。正義だの可能性だのなんか、もう関係ない――俺は――」
俺は、腰のホルスターを開け、ベレッタを抜いた。

もう、何もかもを断ち切るかのように。
「兄さん……いや、元・武偵庁特命武偵、遠山金一！　俺は、あんたを――殺人未遂罪の容疑で、逮捕する！」
銃口をその胸に向けられた兄さんは、静かに目を閉じた。
「――いいだろう。俺もまだ一つ、確かめていないものがある。お前のＨＳＳ……」
ＨＳＳ。俺の、ヒステリアモード――
「それは、アリアでなったものだな」
「それが何だってんだ……！」
「――見せてみろ」
ふうと兄さんは、吹き流れる砂の中で僅かに爪先を動かした。
「この船が沈むまで――残り、15秒といったところか。その15秒で、俺はもう一度だけ、お前を試す。お前の想いが本物かどうか、確かめる。今一度、その眼をしたお前と、あの『緋弾』との絆に賭ける――」
兄さんは銃を抜かない。
何の構えも取らない。
いや――違う。
構えた、のだ。いま、僅かに爪先を動かして。

俺に対して。
銃を見せない、あの無形の構えは――『不可視の銃弾』！

――パァン！

兄さんの正面で、カメラのフラッシュのような光が一閃した。
ばすっ！
「――！」
見えない銃撃が俺の防弾服、胸の中央に命中する。
全身の血が暴れ、呼吸が止まり、意識が失われそうになる。
だが――
「なぜ避けなかった」
兄さんの声が、衝撃で半分ぐらいしか聞こえなくなった耳に届く。
「わざと……喰らったんだ。それぐらい分かれ」
なんとか踏みとどまった俺は、精一杯の強がりとして口元を笑わせて見せた。
その口の端から、鉄の味がする血反吐が一筋垂れる。
「……視えたぞ、『不可視の銃弾』――！」

俺が言うと兄さんは、僅かにその眼を見開いた。
本当のことを言うと、俺には元々ある程度の予想ができていた。
そして今それを、ヒステリアモードの洞察力で確認したのだ。
「兄さん。昔、ジョン・ウェインの西部劇映画で一緒に見たような、その技の原形を――」
アリアは……
強襲科で、兄さんの銃をコルト・ピースメーカーだと言っていた。
それは――名銃であることは確かだが、19世紀前半に開発された、博物館にも置いてあるような銃だ。現代の武偵が使う銃じゃない。
だが、兄さんは敢えてその回転弾倉の古式銃を使った。
それはなぜか？
頭の片隅で、俺はその理由をずっと考えていた。
そして思い当たったのだ。
コルト・ピースメーカーは――拳銃史上でも一、二を争う、早撃ちに適した銃だと。
装弾数、連射能力、命中率。ほとんどの面では近代的な自動式拳銃の方が有利だ。だが早撃ちという曲芸に限って言えば、構造上、回転弾倉式の拳銃の方が有利なのだ。
その銃を使い、人間のレベルを遙かに凌駕したヒステリアモードの反射神経で――
文字通り、目にも留まらぬ速度で発砲する。

それが『不可視の銃弾（インヴィンシブレ）』の、からくりだ。

「……さすが、俺の弟だな」

兄さんが、噛（か）みしめるように言う。

「誰（だれ）にも見抜けなかったこの技を、よく見抜いた。それは認めてやろう。俺が離れた事は正解だった。お前もまた、アリアを触媒（しょくばい）に目覚めようとしている」

言いながら兄さんは、爪先（つまさき）をもう一度動かして――構えた。

――もう一弾、来るぞ――！

「だが、見抜いたから何だというのだ。いいかキンジ。お前の戦闘技術は全（すべ）て、俺がお前に教えた物。そしてその技術の中に、この『不可視の銃弾』を防ぐ術（すべ）は無い」

キンジ。ここで退（ひ）くな。

ここまで来たんだ。考えろ。

無いなら、作るんだ。

アリアと共に戦った、俺たちだけの、新しい戦いから作り出せ。

――今、ここで！

「キンジ。お前はこれを、躱（かわ）すこともできない。いかにＨＳＳのお前とはいえ、放たれるまで１／36秒しかないこの銃弾を人間（ひと）が躱すことはできないのだ。これは絶対だ。たとえ俺でも、躱せない」

ヒステリアモードの、頭の中で――

アリアと共に戦った、いくつもの戦いの記憶が超高速でリプレイされる。

そしてその中から、2つの戦いがフラッシュバックした。

1つは、アリアと一番最初に戦ったセグウェイ戦。

もう1つは、最近戦ったブラド戦――

――！

「――浅はかな」

無形の構え――

兄さんと同じ構えを取った俺に、兄さんは小さく溜息をついた。

「見様見真似で同じ技を使うつもりか、キンジ。お前の銃は自動式。『不可視の銃弾』は放つには不適切だ」

この瞬間、俺は確信した。

――俺は今、兄さんを超えた。

勝てる。

勝てるぞ。この戦い。

砂の船は崩れるスピードを速め、海風も強まっていく。
流れる砂の勢いが、一層、強くなる。
――いいぞ。ツイてる。
もっと強く吹け。もっと吹き荒れろ。
そうなればなるほど、俺が有利になるんだ……！
眠れキンジ。兄より優れた弟など、いない――」
来るぞ――『不可視の銃弾』が！
その瞬間、ヒステリアモードの俺の目に、全てがスローモーションで視え始めた。
兄さんの腕が、動くのが――
腕自体はそれでも見えない。でも。見える。見えるぞ！
兄さんの腕に払われた、宙を舞う砂の軌跡が！
俺は兄さんと全く同じ動きで、ベレッタを振るう。
まるで、鏡の中の自分に――どこかで道を違えた、自分自身を倒そうとするように。
ベレッタのセレクターは、装備科の平賀文が改造した、不具合のある3連射。
トリガー1引きで弾が2発、ほぼ同時に出るモードだ――！

――パァン!!
――ガウンッ!!

刹那の銃声は、2つ。
ほとんど同時だが、俺の方が一瞬遅い。
再び、俺の胸の中心・中央を狙って飛んできた兄さんの銃弾は――

――ギインンンンッ!

ブラド戦でやった『銃弾撃ち』の改良版で、俺の銃弾に真っ正面から跳ね返され――
始業式の朝、セグウェイに搭載されたUZIを破壊したように――
兄さんが今撃った、ピースメーカーの銃口へと飛び込んでいく。
そう、言うなれば、『鏡撃ち』。
相手の銃弾を相手の銃口へと跳ね返す、攻防一体の新技だ。

「!」

――ガウンッ!

直後に放たれた俺の2発目が、こっちの銃口スレスレで――まっすぐ戻ってきた、俺の1発目の銃弾を更に弾いた。これは『銃弾撃ち』で、斜めに。

拳銃を用いたコンマ1秒の剣劇は……

バガンッ！　コルト・ピースメーカーの銃口に戻った兄さんの銃弾が、それを破壊し。

俺の銃弾は、シュッ――！　という袖を掠める音を上げて、背後の砂嵐に消えた。

破壊された拳銃を落とした兄さんが、その端正な顔を歪めた時

ほとんど崩れていた『太陽の船』が、とうとう水没した。

砂の足元は即座に崩れ去り、俺と兄さんは2人とも、

海に、墜ちる――

――兄さん。

ごめんな。

俺の方こそ、心のどこかでは分かってるんだ。

兄さんはきっと、間違ってない。

あんたはキレイ事じゃ片付かない、この世の辛い真実を認め、葛藤しながらも戦ってるんだろう。

でも、俺も――

俺の気持ちにも、ウソはないんだ。
なんでなのかは分からない。でも、アイツのためになら。
アイツのためになら、あんたと道を違えてもいい気がするんだ。
――兄さん。
俺は、兄さんと別れて……今度こそ本当に、少年時代の憧れを、目標を、失って。
俺は、これから、どうすればいいんだろうな――

5弾　砂金の楼閣（アプンンベル）

――兄さん。

そう呟いて、俺は目を覚ました。

ここは……どこだ？　俺は……ベッドに横になっていて……この部屋は……見たことがある。武藤とゲームをやりに来たことがある……車輌科の、休憩室……

「――キンちゃん？」

白雪の、声。

半身を起こすと、傍らにはパイプ椅子にかけてリンゴをウサギさん型に剥いている巫女装束の白雪がいた。

「……白雪……？」

「キンちゃんキンちゃんー　桟橋に倒れてるのを見た時は、本当に心配したんだよー！　目が覚めて……ほんとに、良かったぁ……ふぇ、ふえぇ……！」

俺はあの砂嵐の中で、海に転落したハズなのだが……

誰かが……兄さんが、助けてくれたのか。

言葉を失う俺に、半べその白雪が「キンちゃんー　まずは栄養を取ろう！　食べて！

食べて食べて！」と俺の口にリンゴのウサギをぐいぐい詰めてきた。う、うっぷぇ！

ウサギの団体客で窒息しかけた俺は――明るい窓の外を見て、ハッ、と我に返る。

壁の時計は、7時を示している。それも、朝の。

アリアが撃たれたのは昨日の午後6時。兄さんの話が本当なら、アリアの命は、あと11時間しかないのだ。

急がないと……！

だが、どこへ行けばいい。

どうすればいい。

何もかも分からない――それなら、まずはそれを知るために動かなければ。

まだ残る『不可視の銃弾』のダメージに胸を押さえながらもベッドから降りた俺は……自分が車輌科のマークの入った真新しいシャツとズボンを着ていることに気づいた。

その辺りのことを白雪に聞くと、白雪はアリアが狙撃された時、それをスコープで見ていたレキと急いで武偵高に応援を要請したのだという。洋上の砂嵐が収まったのと同時に、現場には車輌科の機動車が駆けつけ――桟橋で倒れていた俺を救出した、という事らしい。

さらに、諜報科のダイバーがあの近辺に潜水してアリアを探したが……

結局、アリアは見つからなかったそうだ。

「アリアは……攫われたんだ。でも……ああッ、どこへだ！」

俺は苛立ちに任せて、壁を殴る。
「……海」
俺に肩を貸すように寄り添った白雪が、呟いた。
「――海？」
「占ったの。アリアがどこにいるのか――」
「東経43度19分、北緯155度03分。太平洋、ウルップ島沖の公海。理子がアリアにこっそりつけたGPSも同じこと言ってるよ。キーくん」
と言う声に振り向くと――
ドアのそばに、ポケットPCを振ってみせる理子が立っていた。
メンソレータームの缶に描かれてるみたいなヒラヒラしたナース服を着て、右目には……ハート型の眼帯をしているな。
「――日が覚めたか。遠山。良かった」
さらに扉からは、セーラー服姿で松葉杖をついたままのジャンヌが出てくる。
「2人から聞いたよ。アリアは、イ・ウーのパトラって超能力者に攫われたんだよね」
深刻な声の白雪にうなずきながら、俺は問いかけるように理子とジャンヌと理子は顔を見合わせてから――
「……カナから、私達に電話があったのだ。ついて来い、遠山」

片脚が治りきっていないジャンスに合わせてゆっくり歩きつつ、俺達はオイルの匂いのする車輛科を階下へと降りていく。

「イ・ウーでのカナは、私と理子の上役だったのだ。私達はカナを敬愛している。だからどんな協力でもする、と伝えたが……カナは3つの事しか喋らなかった。アリアがパトラに攫われたこと。お前にイ・ウーの話をしたことと、その内容　そして、私も俄には信じ難かったが……お前に、自分が敗れたこと」

兄さん……

「私と理子は、まだイ・ウーから明確に脱離・敵対したわけではない。だからあまり軽率な話はしたくないのだが……もうお前も随分イ・ウーについては知ってしまったようだし、時間も無い。アリアを攫った魔女――パトラの呪いについては、教えておく」

「呪い……？」

「これも、そうだよ」

ジャンスの横から、自分の眼帯を指しつつ理子が言う。

「理子は今、右目が見えない。パトラの呪蟲に呪いをかけられ、眼疾を患ったのだ。完治まで1週間はかかるだろう。私のこの脚も、今にして思えば呪蟲のせいだった。気づくのが――遅かった」

「スカラベ……」

聞き覚えのあるその単語に、俺は眉を寄せる。

「スカラベっていうのは、この間キンちゃんに描いて見せた虫。あれはパトラの使い魔。直接呪うよりは弱くなるけど……パトラの魔力を運んで、接触した敵に不幸を呼ぶの」

白雪の説明に――俺は、舌打ちする。

七夕祭りの夜、神社の裏でアリアの浴衣の中に入ったのも、あの虫だった。

その虫の呪いで、アリアは不幸にも水上バイクをエンストさせてしまい……

パトラに、絶好の狙撃のチャンスを与えてしまったのか。

（スカラベってのは、たしか……古代エジプトで神の使いとか言われてた虫で……）

もうヒステリアモードではない俺は、それでも世界史で習った乏しい知識を総動員する。

そういえば、俺達を襲ったジャッカル男も――古代エジプトの壁画に、似たような絵が描かれていた。たしか『アヌビス』とかいう神の一種。

パトラは、その形を模してあの砂人間どもを作ったに違いない。

「ジャンヌ。パトラって奴は――」

「名前からも察しがつくだろう。パトラは、クレオパトラの子孫だ。古代エジプト思想にかぶれた本人は、自分がクレオパトラ7世の『生まれ変わり』だと称しているがな」

――クレオパトラ。

古代エジプト・プトレマイオス王朝を、その美貌と知略でローマの侵略から守ろうと戦った女王。

……怪盗リュパン、騎士ジャンヌ・ダルク、ドラキュラ・ブラド伯爵ときて、とうとう今度は王族・クレオパトラ様のお出ましってわけか。もう驚かねえよ。何でもきやがれ。

「パトラは――イ・ウーの厄介者なのだ」

エレベーターに乗って地下2階のボタンを押しつつ、ジャンヌが眉を寄せる。

俺、白雪、理子もエレベーターに入る。地下2階は確か、車輌科のドックだ。

「……厄介者？　あいつはイ・ウーの一味じゃないのか」

「元々はそうだったんだよ。ブラドよりも上の、ナンバー2に位置してた。でもあまりに素行が乱暴すぎて、退学になったの」

自分も退学になったと言っていた理子が、教えてくれる。

「パトラには誇大妄想のケがあるんだよ。自分は生まれながらの覇王だって思い込んでる。『教授』が死んだら自分がイ・ウーのリーダーになって、自分の王国を作るための戦争を起こすつもりなんだよ。まずはエジプトを支配して、いずれは世界を征服しようとしてる。本気で」

「お、おい……！　世界征服って。そんな、占いマンガみたいな悪党が――」

「いるんだよ、イ・ウーには。パトラの他にも何人か。それすら可能に思わせる場所なの。

イ・ウーって所は……」

「遠山。私と理子は、パトラをイ・ウーのリーダーに据えたくはないのだ」

「でも、なっちゃうかもしれない。このまま『教授』とアリアが死んだら」

ジャンヌと理子が言い――

エレベーターは、車輛科のドックで停止した。

エレベーターホールには、伏せて休む銀狼と、ベンチに体育座りしているレキがいた。

俺たちの姿を見たレキは、何やら大きなアタッシュケースを持って立ち上がる。

「キンジさん。キンジさんは、アリアさんを救出しに行くのですね」

問われて、俺は――

ジャンヌ、理子、白雪を見回した。

彼女たちも今一度、それを確認しておきたかったらしい。

なんとなく分かる。皆、俺がアリアを助けに行くと思っているのだ。だから、どこかへ案内しようとしている。

俺は……レキの問いにうなずいた。

「仲間がやられて、黙ってられるかよ」

それに……アリアがやられたのは、俺が油断してたせいでもあるからな。

「では、これを」

レキが示したアタッシュケースには――

強襲科時代に俺が使っていたB装備と、ベレッタ・キンジモデル……そして兄さんからもらったバタフライナイフが、きちんと磨かれて収められていた。

ありがたい。これで武偵1人分の働きは十分できそうだぞ。

それがあの砂礫の魔女・パトラに、どれだけ通じるかは分からないがな。

「これも、キンジさんの上着のポケットに入っていました」

と、レキが渡してきたのは――兄さんがパトラに渡されていた、小さな砂時計だった。

元々は砂時計の位置を固定するピンか何かがついていたらしいが、それは外されており、今は常に砂が上から下へ落ちるようになっている。砂は球状のガラスの中で……もう半分以上、落ちてしまっていた。

おそらくこれが、アリアの死までの時間を表しているのだろう。

兄さんは俺に、これを託したのだ。

自分を倒した、俺に。

――やってみろ。

そういう、意味なのか。兄さん。

「お前は行かないのか、レキ」

B装備の防弾ベスト、フィンガーレスグローブ、予備弾倉を身につけながら聞くと――
レキは、ふるふる。首を左右に振った。
「行けるのは2人。あなたと、誰か1人です。脚を負傷しているジャンヌさんは当然……理子さんも片目では距離感がつかめず、うまく戦えないでしょう。相手が超能力者であることを考慮しても、白雪さんが適任です。ご自分でも出撃を希望されてますし」
どうやら……俺が倒れていた間に、アリア救出要員の相談は済ませていたらしいな。
だが――
「『行けるのは2人』ってのは……どういうことだ？」
尋ねるが、レキは人形のように突っ立ったまま答えない。
「すぐに分かる。遠山。こっちだ。装備が終わったら来い」
応着替え中の俺を見ないつもりなのか、次の扉の前でこっちに背を向けたジャンヌが腕時計を見つつ答えた。
「キーくん。これ」
と理子が出してきたのは――アリア用の防弾制服、それも真新しい夏服だ。
救出に絶対成功しろ。そして、武偵高に連れ戻せという意味だろう。
服にうるさい理子らしい気づかいだな。
「アリアは、理子のエモノなんだから」

俺の背、防弾ベストのキャリー部分にそれを収めた理子は……

「――死なせちゃ、がおーだぞっ」

ぴき。と、頭に指でツノを作ってみせるのだった。

初めて来た車輌科のドックは、海水のニオイがした。

それもそのはず、ここは海から水を引いて小型船舶の整備ができるようになっている。

モーターボートや水上バイクが居並ぶブリッジをどんどん進んでいくと……

「キンジー！」

第7ブリッジと書かれた所で、油まみれの武藤が顔を上げた。

その武藤が整備していた乗り物は――なんだ……これは？

白と黒で着色された、ロケノトを横倒しにしたようなものが艀の脇に浮いているな。

「これは『オルクス』。私が武偵高への潜入用に使った潜航艇だ。元は3人乗りだったが、今回の改造で部品が増えて2人乗りになった。武藤、何ノットまで出せそうだ？」

ジャンヌに聞かれた武藤は、太い眉を寄せて計算するような顔をする。

「まぁ……170ノットってとこだな」

「すばらしい。たった一晩でそこまでできるなんて――お前は天才だ、武藤」

「それは認めるがよ。オレ以上の天才だぞ、これを造った奴は。これ、元は海水気化魚雷

だったんじゃねえのか？」

「スーパー……なんだって？」

「高速魚雷が蒸発させた海水の気泡を自分の周囲に張って、水の抗力をだな――」

横から尋ねた俺に何やらオタク的な説明を始めた武藤を、ジャンヌが片手で制した。

「詳しい説明をしている時間は無い。要するに超スピードを出す魚雷から炸薬を降ろし、人間が乗れるようにしたものなのだ、オルクスとは」

「……だがよ、２０００kmも走らせるつってたな。燃料は積めるだけ積んだが、それなら片道だぜ。何か調達してあとで迎えに行くけどな、自力では帰ってこれねえぞ」

と――俺の方を見た武藤は……

どうやらある程度、この事件の裏事情を知っているような目をしていた。

「聞いたのか、武藤。俺たちの……その……」

「聞きゃあしねえよ。好奇心ネコを殺す。武偵が書いた本に載ってたんだろ」

アドシアードのモギリを一緒にやったとき俺が言ったセリフを引用しつつ、武藤は巫女装束の白雪をチラッと見た。

「お前はほんと、何に対しても鈍感なヤツだよ。俺たちが何も知らないとでも思ったか。目を見りゃ分かんだよ。ここ数ヶ月のお前が、危ねぇ橋を渡ってたって事ぐらいはよ」

バカにすんな、という顔で俺に言ってきた武藤の後ろ……潜航艇のハッチから、

「みんな薄々分かってたよ。武偵だもん。でも――」

武藤の手伝いをしていたらしい不知火が、出てきた。

「――危ない橋の1つや2つ、みんな渡ってるからね。この学校の生徒は。それに、武偵憲章4条――武偵は自立せよ。要請なき手出しは無用の事。だよね？　だから……陰から心配してたんだよ。やっと手伝える時が来て、正直、ちょっと嬉しい」

ニコッ。

いつもの柔和な笑顔で俺のそばに立つ不知火と、激励するように背中を叩いてきた武藤に、俺は……何も、言葉を返せない。

武藤。不知火。お前たち……

俺、お前らに最近、あのメールのことで冷たくあたってたのに……

何も聞かず、手を貸してくれたんだな。

「……ありがとう」

俺は、それだけ、言った。

本当に嬉しい時には、それだけしか出てこないものなんだな。

白雪と手を貸し合ってオルクスに乗り込むと、中は……すごいな……これは。

ヘルメットがかぶれないほど狭い船内には、全てデジタル表示の速度計や潜航深度計、

三次元方位計（3Dナンバス）、超音波探信儀（ディスプレイ）、燃料計などが所狭しと並んでいる。

俺は窮屈な副座に収まり――既に操縦法を教わっていたらしい白雪は、上部ハッチから髪を垂らして内部を覗くジャンヌと計器類の最終確認をしている。

「ではハッチを閉めるぞ。武運を祈る。それと――これを持って行け」

言ってジャンヌは、自分の松葉杖を左右2枚に開き……中に収められていた、抜き身の洋剣を取り出した。宝石飾りのついた柄の方を向けて白雪に差し出されたそれは、かつてジャンヌの呼び名でもあった銘剣……デュランダルだ。

「えっ……」

渡された剣と、ジャンヌの顔を――白雪は、何度か往復するように見た。

かつて白雪に斬られた剣身は短く詰まっているが、日本刀ぐらいの長さになったそれは却って白雪にとって扱いやすそうだ。

「ジャンヌ……いいの？　船ももらっちゃったのに……この剣も、あなたの大事な……」

「パトラは私の敵でもある。敵の敵は、味方というからな」

「……ありがとうジャンヌ。本当は、いい人だったんだね」

まっすぐお礼を言った優等生の白雪に、

「な……っ……わ、私は魔女だっ。本当は怖いんだぞ。あ……ぶ、武運を祈る」

照れたらしいジャンヌは、頬を赤くして逃げるようにハッチから離れていった。

しばらくするとハッチは音もなく、自動で閉まっていき――
全てのデジタル計器が、つ、つ順番に、そして1秒もかけず……俺たちを取り囲むように、色とりどりの光を強く放ち始めた。
時刻表示は日本時間で、0715A.M.……午前7時15分。
アリアの死、そのタイムリミットまで――残り、10時間45分だ。

オルクスは武偵高第7ドックから、本物の魚雷みたいに出航した。
潜水艇に乗るのはさすがに初めてだったが、このオルクスが優れた乗り物であることはすぐに分かった。初め時速90キロほどを表示していた速度が――段階的にロケット燃料を使いながらぐんぐんと上がっていく。そして数時間後には時速300キロという、ウソかホントか分からないような超高速で水中を突き進んでいた。それも、ほぼ無音で。
応白雪が戦闘機みたいな操縦桿を時たま触ってはいるが、操舵はほとんど自動化されているようだ。凄いな。イ・ウーの科学力は。
「キンちゃん。ジャンヌに聞いたんだけどね、パトラのGは推定25――世界最強の魔女の1人らしいの」
黄緑色の片眼鏡みたいなHMD（ヘッドマウントディスプレイ）をつけたままの白雪が、後部座席の俺に振り返る。
「しかもピラミッド型の建物がそばにあると、無尽蔵に魔力を使えるんだよ。パトラは、

ピラミッドを『無限魔力』の立体魔法陣として使ってる。『無限魔力』は日本でも大昔に古墳とかを造って研究されてたんだけど、あまりにも強力すぎたから禁じられちゃった術なの」

「……そういえば、パトラも似たような事を言ってたな。ピラミッドさえあれば、自分は無限の力を使えるとかって」

「うん。喩えて言えば……私やジャンヌは普通の鉄砲で、パトラは砲弾の尽きない戦車。そういう存在なの。あの魔女は――」

砲弾の尽きない、戦車――

「そんなヤツから取り戻せるのかよ……アリアを」

つい気弱な事を呟いた俺から、白雪は顔を逸らすように前を向いた。

「キンちゃんは……アリアが心配なんだね」

「……」

「いいの。なんとなく分かるよ。アリアはキンちゃんにとって、すごく意味の深い子……だから、私も守りたい。それにアリアと、こんな形で決着したくないし……」

「……決着？」

「あ、う、えっと、それにパトラは、使い魔を星伽にも侵入させてた。イロカネアヤメを盗んだのも、たぶんあの女なの。パトラは星伽の敵でもあるの」

ごまかすように早口に言いつつ、白雪は少し赤くなった。
俺たちはその後、船内にあったホワイトチョコみたいな栄養食と飲料水で空腹を満たしながら――太平洋を北東へと進んでいった。船舶用の衛星測位システム（GPS）と思われるディスプレイの中で、俺たちとアリアを示す座標の距離が刻一刻と縮まっていく。
おそらく、あの砂礫（されき）の魔女――パトラも、そこにいるのだ。

10時間後――タイムリミットまで、残り1時間を切ったころ――
アリアがいるハズの海域に着いた俺たちが速度を落とし、超音波探信儀（ソナー）で周囲を探ると……周囲に、巨大な物体の反応が無数にあった。
こんな無人の海域に、一体何が？　と不審に思ってデジタル潜望鏡を使うと、あちこちの海面から噴水みたいな水柱が上がっているのがディスプレイに表示された。しばらく観察していると、水中から盛大にジャンプ（チンク）するシロナガスクジラの群れが見えて驚く。水柱はクジラの潮吹（ナロ）きだったらしい。
クジラたちの間をかき分けて進むと……その、潮吹きが作り出した霧の向こうから――
なんということだ。
あれは――！
「……ア……アンベリール号……！」

洋上にその船が見えてきて、俺はそれっきり言葉を失う。
何度も写真を見たから、見間違える事はない。
あれは――豪華客船・アンベリール号。
去年の12月……浦賀沖で沈没し、兄さんが失踪したその客船が……サルベージされて、幽霊船のように浮いていたのだ。この太平洋上に。
かなり改装されている。喫水線は沈みそうな程に低く、タンカーのようにも見えるその甲板には――舌打ちしたくなることに、巨大なピラミッドが増設されていた。
あれはパトラが造った、『無限魔力』の魔法陣に違いない。
しかし、あのピラミッドを破壊するには爆撃機か何かが必要だろう。当然そんなものは持ち合わせていない。あるのは、ちっぽけな拳銃と剣だけだ。
それだけの武器で、どうやって抗えばいいんだ。
あの聳え立つような、大ピラミッドに……！
「キンちゃん……分かる。私、分かるよ。あの中に感じる。アリアと、パトラを――」
ぱっつん前髪の下の目を見開いた白雪が、ピラミッドの頂点を見て眉を吊り上げる。
ピラミッドはその天辺だけがガラス製で、その中を陽光にキラキラと輝かせている。
浮上して近づくと、アンベリール号はその前方に砂でできた陸のような部分を増設していた。もう、船とはいえない形状だな。

慎重に進んでいき……漂着するように、ほとんど燃料の切れた潜航艇で接舷する。
上陸したその砂浜には、10メートルはあろうかというパトラの座像が左右に2体ずつ、4体そびえていた。
「これ……かなりアレンジされてるけど、古代エジプトのアブシンベル神殿を模してるよ。すごい……全部、魔力で造ってる。クジラ達も魔力で呼び寄せてるみたい。魚雷か何かで攻撃された時の盾にしようとしてるんだよ、きっと」
白雪の言葉に、俺は眉を寄せた。
魔力、魔力。全部、魔力か。
無限魔力のパトラ。
どうやら今までで一番厄介な敵になりそうだな。
俺は白雪と2人でパトラ像の足の間を進み、ピラミッドへの入口らしきトンネルに侵入していく。
防弾ベストのポーチから砂時計を出すと、もう、砂がほとんど落ちてしまっている。
腕時計で確認した、アリアの命――その残り時間は、僅か24分――！
トンネルの奥にあった砂岩の階段は広く曲がりくねっていた。昔の映画みたいに上からでかい石の玉とかが転がってきたりしないかと心配したが、その様子はない。

それどころか、分かれ道だらけの迷路みたいな通路には上に向かう正しい階段が篝火で示されていた。どうやら、パトラは招き入れるつもりらしいな。俺たちを。

そうやってだいぶピラミッドを上り詰めた辺りで……

巨大な扉が、俺たちの前に現れた　鳥や蛇で描いた象形文字をS研で習っていた白雪が読んだところによると、どうやら『王の間』と書かれているらしい。

「キンちゃん。ここだよ。ここにパトラがいる。アリアも……！」

人間レーダーの白雪は、そう言いながら——初っぱなから、頭にかけていた白いリボンを解いた。

ジャンヌ戦の時に見た。それは白雪が普段その強すぎる魔力を抑えるためにつけている封じ布だ。

扉は、触れてもいないのに、ぎぎ、ぎぎぎぎ……と、重い音を立てて開いていき……『王の間』の内部が、明らかになる。

そこは——何もかもが、黄金でできた広間だった。

豪華な絨毯が敷かれた床石も、室内を取り囲む石柱も、奥に据えられた巨大なスフィンクス像も、全てが眩いばかりの黄金でできている。

どうりで下から見たとき、光り輝いて見えたわけだ。

まず素早く視認すると――

――あった。アリアを収めた、あの黄金柩が。スフィンクスの手元というか足元に。

「……なにゆえ、聖なる『王の間』に入れてやったか分かるか？　極東の愚民どもー」

宝石をちりばめた、これも黄金の玉座に座っていたパトラは――

玉座の手すりに置いたでかい水晶玉を持ち上げ、くるる、と指の上で回してみせた。

相変わらず肌もあらわな金細工つきのビキニを着て、白く長い脚を組んでいる。

「けちをつけられたくないのぢゃ。妾は、イ・ウーの連中に妬まれておるでの。ブラドを呪い倒したにもかかわらず、奴らは妾の力を認めなんだ。ブラドはこのアリアが、仲間と共に倒したものだ――などと云いおる。群れるなど、弱い生き物の習性ぢゃというのにの。ともあれ、そのアリアを仲間ごと倒してやれば……奴らの溜飲も下がろう」

ぽい、とパトラが投げた水晶玉が――

がちゃん。

アリアの黄金柩にぶつかって、割れた。

「イ・ウーの次の王はアリアではない。妾ぢゃ！　『教授』も、妾がアリアの一味を斃し、アリアの命を握って話せば――王位を譲るに違いないぢゃろ」

立ち上がったパトラは、玉座の前方にある黄金の階段を降りて、カツンッ。

ハイヒールのサンダルを慣らし、仁王立ちする。

「妾は、常に先を見て動く。今回も、イ・ウーの女王となった後の事を考えて動いておる。妾はのう――」

じろり。

濃いめのアイシャドーで飾った目が、品定めでもするように白雪を見た。

「――男は、キライぢゃ。ヘンな気分になる。女王になったら、側近は美女で固めたい。ぢゃから、後で使う予定の女は殺さずに呪い封じておいたのぢゃ。戦えば相性の悪そうな銀氷の魔女をまず呪い、リュパンの曾孫も呪ったが、殺しはせん」

爪先からつむじまでをコブラのように這ったパトラの視線に、白雪が少し眉を寄せる。

「日本の魔女。お前も容姿が優れておるでの。力次第では、妾の戦士に取り立ててやってもよい。トオヤマキンイチ　あの男も、妾に仕えさせたら一生カナのままにしておく。あやつにこの間、ヘンな事をされてから――夜も眠れのうなったでの。トオヤマキンジ、お前もキライぢゃ。お前は、トオヤマキンイチに面影が似ておる」

しょうがないだろ。兄弟なんだから。

そう心でツッコんだ俺に――パトラは、心の底から憎々しげな視線を放ってきた。

兄さんに対するねじくれた感情、その憎悪の部分が俺に向けられているようだな。

「ぢゃから、トオヤマキンジ。お前は今、殺す」

こっちを指したパトラの言葉に、弾かれたように。

「キンちゃん、私は――5分しかもたない！　その間にアリアを救出してッ！」
叫んだ白雪が、ばっ！
鳥が羽ばたくような仕草で、両手の白小袖を思いっきり振るった。
「緋火星鶴幕！」
その袖の中から――無数の、折り紙の鶴が飛び出す。
折り鶴たちは石つぶてのようにパトラめがけて飛びかかり――
空中で、燃えさかる火の鳥に化けた。
「――！」
だだだだだんっ！
火の鳥たちは一斉にパトラに体当たりして、爆発していく。
炎の渦が巻き起こり、パトラの姿が見えなくなるほどの煙が上がる。
「……！」
ばあああっ――と、火煙に巻き上がったのは――大量の、砂金。
気づけば今の一瞬で、『王の間』の床石に使われていた黄金は全て砂金に変化していた。
不安定になった足元を踏み直す俺の横から――ざざざざっ！
巫女装束の背から銘剣・デュランダルを抜いた白雪が、その砂金を蹴って飛び出した。
そして煙の渦に飛び込み、ぎいんっ！

何かの刃物同士が激突する音を上げて、右に弾き出された。
白雪は受け身を取りつつ、一旦、柱の陰に転がり込む。
そのあまりにも素早い緒戦に、俺は何も手出しできずにいる。
時間がない。アリアの所へ行かなければ――！
そうは思うのだが、砂煙が収まり、パトラの姿が見えるのを待つしかない。
あの戦いに巻き込まれたら、こんな拳銃一丁じゃどうしようもないんだ。
きらきらと舞い散る砂金の向こうのパトラは――
「佳いのう。戦う乙女は佳い。ぢゃが、どれほどのモノかもう少し見せてみい。逃げ隠れするような弱い女は、妾の側近には要らぬからの。殺すぞ？」
嬉しそうに笑いながら、白雪が隠れた黄金の柱をねめつけていた。
その真っ赤なマニキュアをした手には、抜き身の名刀イロカネアヤメが握られている。
星伽神社から盗まれたという、イロカネアヤメ。
やはり、アイツが盗っていたのか。
「来ぬなら斬るぞ、柱ごと。ほほっ」
言って、刀を振りかぶったパトラめがけて――
ばっ！
緋袴を翻し、柱の陰から飛び出した白雪がデュランダルを下段に構えつつ襲いかかる。

ぎいんっ！　渾身の一撃が、パトラの刀を叩き上げ――ざんっ――
半回転して背をむけた白雪の変則的な打ち下ろしが――パトラの、右腕を斬った。
や……やりやがった。
パトラの右腕はイロカネアヤメを握ったまま、金の砂漠に落ちてバウンドする。
「パトラ。あなたは言っちゃいけないことを言った。キンちゃんを、殺す――って」
両膝をついて腕の切り口を抑えるパトラに……白雪は吊り上げた眉の下の目を、閉じた。
――ッ！
その、白雪の足元。
落ちたイロカネアヤメの下の砂金が、ずず、ずずずッ……と、盛り上がって――
「白雪ッ！」
俺の絶叫と同時に、腕を斬られたパトラが砂金になって崩れ落ちる。
――ニセ者だ！　このパトラは！
ばあっ！　砂金の中から、もう1人の――本物のパトラが、イロカネアヤメを拾い上げながら飛び出てくる。
パトラはさっきの折り鶴爆弾で舞い上がった煙の中で、黄金の土中に潜っていたのだ。
地上には、砂金で造ったニセ者の自分を残して。
「――裏をかかれるとは、愚かよの。弱い戦士など、要らぬ」

白雪の足元からパトラが突き上げた、イロカネアヤメは――
ざしゅっ！　巫女装束の胸――その、ど真ん中を貫通した。
銀光りするイロカネアヤメの切っ先が、白雪の背中に長々と突き出る。
「し、しら……！」
……！
俺のノドからは、言葉も出ない。
白雪は――
自分の胸を貫いたイロカネアヤメを握り、パトラから振りほどくようにして取り戻した。
そして、一歩、二歩、さっき自分が隠れていた黄金柱の方へ後ずさる。
「う……ううッ！」
ず……ずるりっ。
苦悶の声を上げながら、白雪は己の胸に刺さったイロカネアヤメを引っこ抜き――
――ひゅん。ひゅん。
デュランダル共々、自分の背後に放り投げた。
「――？」
眉を寄せた俺の目の前で――白雪が、幻のように消える。
そして、ひらり、あとには、人型に切り抜かれた白い和紙が残って宙を漂った。

ひら、ひら、と落ちた紙には、その中央にカッターで刺されたような穴が空いている。

ニセ者だ……！　こっちも。

放物線を描いて飛んだ2本の刀剣は――

ぱしし。

柱の陰から出てきた、本物の白雪の両手にそれぞれ握られる。

「――裏の裏をかかれるなんて、愚かだね。私も、弱い王様に仕えるつもりはないよ」

白雪はさっき柱の裏に隠れた際、紙人形を、白分の式神……ニセ者に仕立てていたのだ。

バレないよう、ちゃんと、聖剣デュランダルも握らせて。

「弱い……？　妾が、弱いと申したか？」

本取ったつもりが取られていたパトラは、熱しやすい性格なのか――

もう半ギレで、声を震わせている。

その足元の砂金が、ばす、ばす、と音を立てて飛び上がり、何本ものナイフに形を変えていく。

宙に浮くそのナイフの切っ先は全て、白雪に向けられている。

「妾は王ぢゃ！　イ・ウーひとつ、エジプト一国の王にとどまらぬ。いずれは、この世の女王になる存在ぢゃ！　日本の魔女よ――その言葉、覇王への冒涜と知れ！」

その切れ長の目を吊り上げて叫んだパトラの周囲から、ビュビュンッ！

散弾銃のように、無数のナイフが白雪めがけて飛びかかる。
「星伽候天流……風条撥止！」
右手に刀、左手に剣を構えた白雪は――その眼を見開いたかと思うと、姿勢を低く屈め――パトラめがけて、頭を向けて駆け込む。
そして全身を捻りながら、ぎん！　ぎぎぎんっ！　と黄金のナイフを左右の刀剣で弾き飛ばしつつ敵に迫った。
まるで竜巻のように振り回すその2つの刃が、パトラに到達する直前。
ばっ！　まるで牡丹の花が咲くように、真っ赤な炎の渦を纏う。
「緋炫毘・双琥！」
ミキサーみたいに振るわれた、炎の刃は――
ぎん！　ぎぎん！
瞬時にパトラが足元の砂金から作り出した、フリスビーみたいな黄金の丸盾に防がれた。
同時に、しゃあっー！　砂金のシャワーが白雪の刀を撫で――刀身から上がる炎の火力が、一気に弱まった。野火を消すのに砂を使うように、火は、砂に弱いのだ。
「――ソ！」
くっー　と白雪が再び柄を握る手に力を込めたかと思うと、炎は復活するが――
白雪の呼吸が、早くも乱れ初めているのが分かる。

白雪は強力な鬼道術を使う際、全力疾走するぐらいに体力を消耗するのだ。
あの猛攻も、そんなに長くは持たないだろう。
一方でパトラは、余裕の笑みさえ浮かべている。
ピラミッドの中では、アイツの魔力は尽きることがない。無限なのだ。
白雪がスタミナ切れを起こしたら、おしまいだぞ――
ぐずぐずしてはいられない。
早く、アリアを取り戻さないと……！
そのチャンスを窺う俺は、ジリ、と砂金の足元を踏みしめる。
「――緋火虞鎚・焔二重！」
叫んだ白雪がパトラの額めがけて上段から斬り下ろした、2つの刀が――
ささっ！　と集まって何重にも重なった黄金の丸盾を、瓦割りのように2枚断ち割って、
「ほっ。アメンホテプの昊盾を2枚も割りおった」
と笑うパトラの頭上に浮く3枚目に止められた時。
俺は、ダッ！　駆け出した。
――こうなりゃ、賭けだ！
今、パトラが白雪との戦いに集中しているその隙に――
パトラの背後をすり抜けるように、アリアの黄金柩まで、まずは走れ！

ばち……ばちばち……！

（……!?）

俺のB装備に、砂金の粒が当たる音がする。

なんだ、これ……!?

気づけば――俺の体にまとわりつくように、風が――

「トオヤマキンジ。妾はいま、この女を愉しんでおるところぢゃ。目障りな動きをするでない。風に巻かれて、おとなしくしておれ」

こっちに背を向けたままのパトラが言う通り、俺は砂金の竜巻に飲まれていた。

高速で当たった砂金が、俺の顔面や指に細かい傷をつけ始める。

がす。ばちっ！　大粒の金が頬に当たって、血を飛び散らせた。

身動きが……取れない！　風で、体が浮き上がりそうだ……！

「キンちゃん！　走って！」

叫んだ白雪が――

1剣1刀を巫女装束の帯に差したかと思うと、ばらんっ。

白小袖の中から、二枚の大きな扇を出した。

「星伽巫扇　風神駿！」

ちょっとした立て看板みたいに大きく広げた白扇を、白雪は自分が少し背後に吹っ飛ぶ

程の猛烈な勢いで振るった。
ぶわああっ！　白雪が作り出した突風が、砂金の竜巻を見事に消し去る。
少し浮き上がってしまっていた俺の足が地面につき、俺は再び駆け出した。
アリア――！
「キンちゃん、走って　アリアの所まで――！」
「下郎！　柩に触れるでないソ！」
こっちを向いたパトラが金切り声を上げると――
ず、ずずず……！
アリアの黄金柩を足元に置いていた、巨大な黄金のスフィンクスが動き始めた。
こ、こいつ……動くのか！
堂々と目の前に座っていたから、逆に油断させられた。
どうやらこれが――パトラの、隠し玉の大型ゴレムだったらしい。
エジプトのお経のようなものをブツブツと呟きながら立ち上がるスフィンクスの体長は、10mは優にある。まるでアニメの戦闘ロボット、白亜紀の恐竜みたいな怪物だ……！
こんな化け物、ベレッタとナイフじゃどうしようもないぞ！
「それが動くのは分かってたよ……！」
白雪は再び抜いた1剣1刀を、翼のように大きく広げて構えた。

そして正面からは刀剣が見えなくなるほど、背後に大きく振りかぶる。
「だから最後の、撃は――その西洋狛犬のために、とっておいたんだよ！」
ぱっつん前髪の下で眉を吊り上げ、目を閉じて力を込めた白雪は――
「星伽候天流、奥義　緋火星伽神・双重流星!!」
十文字にクロスさせるように、渾身の力を込めて、両方の刃を前方に振るった！
ずあああああああっ！
刀剣から放たれた深紅の光が、俺の頭上を掠めるようにして飛び――
X字の刃となって、スフィンクスの首に激突した。

ドガアアアアンッ!!

爆炎の渦に飛び込んでいく形になった俺は、がらがらと音を立てつつ金塊に戻っていくスフィンクスの破片を浴びながら――
あと1歩。あとひとっ跳びで、アリアの、柩に届くぞ！
時計　時間は、まだあと5分、ある……！
「止まらんかぁー　トオヤマキンジー！」
ヒステリックな声に、振り返ると――

……！

パトラが、倒れた白雪を踏みつけている……！

「う……！」

金の砂漠に伏せて呻しげな声を上げた白雪は、どうやら……

今のスフィンクスを倒した一撃で、とうとう全ての力を使い果たしたようだった。

「……白雪！」

俺がパトラに拳銃を向けると――

倒れた白雪の体から、しゅう、しゅうう……と、水蒸気のような煙が上がり始める。

「飛び道具を捨てて柩から離れるのぢゃ、遠山。この女をミイラにするぞ」

「……何……!?」

「人体とは、水袋のようなもの。妾はその水を抜き取る聖秘術を持っておるでの」

にい、と笑うパトラの足元から上がる白雪の水蒸気が、勢いを増していく。

「あ……あぁ……」

苦しげな、白雪の声に――

「ま、待てパトラ！」

俺は拳銃を足元に置く。

置かざるを、えない。

「ほほ。大した2人組ぢゃったのう、お前たち。スフィンクスをも破壊し、柩に迫るとは。しかしそれは所詮、人の技。神より力を授かりし妾には、抗えぬのが道理ッ。立体魔法陣と共にある妾の力は、無限！　無限に有限は、勝てぬ。それが道理ぢゃ。お前等がやろうとした事は、道理に逆らう――無理。無理無理無理無理、無理ぢゃったのよーぅ」

勝ち誇るように広げたパトラの手首で、しゃんっ、と金輪が鳴ると――

俺の体からも、シュウ……シュウ……と、煙が上がり始めた。

汗ではない。まるで生命そのものを抜き取られるかのように、水が、抜け出ている。

う……うう……！

苦しさに口を開くと、煙草でも吸ったかのように口からも煙が出てきた。

ノドが乾く。舌の表面がカサカサになっていくのが分かる。

眼球からさえも煙が出て……前が、見え、なく……

――がんっ！

その音は、ピラミッドの外から聞こえてきた。

がんっ、がんがんがんざざぁ――ッ！

薄れた視界には、何の異変も起きていない。

しかし何か、ピラミッドの斜面を登るような音が、近づいて、いる……？

「――!?」

がしゃあああん！　俺の背後でガラスが割れる。

振り返るとそこから、赤く着色されたオルクス潜航艇が室内に乱入してきている――！

パトラが驚いて集中が切れたせいか、俺と白雪の体から上がっていた煙が止まる。

「じゃあ――」

俺のそばで停止したオルクスのハッチが、開いている。

「もう少し、無理させてもらおうかしら」

俺のベレッタか何かに盗聴器でもつけていたのか、会話を盗み聞きしていたらしいその声の主に――パトラが、かあああ。怒りなのか何なのか、その白い顔を一気に赤面させた。

「……トオヤマ、キンイチ……！　いや、カナ！」

カナ！

俺が気づいた次の瞬間、砂金のナイフが――がすがすがす！

オルクスの外壁をメッタ刺しにする。

だが、俺は見た。

その一瞬前にハッチから飛び出した、武偵高の女子制服姿のカナを――！

パパパパパパソー

長い三つ編みを翻し、華麗な月面宙返りを見せたカナの周囲で――

6つの光が、ほとんど同時に閃いた。

不可視の銃弾。その、6連射だ。

パトラは身を捻り、バック転してそれを躱したが――

ざしゅ。ネコみたいな姿勢で金の砂漠に降り立ったその膝に……筋の血を流している。

初めて、パトラが負傷した――!!

すとん。

着地したカナは――

俺に破壊されたのと同型の拳銃、燻し銀のコルト・ピースメーカーを携えている。

カナ。兄さん。

何も言われなくても分かる。今、パトラに発砲したことで。

兄さんはもう一度……

アリアを殺さず、イ・ウーと戦う『第二の可能性』に賭けてくれるんだな……!

「出エジプト記34章13――汝ら還りて彼等の祭壇を崩し、偶像を毀ち、斫倒すべし――」

ばらっ。

聖書の一節を呟き、空中に片手で6発の銃弾をばらまいたカナは――

ジャキンッ！

振りかぶった銃を右から左へ、空中で銃弾にぶつけるように払った。

ちゃきソ、と元に戻したピースメーカーの回転弾倉には　銃弾が6発とも、きちんと収まっている。

空中リロード。そう兄さんが呼んでいたこの手品みたいな技は、ヒステリアモード状態でなければできないこと。

そう。絶世の美女・カナに変身した兄さんは、常にヒステリアモードでいられるのだ。

「キンジ。私があげたナイフは、まだ持っているわね？　緋色の、バタフライ・ナイフを」

少し振り返って言ってきたカナに、俺は頷く。

「――あのナイフを持ったまま、アリアに口づけなさい」

くち……？

く、口づけ……って。

何でだよ、何でなんだよ、瀕死のアリアに、どうしてそんなこと……！

言葉の意味を問いかける暇も与えてくれず、カナは無形の姿勢になって　ゆらり。

あの、流水のような歩法でパトラへと歩み始めた。

「パトラ。今の私は――女にも容赦しないわよ」

「……カナ。トオヤマキンイチ。寄るでない。妾は、お、お前とは戦いとうない」

赤面さめやらぬパトラは四つん這いの姿勢のまま、じり、じり、と退いている。

「パトラ。あなたは獣の様に獰猛に見えて、実は、とても頭のいい子。左右の手で別々の文字を書くように、幾つもの物を思念動で別々に動かせる。でも、その集中力にも限界がある筈」

言いながら迫るカナに、

「バカにするでない！　妾は、妾は、おお、お前のことなど好き――で、あ、す、好きにできるのぢゃぞ！」

セリフを噛みながらのパトラが、自分の周囲にあの大皿のような盾を浮き出させた。

数は、6枚。明らかに、不可視の銃弾への備えだ。

あれだけ攻撃的だったパトラが、防御の道具を先に砂金から作り出している。

「それだけではないでしょう、パトラ。出せるだけ、出してみなさい」

言ったカナは、ぱぱぱぱぱンー

点ではなくもはや線のようにマズルフラッシュを閃かせて、パトラを銃撃した。

パトラはそれに対応した。きゅっ、と眉を寄せつつも、なんとかギリギリ6枚の丸盾で銃弾を防ぐ。

「お、お、お前なんか大ッキライぢゃあ――――！」

おかっぱ前髪をぶんぶん振ったパトラは、周囲の砂金から黄金の鷹を作り出した。
鋭い嘴だけでなく、翼も刃物のように研ぎ澄ました鷹が、7羽、いや、8羽。
文字通り四方八方から、カナめがけて飛びかかる。
「ふうん。8つ。もっといけるかと思ったんだけどな」
柔らかい声で言ったカナは――
くるっ。長い三つ編みを躍らせて、その場で一回転した。
ばちん！　ばちばちん！　襲いかかる鷹が、一気に薙ぎ払われていく。
これも全く見えない――不可視の、斬撃で。
「まだだぢゃ！」
パトラはさらに黄金の鷹を――今度は、気に、20羽ほども飛ばす。その何羽かは片脚が無かったり、頭がウズラみたいに小さかったりと歪だが……戦闘力は、同じようだ。
「――――！」
1羽の鷹が、もう一回転したカナに切断されつつ――その髪を結んでいた布を切る。
ばらっ――
髪が僅かに解けたカナは、『仕方ないか』という表情を、瞬したかと思うと――
じゃき、じゃきじゃきじゃきッ！
髪の中に隠していた、いくつものパーツに分かれた金属片を、気に組み立てていった。

それはどうやら細いワイヤーか何かで繋がっていて、自動的に組み上がる仕組みになっていたのだろう。金属片は大きな曲刃になって――さらにカナが襟に隠していた三節棍のような金属棒も、同様に組み上がっていく。

ぶうんっ、じゃきッ。

風圧で砂金を巻き上げながらカナが構えたそれは――

「よくやったわパトラ。私にこれを出させたのは、あなたが初めてよ。通称、サソリの尾――砂漠に似合うでしょう？」

まるで西洋の死神が携えるような、大鎌。

その刃は髪の隙間から見つけられないようにするためか、濃紺に着色されている。

見る者全員を圧倒する、その巨大な曲刃に――

「わ、妾は――覇王ぞ！　お前ごときに……お前ごときに！」

一瞬戸惑ったパトラは、砂金の鷹、加えて、砂金の豹、アナコンダを――上から下から、空中から、めちゃくちゃにけしかける。

対し、ひゅん、ひゅんひゅんひゅん！

縄跳びの二重跳びより速い速度で、大鎌の軌跡がカナの周囲を趨った。曲刃は縦横斜め、前後上下もお構いなしで、カナに迫るあらゆる敵を破壊する球状のバリヤーと化す。

カナの指は……僅かに、鎌の柄を操っているだけだ。まるでバトンか何かを扱うような

最小限の力で、大鎌の回転をどんどん加速させている。
ばんっ！　ばんばんっー　ばちん！
大鎌の先端から、炸裂弾のような音が上がり始めた。
先端の速度が、音速を超えているのだ。
その先端に触れた空気中の水分が凝結し、パッ、パパッ、と円錐水蒸気を断続的に発生させている。まるで桜の花びらのような形をしたそれが、兄さんの周囲を乱舞して――
ばん！　ばばんっ！　ばすっ！
もう、黄金の敵たちは鎌に触れる前に、その衝撃波で破壊されていく。
「――この桜吹雪、散らせるものなら……散らせてみなさいっ」
パトラに穏やかな笑顔を見せたカナに、俺は生唾を飲む。
――強い。
もうこうなっては、何人たりともカナに近寄ることはできないだろう。
やっぱり、カナに変身した兄さんは凄い。無敵だ。
正義の味方は、変身後に本領を発揮する。それを地でいってるな。
「……ぐぅ……」
鎌を振り回しつつ、さく、さく、と砂金を踏んで迫るカナから――
パトラは、さらに退いた。

とうとう超能力に頼ることをやめ、人質を取ろうとしたのだろうか。思い出したように白雪の姿を探しているが……1剣1刀を抱えた白雪は、もうパトラから離れた玉座の裏に隠れていた。よそ見をしたパトラに対し――チッ！　カナの大鎌が地面をこすり、僅かに飛んだ砂金が銃弾のように飛んだ。

ビシッ！　握りの砂金がパトラの金冠に当たって、正面を向かせる。

「あうっ！」

「よそ見はいけないわ、パトラ。今は、私だけを見なさい。まっすぐ、まっすぐに――」

催眠術にかけるように、囁くような口調で言ったカナから――

俺は、アリアの柩に視線を移す。

――取り返すなら、今だ。

今度こそアリアの柩を取れる。

パトラはもう、いっぱいいっぱいだ。カナが釘付けにしている。

白雪のことも、俺のことも、攻撃できない！

（――アリア！）

足元に置いていた自分の拳銃を、サッカーボールみたいに蹴り上げてキャッチした俺は――ばっ！　パトラに背を向け、ラグビーの試合でタッチダウンするかのように――

アリアの柩に、飛びついた。

やった。
やったぞ。
まずは――柩を確保できた！
時計を見れば、時間はあと1分ある。
開けるんだ。助け出すんだ。1分以内に……！
黄金の蓋は重い。だが鍵はかかっていないようだ。ベレッタをホルスターに収めた俺は全力でそれを押して、ずらすように開けていき――
眠るように倒れているアリアの顔を、確認する。
「……アリアっ！　俺だ！　アリア……ッ！」
叫んで、さらに蓋を押し開いていく。
ず、ずず。押し開いていく柩の蓋が――ずるっ。傾いて、一気にかなり開いた。
傾い、た……？
「……!?」
気づけば、柩は砂金に沈むように傾き――俺の足も、足首の辺りまで砂に埋もれている。
……流砂……！
ここは誰かが近づくと、アリ地獄のようにその重みで沈むようにできていたのだ。
パトラの魔術云々ではない。ある種の、落とし穴――！

さらに膝まで沈みかけた俺は、とっさに、柩に登る。
アリアを引っ張り出そうにも、まだ蓋はそこまで開いていない。
「……！」
チクショウ。
なんてことだ。こんな……初歩的な罠に、かかるなんて！
がくんッ。
流れ落ちる砂金の中で柩は斜めになり、大きくズレた蓋の上で足を踏み外した俺は――
柩の中に、転げ落ちてしまう。
「うっ！」
今度は俺の重みのせいか、柩が反対側に傾き……ずり、ずりり。蓋が閉まっていく。
「……！」
やばい。ミイラ取りがミイラになる、ってやつじゃねえか。
などと思った俺の体が、浮くように不安定になった。
柩が――転落しているのだ、どこか、下の方へ――！
俺は真っ暗な柩の中で、とにかくアリアを守ろうと、その身を抱き寄せた。
アリア。
アリア！

俺だ、ここまで来たんだ。アリアー　だから――目を覚ませ！

アリアー！

最終弾　緋弾の覚醒

流砂に流されるような感覚は――がつんっ、と柩がどこかに衝突した音と共に止まった。

アリアの頭を抱きしめていた俺は、自分の頭を柩の内壁に思いっきりぶつけてしまう。

ってぇ……！

頭を振った俺は周囲が真っ暗な事に気づき、再び閉ざされてしまった柩の蓋を少しでも押し開けようとしたが……お、重い。

どうやら上に砂金が乗って、蓋の重量が増したらしい。

これはこれでピンチだが、まずはそれより――アリアだ。

アリアの命は、あと数十秒しかない。

俺は暗闇の中でアリアを探そうと手を動かした。むに。何やら柔らかい部分に指が触れ、ちょっと焦るが――それより、ホッとする。

温かい。生きてる。アリアはまだ、生きてるぞ。

狭い柩の中で、B装備の右肩についているフラッシュライトを照らすと――

「……！」

アリアはパトラと同じような、黄金でできた過激な衣装を着させられていた。

セパレートの水着みたいに、布は胸周りと腰を僅かに覆っているだけで――布の周囲は、金細工と生花で飾り付けられている。

か、可愛い……

こんな状況なのに、真っ先にそう思ってしまう。

ほとんどハダカみたいな状態のアリアは、この衣装と花に包まれてキラキラと輝き……美し……かった。まるで童話に出てくる、眠れる森の……美少女。そのエジプト版だな。

だが、見とれている場合じゃない。

アリアの呪いを解かねば。

その方法は、さっき兄さんが言っていた、

「……」

口づけ、つまり、キス、なのかよ。

鏡を見なくても、自分がどんどん赤くなっていくのが分かる。

アリアに……それも、気絶してるところに、勝手にそんなこと……

なんというか、狡いというか……いや、悪い、気がする。

それにそんな方法でなぜ、お前が助かるというんだ。

お前の口癖じゃないが、1ミリグラムも意味が分からないぞ。

（でも――）

でも、許してくれアリア。

お前との日々でめったやたらに超常現象を見せられたから分かるんだけどな。どうやら俺たちの世界からはもう、常識ってヤツはどこかへ行ってしまったらしいんだ。

普通にお前を病院へ連れてって、医者に診せるとか――

そういうやり方じゃ、間に合わないだろうし。

これでお前が死の眠りから覚めるというのなら、俺は……

砂時計の中で、残りの僅かな砂が落ちていく。

腕時計を見れば――アリアの死まで、あと、24秒。

アリア。

言いはしないぞ。

お前は恋愛沙汰がニガテだって知ってるから、心の中ですら、言いはしないけどな。

眠るお前に、こんな事をする前に――俺は、俺の心の中で、認めてやるよ。

ああ、あと10秒。

俺は跪き、思い切って抱き上げたアリアの寝顔……その、あまりにも可憐で、愛らしい唇を目で確かめる。

そして、目を閉じた。

あと、5秒。

俺は――本当は、分かってたんだ。
なんで、お前に対してこんなに、生懸命になれるのか。
なんで兄さんを斃してまで、お前を助けに来ちまったのか。
それは同情だ、あるいは真っ直ぐ生きるお前への、ある種の尊敬だ……
……そう、思おうとしてきた。
でも、それは――ウソだったんだ。
自分で、自分についていたウソ。
お前とは、生き方が違う。現代では珍しい事だが、身分も違う。だからどうせ、いずれ俺たちには離れ離れになる時が来るんだろう。
だから、心の中でも言いたくなかった。認めるのが怖かった。
でも、アリア。俺は、俺はいつの間にか、お前の――

あ……

――どうも俺は――不器用だな。ガキすぎるのかな。こういうところ。
考えるより先に、俺の口は――つい。
アリアの、小さな唇に触れていた。

ほんの1ミリ角。砂金の粒より、小さな面積。触れていた。
砂時計の中で、砂金が落ちきり……その瞬間、俺(おれ)は――
アリアの頭を、強く、強く抱き寄せた。
クチナシのような、アリアの息の香りが――俺の口腔(こうこう)から鼻へと抜け、身体(からだ)の芯(しん)に火をつける。ああ、アリア、アリア……アリア――
――死ぬな。
死ぬな、アリア……！
その時……柩(ひつぎ)の中に、異変が起きた。
「？」
顔を上げた俺の周囲が、緋(ひ)色の光にうっすら包まれている。
なんだ、この光は？
肩のフラッシュライトを確認するが、壊れたわけではなさそうだ。
ライトを消すと、光源は……俺の腰。ズボンの、ポケットの中……？
不審に思ってポケットに手を入れ光の元を取り出すと、光っていたのは兄さんがくれたバタフライ・ナイフだった。

蝶の羽根のように、その柄鞘を開くと――

「うッ……！」

眩しい……！

目が痛むほど、それは赤く、紅く、どこまでも緋色に光っている。

赤熱化してるようにも見えるが、熱くはない。

なんだ……これは……!?

「……キ……ンジ……」

小さな、小さな――アニメ声。

アリア……！

慌ててナイフを閉じると、そこではアリアがその赤紫色の瞳を薄く開いていた。

「あんた、の……負け。6時、回って……ないから、あんたの負け……」

朦朧としているらしいアリアは、どうやらパトラに狙撃されてから自分が昏睡していたことを意識できていないようだった。

まるで時が止まっていたかのように、24時間前に台場で交わした『賭け』の話をしてる。

「ああ、俺の負けだよ。でも、もう――支払いは、済ませたつもりだ。だから安心しろ」

などと言いながらの俺は、自分の血流を確かめる。

ヒステリアモード。

性的興奮をトリガーに目覚める、俺の、秘められた力。
それが……この身に満ちている。それは……分かる。だが――
何か、いつもと少し、違う……？
「あれ……ここ、どこ……？　何よここ、あ、あたし……撃たれて……あれ？」
「そうだ。お前は狙撃されて、色々あって――今は太平洋でイ・ウーの厄介者（つかいもの）・パトラと戦闘中さ」
「い……いろいろありすぎよそれっ！　えっ、あ、あれ、何これっ！」
次第に意識をハッキリさせつつあるアリアは、自分がヒモみたいな薄布と黄金の装飾品しか身につけていないことにわたわた慌て始めた。
はは。狭い柩（ひつぎ）の中、この子が恥じらう可愛（かわい）い姿を見れるのは……嬉（うれ）しい事だな。
嬉しすぎて……涙がにじんできたよ。

ずずん……

遠雷のような音が柩の外から聞こえてきて――洋上のピラミッド全体が、揺れた。
「な、なにっ？」
丸出しのヘソをなぜか隠したアリアと共に周囲を見回すが、柩の中からは何も見えない。

ずずんッ……！

（チッ……！）

さらなる音の意味が――頭に巡るヒステリアモードの力で、今度は分かった。

何かしらの爆薬が、このピラミッドを載せたアンベリール号の船底で爆発したのだ。

船が、傾斜し始めている。

おそらくパトラだ。兄さんに勝てないと悟って、船を自沈させるつもりだな。

俺は枢全体が少しずつ斜めになっていくのを見計らって――

角度を計算しながら、その蓋の一片に背をつけた。

今、ここを押し上げれば――おそらく

俺は渾身の力を込めて、黄金の蓋を押し上げにかかる。

「キンジー！」

まだ事態を把握しきれていないながらも、アリアが手伝ってくれる。

うーん！　と両手と頭で蓋を押し上げるアリアの背中がこっちを向いて……狙撃の痕が治っているのが見えた。おそらく、パトラが失血死を防ぐために魔術でも使ったのだろう。

頭と頭をくっつけるようにしながら、俺たちは、蓋を　少しずつ、開いていく。

砂金が枢に入ってきて、ざらざらと足元に落ちていく。

開け……こんな所で……死んでたまるか……！　俺だけならともかく、アリアまで――

死なせは、しない！

「う……う…おおおおおおッ！」

「うあああああっ！」

がらららッー

押し上げた蓋が、音を上げながら滑り落ちていく。

――やった。これで外に出れた。

俺たちの頭上に90センチは積もっていたらしい砂金は、それでも柩の中を埋める程には流入してこない。それだけ、船全体が傾斜しているのだ。

周囲を見回せば、そこはもう一つの大広間だった。

「な、なによ、ここは……っ」

唖然とするアリアの視線の向こうでは、ジャンヌカル、タカ、ネコの頭に人間の体をした古代エジプトの神々の巨大な座像が俺たちを見下ろしている。

だがその座像群も、揃って大きく傾いた状態で……

――殺気――！

「――！」

俺は背後の上空めがけて、ベレッタをフルオートで撃ち放った。

がきんっー！　弾切れになったベレッタがスライドをオープンさせるまで撃つが――宙を

舞う皿のような黄金の丸盾が、弾丸を全て弾いてしまう。
そして、その盾を砂金に戻しながら、パトラが――
ざしゅ。
さっき俺たちが落ちてきた穴から、金の床に降り立った。
俺たちの柩は、かなり斜面を滑り落ちたのだろう。
パトラはまるで坂道みたいになった床の、上の方に着地している。
「トオヤマキンジ。妾は、のう……今度ばかりは、退いてやる。だが、それは返せ」
言って、パトラが俺の背後のアリアを指す。
「パトラ　いけないな。女性をモノ呼ばわりしては」
パトラも女だ。ヒステリアモードの俺は、諭すような口調で語りかける。
「……そうか、ＨＳＳか。お前はトオヤマキンイチの弟ぢゃからの。お前も、なれるのは道理といえようの」
不敵に笑うパトラは、どうやら流砂の落とし穴をくぐって上階から逃げてきたらしい。
カナの追撃が無いところを見ると、その穴はしっかり塞いできたってところか。
「ぢゃがそのお前も、水に沈めば死ぬ。ここは海。船が沈めば、生き残るのは妾だけよ。妾は水中でも長らえられる術を持っておる。妾の都はかつて、海辺にあったでの」
ちゃき、と、パトラは――携えていた長銃を構えた。

砂漠迷彩が施されたそれは、台場でアリアを撃った狙撃銃・ＷＡ２０００。ＳＦ映画にでも出てきそうな近未来的シルエットの、高い精度で有名なオートマチック式狙撃銃だ。

それに増設されたレーザーサイトの照準が、つつつ……と、アリアの柔肌を……太ももから腰、腰から腹部、そして左胸へと、蛇が這うように上がっていく。

「うっ……！」

アリアは……蛇に睨まれたカエルのように、動けなくなった。

普段なら防弾制服に守られているその身体は、今、ほとんど丸裸の状態なのだ。

――なるほど。

パトラ、お前は頭がいい。兄さんが認めるだけのことはある。

あれだけ魔力を自在に操りつつも、最後の最後は科学の力――銃。

俺たちの盲点を突くような武器に、切り替えたワケか。

結果的には後ろからでしくじったでの。今度は、前からぢゃ。その心臓、妾に捧げい」

にい、と笑ったパトラの――指を、俺は睨む。

引き金が、引かれる……！

銃弾撃ちで、反撃――

「――！」

いや、ダメだ。俺の銃は弾切れを起こしている。

俺はパトラが引き金を引く、まさにその瞬間に飛び出した。
アリアの前方へ。
防弾ベストを着ている俺自身の体を、盾にするために――！
そして、その瞬間、
敗北を悟った。
「さらばぢゃ、トオヤマキンジ」
ＷＡ２０００のレーザーサイトが……俺の頭に照準を合わせている！
ＨＳＳ　ヒステリアモードの事を知るパトラは、先読みしていたのだ。
俺が、どうしても、女を守ろうと動いてしまうことを。
アイツはアリアを撃つフリをして、
まず、俺を――！
「キンジっ！」
――ダァ――ン――……！
金切り声を上げたアリアを背中で押し飛ばすようにして、俺は真後ろにひっくり返った。
「キンジー！　キンジー！」

頭部を――

撃たれた――

それだけが分かる。

俺は真後ろに倒れた。

だから、額か、鼻か、口か、どれかの真ん中を撃たれたんだろう。

「キンジ！　キンジ！　キンジぃー！」

顔面に……血の感覚が、あるな。

おそらく、血まみれ。スプラッタ映画みたいなことになってるんだろう。

ああ、アリア。

ごめんな。

最後の最後に、こんな顔、お前に見せることになって……

「キンジ……！　いやっ、いや……いやあああああッ！」

アリアの悲鳴が――

ぼやけて、聞こえる。

だが……

聞こえる。

ということは。

俺は……死んでない。

少なくとも即死じゃない。

視界はゆがんでいるものの、うっすら開けた目は見えている。

俺の顔を覆ってかばうようにするアリアが、両目をきつく閉じて顔をぶんぶん振ってるのも、なんとか見える。

俺は撃たれた瞬間、何かをやった……らしい。ヒステリアモードの、反射神経で。

そして、銃弾を防いだ。少なくとも、むき出しの頭を撃たれても死なないようにした。

どう……やったんだ？　俺は。

肉体に通常の30倍のスペックを発揮させるヒステリアモードは、時に自分の思考力をも上回るスピードで行動を起こすことがある。

つまり、自分でも――「いつの間に？」と思うような早業を見せることがあるのだ。

今のこれが、まさにそれだった。

だがその防御は不十分だったようだ。ダメージは、ある。脳震盪を起こしている。今は、口が……きけない。身動きも取れない。即死したように……見えるだろう。

「――キンジぃ――――――――――!!!」

広間に響いたアリアの絶叫――
そして、静寂が……訪れる。
不気味なほどの静けさの中……俺は。
ようやく動くようになってきた体、その口の中で異様な熱さに気づいて……
……ぺっ。
口から……銃弾を、吐き出した。
な、なるほど。
我ながら大したヤツだよ。ヒステリアモードの俺は。
どうやら俺はパトラの銃弾を、噛んで止めていたらしい。
それも昔、虫歯の治療で硬質セラミックを被せた奥歯でな。
それでも弾丸の運動エネルギーは止めきれず、俺はブッ倒れながら盛大に鼻血を噴いた……と、そういう事らしい。この流血は。
「……」
血にまみれた顔面を手で拭いながら上体を起こすと……
パトラはコブラの冠の下で、その切れ長の眼を大きく見開いていた。
だがそれは、撃たれた俺が起き上がったことに驚いて、ではないらしい。
カツン……カツン。

パトラは黄金の床を踏み鳴らしつつ、斜面を上るようにして後ずさっていく。
青ざめた顔で。何も、言わず。
なんだ……パトラ。
何に、そんなに――
怯えているんだ。お前は。
パトラが後ずさる、その側面から……がしゃん！
傾いたピラミッドの壁面を渡ってきたらしいカナと白雪が、側面のガラスを破って――
傾いた室内に入ってきた。
「……！」
振り向くと、2人もまた愕然とした表情で……俺ではない、室内の何かを見ている。
言葉は、ない。
一体、何が……？
立ち上がって周囲を見回すと――
（……アリア……？）
アリアが、いつの間にか立ち上がってパトラの方を向いていた。
そのアリアもまた、言葉を発していない。
いや――気配すら、発していない。

いや、違う。気配はある。だが、違う。
これだけ一緒に暮らしてきた俺だ。アリアの気配ぐらい、何となくだが分かる。
どういう……ことだ。
あれはアリアじゃない。
……誰だ。
――誰なんだ、お前は！
「……」
無言のまま、黄金のサンダルで床を渡るアリアは……
俺の事を、見すらしていなかった。
その日の中、瞳孔が、何かの動物のように緋色の光を放っている。
俺も……その異様なムードに、一瞬で呑まれてしまう。
立ち止まったアリアは右手を前に出したかと思うと――
――す。
人差し指で、パトラを指した。
パトラはそれだけで、すくみ上がる。

そして、すくみ上がった自分自身に驚いたような顔をした。
「何ぢゃ、こ……この感情は？　……こわい……？　わ、妾が……お、恐れて……？」
パトラの手が、膝が、震えている。
ず、ずずず……！
パトラの恐怖心を表すように黄金床がせり上がって、その身を守る巨大な盾に変わった。
「……」
アリアの、拳銃のように突き出されたアリアの人差し指――その先端が――
緋――
緋色に――
輝き始める……！
緋色の光が、直径1メートル程までに広がっていく。
まるで、小さな太陽のように……！
「……緋弾……！」
後ずさりながらの白雪の声が、広間に響く。
それ以上、言葉が続かないらしい。
――緋弾。
兄さんが言っていた言葉、『緋弾のアリア』。その一部を――白雪も、口走った。

アリアの指先に灯る緋色の光は、さらに広がり、輝きを強めていく。
あれは何だ。あの、燃える太陽のような発光が、『緋弾』なのか。
だが、アリアは超能力者じゃない。それがなぜ、あんな――

ぱあっ！

「避けなさいパトラ!!」
緋色の光がアリアの指先から飛び出した瞬間、カナが叫んだ。
それに正気を取り戻したように、パトラは――
恥じらうヒマもないと言わんばかりに腰布を翻して黄金の床に尻をつき、浮き上がった盾の下から、滑り台を滑るようにして間一髪で光を避ける。
緋色に輝く光の弾は――砲弾のように――
黄金の大盾をまるで紙のように貫通し、さっきパトラがいた場所を通過して

超新星爆発のように、弾けた！

緋色の光が、室内の全員に降り注ぐ。
それは、全(すべ)てを塗りつぶす――閃光(せんこう)！

バシュウウウウウウウウウッ――――――！

爆発や銃声とは全く異なる音が、俺(おれ)の耳を打つ。

「……！」

思わず両腕を盾にして守った俺の視界、緋色の光に塗りつぶされた世界は――
腕を下ろすと共に……
青く、変わった。
――空。
今のアリアが放った一撃が、ピラミッドの上部をゴッソリもぎ取っていったのだ。
音も無く。熱も無く。何の衝撃もなく。
――消滅、させた……！
がらがら……！　と、室内には壊れたピラミッドの建材――ガラスや鉄骨の破片が降り注いで、斜面を転がり落ちてくる。
紅を差した口を開けて、上部を失ったピラミッドを見上げていたパトラは……

ざら、ざらら、と、その身につけていた黄金の衣装を砂金に戻していってしまう。
どうやらパトラはピラミッドを破壊された事で、自慢の『無限魔力』を、気に失いつつあるようだった。
「う……っ！」
――いつも魔法陣に頼っているうちに、パトラは咄嗟には自分自身で魔法を使うことができなくなってしまったらしい。その頭に載せた金冠さえも、砂金になって落ちていく。
「あ、あ、ああっ！」
とうとうただの薄い水着姿になってしまったパトラが、自分の身体を慌てて両腕で隠す。
部屋の周囲に居並んでいた神々の像も次々と崩れ、倒れ、砂に戻っていく。
こうなるとこっちも呆然としていられないぞ。
見ればアリアは降り注ぐガラスや金属の中、その黄金の装身具をさらさらと砂金に戻し……その身に飾りつけられていた花の花びらが舞う中……くらっ。
無表情のまま、マネキン人形が倒れるように――
「アリアっ！」
――倒れたところを、俺が抱き留めた。
ヒステリアモードの俺よ。とっさでも、お姫様抱っこなんだな。
「アリア……！」

アリアは再び目を閉じ……気を失っていた。
俺は崩れ落ちるピラミッドの破片を避けながら、鎌で破片を弾いて白雪を守ってやっているカナと何とか合流する。
カナは傾いた室内で、サイコロのように転がってきた黄金柩――どうやら、これだけは砂金から作った紛い物ではないらしい――を避けると、がんっ！
大鎌で、ホッケーのように叩き。
壁際を滑らせて、坂の下でこの場から逃げようとしていたパトラの背を掠めさせた。
ピラミッドを失い、今や覇王からただの人間に戻ってしまったパトラは、
「――うあッ！」
両脚を真上に上げて、黄金柩の中にひっくり返りながら落っこちる。
「んソ！」
室内をさらに滑り落ちてきた柩の蓋の下に、白雪がイロカネアヤメを滑り込ませて――梃子みたいに、跳ね上げさせた。
「――ピラミッドっていうのは元々、お墓なんだろう？」
言った俺はアリアを抱いたまま、宙を舞ったその蓋を、ガウンソ！
弾倉を再装填したベレッタで撃って、僅かに軌道修正してやりつつ――
「こ、こらっ！　何をしおるか！　わ、妾は覇王――」

騒ぎながら慌てて脚を引っ込めたパトラの柩に、ぱくんっ。
うまく、重ねてやった。
「――お墓では静かにするものだよ、パトラ」
上から下へとゆっくり崩れていくピラミノドの中で、滅茶苦茶な騒ぎが収まると瓦礫の山の上、青空の下、アリアを抱えた俺と……
カナと白雪は、パトラを閉じ込めた黄金柩の脇で互いの無事を確かめた。
白雪に魔力封じの御札をべたべた貼りつけられた黄金柩の中で、パトラは出せ出せ出さぬか無礼者！　などと喚き、ジタバタしていたが……
「――パトラ、おやすみ。ご先祖様と同じ柩の中で、ね」
と、カナに言われて……とうとう、おとなしくなった。
なんだかカナや兄さんの言うことは、結果的によく聞いてるよな。パトラは。
……なんでだろうな？
はは。なんとなく分かるけど、兄さんには言わないでおいてあげるよ。パトラ。
今は、女性に優しい俺だからね。

エピローグ　Go For The NEXT!!!

「……キン……ジ……」

ピラミッドを出て、傾いたアンベリール号の舳先に寝かせていたアリアの声に俺とカナ、そして白雪が振り向く。

「アリア……！」

「あれ……キ……キンジ!?　なんで生きてるの！」

生きてちゃ悪いのかよ。

とも一瞬思ったが、まだヒステリアモードの続いていた俺は……

「アリア！」

感極まって、その小さな体を抱きしめた。

「ちょっ……えっ！　き、キンジ!?　な、ななな何!?　ちょっと！」

アリア。アリア。良かった！

パトラが着せていた水着みたいな服だったら、こうやって抱きしめるのももう少し躊躇するべきだろうけど――今は、その上に白雪が武偵高の防弾制服を着せてやっている。

だから遠慮無く、抱きしめさせてもらおう。

抱きしめさせてくれ。こうやって――
ちくっ！
……痛ッ！
な、何かが俺の尻を突いたぞ。
腰を押さえて振り返ると、さっ、と何か日本刀の先端のような物が俺の死角に逃げ……
「アリア、無事で本当に良かったよー！」
などと言いながら、がば。今度は白雪がアリアに抱きついた。
そしてさっきパトラを退けた時の記憶が無いのか、何が起こったのか分からないという表情をしているアリアを、ぐい、ぐい、と押し相撲みたいに俺から押し退けているな。
くす。くすくす。
と、二つ編みを結い直したカナがその光景を見て笑ってる。
……まあ……
……色々、思うところはあるが……
アリアは、助かった。
パトラはカンオケに閉じ込めて逮捕した。
大変な思いをしたが、俺の単位もこれで補填されただろう。
今度こそ――これにて一件落着、だな。

後は武藤たちがここに来てくれるのを、根気よく待つとしよう。日光浴でもしながら。
と……俺が、もう光を失っているバタフライナイフを見て、息をついたとき。

――ハソ。

と、カナが海の方を振り向いた。
「……！」
そのまま無言で、海原を見つめている、
何かを、探す、ように。
その横顔は――真っ青になっている。
初めて見る。カナが、こんなに動揺しているのは――
「……カナ？」
ナイフを閉じて呼びかけるが、カナはこっちに振り向かない。
釘付けになっている。
海に。
「――キンジ……逃げなさいッ！」
カナが……叫んだ。

その事自体が、信じられない。
どうしたんだ
どうしたんだカナ。
あんたが、そんな声で俺に叫ぶなんて。こんなに取り乱すなんて
そんなこと今まで、俺とあんたが生きてきた人生で、一度も無かったじゃないか！
「逃げるのよキンジ！　急いでここから撤退しなさい！」
俺の袖を握って振るカナに、冷や汗が滲む。
待て！　待て！　カナ！　俺たちは撤退も何も、小舟一つも持ってないんだ。
それが分からなくなるほど、カナが混乱している。
あのカナが。パトラすら相手にならなかった、無敵のカナが。必死になっている。
「き……キンちゃん……！」
次にその異変を悟ったのは――白雪だった。
「な……何かが、来る……こ、こわい……！」
アリアから離れた白雪は、自分で自分を抱きしめるようにして――
がくがくと震えながら、その場に膝をつく。
俺は、白雪の背後にある快晴の空と海を見て――気づく。
おかしい。

海が――おかしい。
あれだけいたクジラの群れが、1頭もいなくなっている。
いや、それだけじゃない。鳥も、魚の気配もない。
まるで――
百獣の王が近づいて、サバンナから全ての動物が逃げ出したかのように――
「あ……ああ……！」
叫び出しそうになるのを抑えるように、カナが自らの口元を手で抑えた。
ず……
ずずずず……
その振動は――まさに、洋上の地震。
アンベリール号が、振動している。
いや――海、全体が――ふるえている……！
「――あそこよキンジー！」
緊急事態にこそ勇敢さを発揮するアリアが、舳先ギリギリに駆けて海面を指した。

俺も、そのアリアの傍らまで駆ける。
アリアの指先、アンベリール号の前方数百mほど先の海面が――盛り上がっている。
海が、持ち上がっているのだ。
――そんな――バカな！

っざあああああああああああああああ！！！

その姿から滝のように海水を落としながら、真夏の陽光の下に――クジラ――ではない。
それどころの大きさじゃない。30mのシロナガスクジラの、さらに10倍はあろうかという巨大な黒金の固まりが、浮上してきたのだ！
波浪が、アンベリール号をまるで木の葉のように揺らす。
俺とアリアは舳先の鎖に捕まって、振り落とされないように耐える。
黒光りする壁のようなその巨大な物体は――
アンベリール号の前で、大きく、大きく、ターンしていく。
近づいた高層ビルが壁に見えるように、あまりにも巨大なこれが何なのか――目では、把握できない。
だが、間違いない。これは人工物だ。

それが分かったのは――その巨体に描かれた、幅がそれぞれ2mはあろうかという巨大な『伊U』の2文字が眼前を横切っていったからだ。

眼前を悠々と横切っていく、白い『伊』『U』の文字を――

ヒステリアモードの頭が、炸裂弾でもぶちこまれたかのように理解する。

かつて読んだ歴史の教科書、その副読本に書いてあった。

伊。――それは、かつての日本で使われていた潜水艦を示す暗号名。

U。――これもまた、ドイツで用いられていた潜水艦のコードネーム。

――これは――潜水艦だ！

伊・U。イ・ウーの正体とは、この、潜水艦だったのだ！

大きくターンしてアンベリール号に横っ腹を見せた、全長300m以上あるその艦型を――俺は、把握しにかかる。

潜水艦なんて詳しくはないが……この艦影は、見た事があるぞ。

「ボストーク号……！」

武藤がこの間プールでその模型を作っていた、史上最大の原子力潜水艦。

出航直後に行方不明となった――悲劇の原潜、ボストーク号だ。

「……見て、しまったのね……」

カナが、アンベリール号の甲板に突っ伏しながら言う。

「そう。これは――かつてボストーク号と呼ばれていた……戦略ミサイル搭載型・原子力潜水艦。ボストーク号は、沈んだのではないわ。盗まれたのよ。史上最高の頭脳を持つ、『教授』に……！」

ターンを終え、停止した原潜――その艦橋に立っていた男が見えて――

カナが、立ち上がって叫ぶ。

「『教授』……やめて下さい！　この子たちと　戦わないで！」

ダッ！　と駆けたカナは俺たちを護るように、舳先のさらに前方に立ちはだかった。

ビシュッ！

声もなく。音もなく。

そのカナが、その男の見えざる手に殴られたように跳ね返された。

長い三つ編みを空中に泳がせて真後ろへ倒れたカナを、俺が受け止めた時。
――一発の銃声が、遠い雷上のように響いた。
カナを支える俺の指に伝わる、熱い、何かの液体の感触。
ウソだ……ウソだろ。
「カナ!!」
血――!
カナが、胸を撃ち抜かれている。それも、防弾制服の上から。
あの男は動くそぶりすら全く見せず、あの距離からカナを撃ったのだ。
――『不可視の銃弾』――!　兄さんのあの技を、狙撃銃でやりやがったってのか!?
カナを隠すように抱いた俺が驚愕に顔を上げると、その男が……見えて……
「……」
ひょろ長い、痩せた身体。
鷲鼻に、角張った顎。
右手に持った古風なパイプと――左手には、ステッキをついている。
あの写真や探偵科の教科書に載っていた絵でかぶっていたハンチング帽は無いが……
この期に及んで、ホログラフィーや他人の空似を疑うまでもない。
イ・ウーのリーダー、『教授』。

どういうわけか歳は20歳ぐらいに見える、その、人物を――
アリアが、声にならない擦れ声で――
呼ぶ。

「……曾、おじいさま……!?」

そう、それは――アリアの曾祖父。

シャーロック・ホームズ1世だったのだ！

Go For The Next!!!

あとがき

こんにちは！　また皆さんにお会いできてホントに嬉しいです！
赤松です。

さてさて、お待たせいたしました！　大好評発売中の『緋弾のアリア』、Ⅳ巻です！
今回のアリアは、こぶいちさんが描いて下さったステキなイラストでもお分かりの通り……カジノ警備のために『バニーガール』に変装します！
あなたはギャンブラーに変装したキンジと共に、アリアの新技・ウサギ耳攻撃をかわしながら――

キンジの兄、カナによって激しく揺れ動く物語を楽しんでいって下さいね！

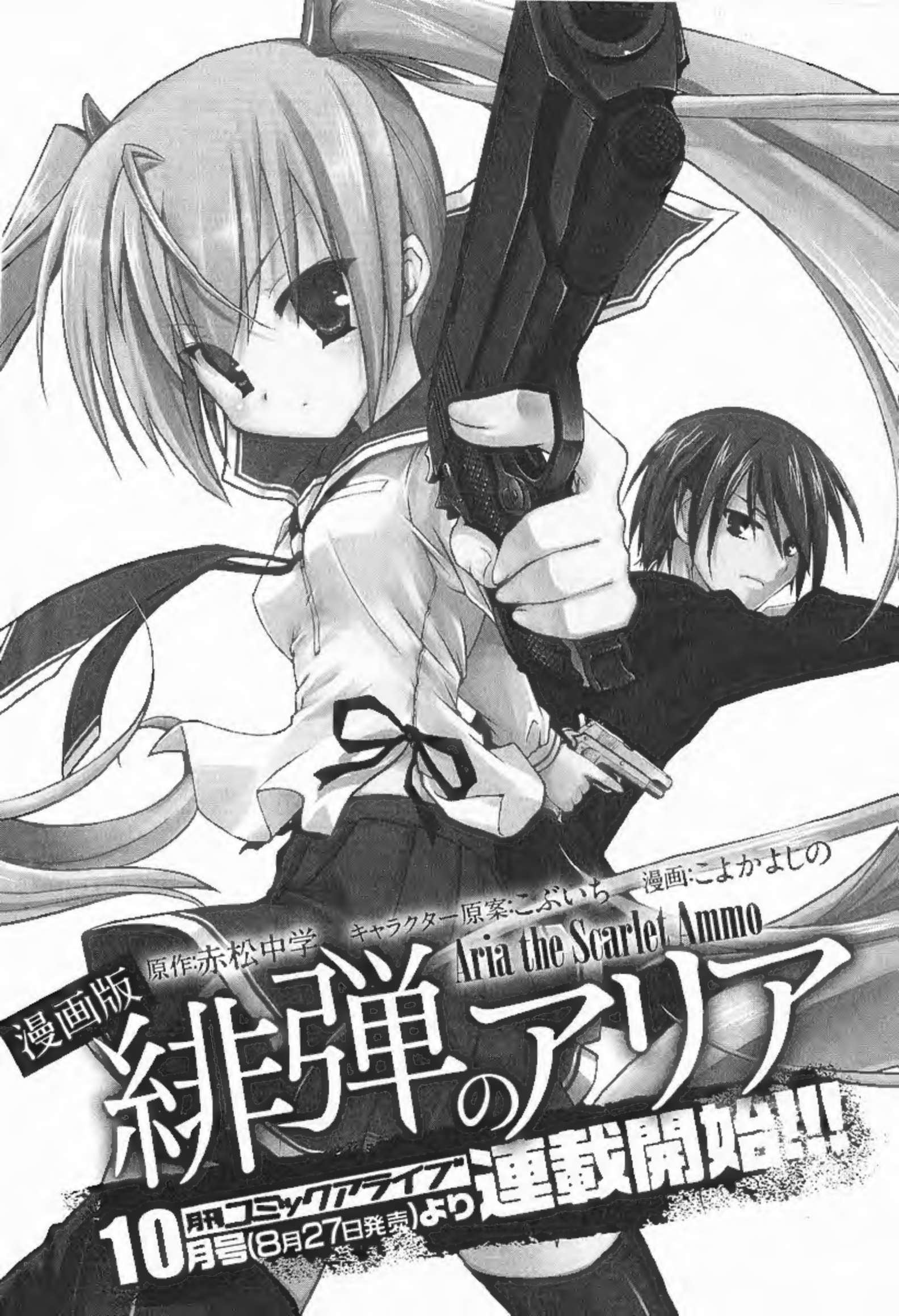
Ⅳ巻には白雪、理子、レキ、ジャンヌ、武藤や不知火ももちろん登場します。
あなたのお気に入りのキャラクターたちも、あなたと武偵高でお会いできるのを楽しみにしています。ぜひぜひ、引き続き仲良くしてやって下さいね！

さらにカラーイラストをよく見ると……そう！　新しいキャラクターも登場するんです。
仲間がふえるよ！　やったねキンちゃん！

さて、Ⅳ巻の発売日は平成21年8月25日。
『緋弾(ひだん)のアリア』Ⅰ巻発売から、ちょうど1周年になります。
その1周年とほぼ同時に……なんと8月27日発売の『月刊コミックアライブ10月号』から、マンガ版の『緋弾のアリア』が連載スタートします！
これからは本編に加えて、毎月、マンガでアリアに会えるわけです。
めでたい！　うれしい！
私、マンガ大好きですし！
それもこれも『緋弾のアリア』をご購読して下さった、たくさんの読者の皆さまの熱いご声援のお陰です。
本当に、本当に、ありがとうございます。心の底から感謝してます。
……と、喜びまくったあたりで紙面が尽きました。『緋弾のアリア』Ⅳ巻は、これにておしまいです。
でも、さみしくないですよ。Ⅳの終わりがあれば、Ⅴがまた始まりますからね。では！

2009年8月吉日　赤松中学(あかまつちゅうがく)

アリアもついに4巻！
今回の表紙はレキだと
思ってたらまさかのカナでした。
びっくりした！
今回は本編で出番の
あまりなかったりこりん
（ナースバージョン）で。
何故あそこに挿絵指定が
ないのか…！という思いを
ぶつけてみました。
楽しかったです。うむ。
それでは5巻でまたお会いしましょう！


漫画版
緋弾のアリア
Aria the Scarlet Ammo
原作:赤松中学　キャラクター原案:こぶいち　漫画:こよかよしの
10月号(8月27日発売)より連載開始!!

緋弾のアリア漫画化に関する調査（ランクE）途中経過

担当：遠山キンジ（東京武偵高校）

漫画：こよかよしの

緋弾のアリアⅣ
堕ちた緋弾（スカーレット）

発行　2009年8月31日　初版第一刷発行

著者　赤松中学

発行人　三坂泰二

発行所　株式会社
メディアファクトリー
〒104-0061
東京都中央区銀座 8-4-17
電話 0570-002-001
（カスタマーサポートセンター）

印刷・製本　株式会社廣済堂

乱丁本、落丁本はお取り替えいたします。
本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などをすることは、かたくお断りいたします。
定価はカバーに表示してあります。

©2009 Chugaku Akamatsu
Printed in Japan
ISBN 978-4-8401-2873-5 C0193

MF文庫J

ファンレター、作品のご感想は
あて先：〒150-0002　東京都渋谷区渋谷3-3-5　NBF渋谷イースト
メディアファクトリー　MF文庫J編集部気付
「赤松中学先生」係　「こぶいち先生」係

※この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・地名等とは一切関係ありません。